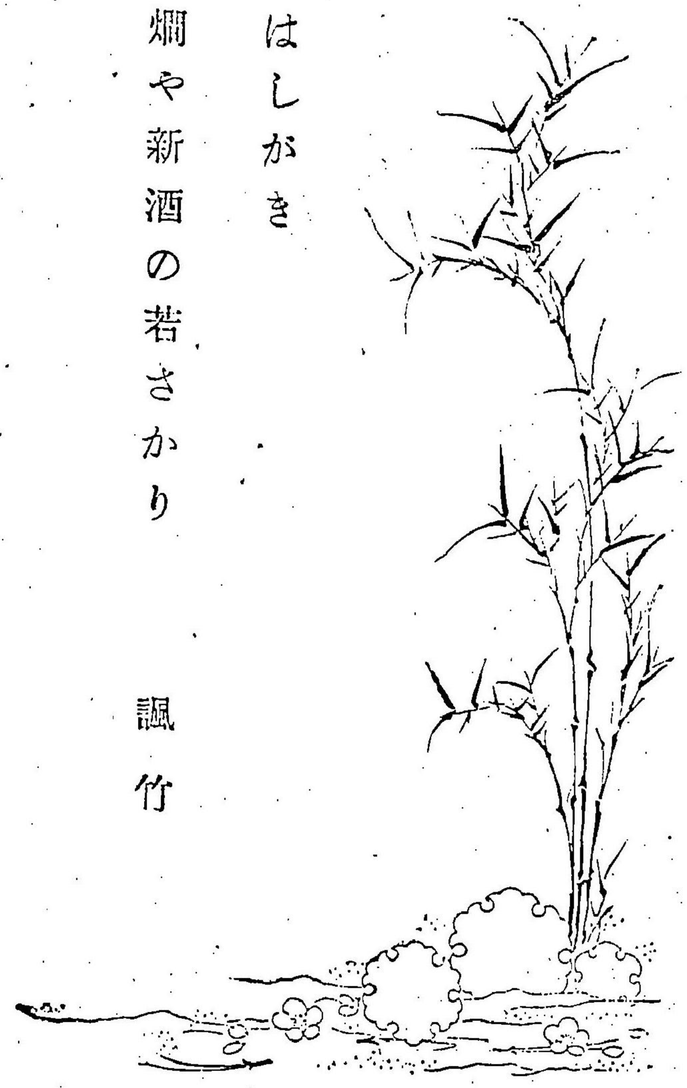
はしがき

糟臭き畑や新酒の若さかり

諷竹



（淺井忠氏畫）

小川一眞寫眞彫刻銅版及印刷

新小說第七號

龜甲鶴

小栗風葉作

（一）見込

新　免許鑑札番號第二〇一三、清酒壹千五百石釀造野杜康右衞門、と謂ふは尾小　張灘と聞えたる知多半田に古株の酒造家、關東一圓を重なる得意にして、銘を龜甲鶴と言へば、一時は新川の相場をも狂はせし諸白なり。

既　新堀の入江を前に一町四面の大屋敷、表門を入れば三間幅の土間一文字に、右は母屋、左は土藏、納屋、物置等立並びたる間を抜けて、其處には宏濶と野田に伴しき空地の右側より正面へ鍵の手に簷を連ねたるは、造倉、ン棟倉、圍倉の三棟、何も八間梁、桁行二十五間の二階造。左側には檢査場、

(一)

火鉢場を始、釜屋、搗屋、樽屋、印屋等の建物庇間も無く立續きたり。暮行く春の一番火入りてより、圍倉の上下には毎年吉野檜の大桶、六尺五寸の胴返八十餘本の呑口を並ぶれば、軈て宵々の稻妻も痩行く頃となりて、何方も麹嗅き新酒のみなるが中に、獨り爰許は仍去年の古酒を絶えさず。然れば未だ仕込前の涸倉には、六十餘本の大桶を始として、百五十餘本の清酒桶、其他酛桶、温桶、溜桶、漬桶、甑桶、半桶等、大小合せて五百に近き桶類一式、收税署の烙印を揃へて、土間には櫂、柄杓、柄束藁、酒袋、麹蓋、麹筵、槽板、搾石、桿棒、組繩等の諸器械戸口も餘さず犇と積重りて、鹽の通ふ隙間だにあらざりけり。

科學の道日に開け行く今の世に、電氣蒸氣の力を籍らず、昔ながらの人手のみにて千石二千石の大仕込は、宛然火事場の混雜、目覺ましくも又忙しきは霜月以後の造倉なり。それに亞ぎて盛なるは釜屋の有樣、手築の竈に七石入の大釜五箇まで架並べたるが、晝夜の絶間無く沸々と奔騰る湯玉の

物凄く、廂の外には直徑五尺、深さ十五尋に餘る掘抜の大井戸七桁、湧出る水は滾々として盡きざるも、仍二桁づゝは常に底砂の露るゝに、汲出す水量の夥さも知られて、傍なる二間四方の大淅場は不斷の小川、流るゝ水の凍る間もなし。取分喧しきは搗屋に米舂く響、冬を隣の終宵二十人約の同勢が、拍子揃へて踏立たる杵の轟、宛然闇に鳴動く雷の如く、能登坊が自慢の追分節は哀に冴えて、時雨來る曉なぞ特に身に沁む。認厥春の初の曙近く、倉唄の一節鶯の夢を破りて、强飯蒸す湯氣に梅が香紛るゝ中掛の頃とならむか、樽屋、印屋は早や薦樽の用意とり〳〵に、鉋、槌の音、薦打ち、霧吹く聲の絶ゆる時なし。

大凡撿査場の卓子に煙草火の備へらるゝは、酛入より搾揚まで七十日不足の間なれど、火鉢場の神棚に祭れる松尾明神は、爰許永代の勸請、一年三百六十五日不斷の燈明赫奕として、晝夜酒脚を守護し給ふさま、寔に家運長久、年と與に堅うなり行く楠分限とは見えたりけり。

酒を狂水とは誰が言初めけむ、啻に飲む者を狂となすのみならで、既に酒といふものから氣の知れぬ水なり。同じ米を潰し、同じ水を用ゐて、同じ仕込をしながら味は桶毎に異りて、年々の出來不出來は、名譽の杜氏が力にも縱ならぬを見れば、强ち經驗のみにも因り難きか。然りとて一滴の水の內より、幾億刧の虫を發見す如き當流の化學者が、やれ乳酸醱酵が何して醋酸醱酵が何の、と醪の中より生出でたるやうな、聞けば成程の理論を陳べて、撒里失爾酸、甘硝石精、さては偏里設林、察加林等と不思議の藥を用ゐながら、却て攝氏と華氏の別も知らざる杜氏が、米と水とのみにて釀成げたるより風味の惡きもあれば、强ち學理のみにも恃まれぬか。左右は松尾明神の御神慮一つにありと覺えて、良きも惡きも其年の運次第、危きは酒屋商賣、身代不殘張りて、壺皿の內の賽目を爭ふ大博奕にも似たるぞかし。

稻熟りて搗屋に杵の轟、今年の春先まで櫂の音勇ましく、晝夜倉唄の節賑

かに繁昌せし家の、半年と經たぬ間に秋立つや。背戶の朝霜と與に萎靡と零落して、此土地生拔とも謂はれし舊家の、苔蒸す屋根に蕪花草の生ふるを見るも珍らしからねば、然る物持の隱居が遺言にも、新田築くと、酒屋と緣組するをば、堅く誡めおかれけるとぞ、實にや當にならぬは若後家の堅いと、造酒代の身代なるべし。

他に例を引くまでもなく、現に五代まで榮續きし野杜の家の、此頃卒に大黑柱の動ぎ初めしぞかし。主の康右衞門が利かぬ氣の外見を張りて、未だ眼に立つほどの襤褸も出さねど、實は去りし年より脚弱の酒のみ打續きけるに、一時は正宗、白鹿と全盛を爭ひし龜甲鶴の銘も、今は全く世に捨てられて、可惜一等有功賞の金牌も、老ひての後の娘姿繪。取分去年の圍などは七十九本悉く火を乞ひ、半は燒酎を蒸溜たる始末にて、此石稅のみも彼是一萬圓近くの損なれば、然らでも年々の不出來に大分の穴は穿きたる折から、さしもの野杜家も油の盡きたる燈火とぞ覺えけるに、然りとては

此儘自滅を待たむも口惜し。今一度乘るか反るかの運を試めさむ、と懲りずも復二千石釀造の資金は、家屋敷不殘質に置きて、吉野槍の圍桶二十本まで新に調へ、米は知多の阿久比米、種麹は糀吉の赤判を選びて、南無や松尾大明神、今年こそはと大山昨尊に立願懸けて、いよ〳〵九月一日先勝といふ日、收稅署へ屆出でたる見込石數は、何故にや、最初の豫算よりは五百石を減して、一清酒一千五百石也。

（二）倉開

年々の不出來、強ち杜氏の所爲にはあるまじ。然れど勝負事にも座を換ふるの例、今年は緣起直しに倉男一同を改めて見むとて、小十年近く會所部屋を預けたる去年までの杜氏は、夏倉の了ると與に躰可く暇を取らせ、新に三州寺津在より傭入れたるは布袋腹の源作とて、十八の曉甑切人足より仕上げて、爰に三十餘年が間、絶えず倉働の普く世間を渡杜氏なり。

酛米も大方精け了りて、寒前四十日目は佛滅に當ればとて、一日延ばして、霜月二十八日、大安萬吉といふ日彌倉開と定まりぬ。杜氏の源作は早速己が在所の年寄へ其旨を言送れば、豫ての手筈、直に代師、倉働都合八人の人足を纏めて、二十七日の午少し過ぐる頃、はや會所の火鉢塲に擾々と入來りぬ。

親仁樣、お變もござりませぬか。おゝ皆も達者で、と互に一年振の積る話は、爐を圍みながら何時果つべくも見えざるに、さあ氣毒だが皆の者、少し休むだらば直明日の仕度に懸つてくりやれ。後程母屋から何か御饗應のある筈なれば、と杜氏が措圖の下より、諾と尻輕に總立となりて、各自に澁紙包の中より働着を取出し、風も凍らむばかりなる寒天に、膝切の筒袖一枚、有合ふ細帶片手に引結びつゝ、跣足のまゝに飛出す軒頭の行潦、日蔭に解けやらぬ薄氷は、硝子のやうなるを脞乎と踏碎きて、思はずも胴顫ひ。

代師は麹室の破損を繕ろひ、年寄は一同を指圖して、明日用うべき米澁の半桶、漬桶を酒倉より取出させて、箍を撿め、濕氣を與ふるなど用意とりどりなる中、甑番は釜屋の竈にはや夕餉をば仕懸けたり。

廳て飯も沸騰る頃には、一同仕事も果てたりと覺しく、我勝に集來る竈の前に濕手を翳しながら、孰も今年始ての家とて、何の彼のと當推量の噂に花咲き、如何も云へぬ好い娘を見たと言ふ者あり。それはと一同其方を見向きて、はて什麼娘か、と中にも皆の垂れたるが訊ぬれば、什麼と云ふて唯美しい〳〵娘と云ふより外は、爰へ作つても見せられねば、と前面の入口に佇める一人の倉働を見遣りて、喃又公、皆にも拜ませてやりたかつたよな。

又公と呼ばれたるは、年齒二十四五の赭顏の、見るから強さうなる骨格。首筋短く、背高く、眼は昏澁として常に眠れる如く、唇厚く、鼻の孔目立ちて大きなるが、煤か、埃か、眞黒に汚れて煙筒のやうなり。手繊綿の筒

袖の袷半纏を素肌に着て、細帶意氣地なく、熊の如き毛脚を露出して、尨したる眞赤の腕を十文字に組み、手首を兩腋に挾みて、唯一人竈に煖むともせず。惘然と柱に靠れて貧乏搖しつゝ、啜れど盡きぬ清洟を時々手もて除捨て居たりしが、靈感けられてやう〳〵振返り、例の昏澁眼に此方を眺めぬ。喃又、皆にも拜ませて與りたかつたでないか、と再び云はれて、何をよと未だ解しかぬる面色。えゝ、何がもないものだ。先程母屋の椽頭に出てゐた娘を、儞も酒倉の窓から、夢中に下瞰してゐたではないかと打明けられて、赭顏の彌赧う成倍りて、何の俺が那麼事を、と慌てゝ口籠るを、此奴めが、隱すのは怪いぞ、と他の一人が調戯へば、野呂又でも色氣があるから可笑い、と片隅にて呟くは誰。

折から飯も熟して、大飯櫃に移したるを甑番は火鉢場へ擔き行く。入違へて母屋の下女が罵詈の忙しげに馳來りて、誰でも可うござんす程に、一寸手を籍してと言捨に引返せば、又六、何か知らぬが儞行て見てくれと年寄

の吩咐。心得て母屋の方へと駈行く迹に、代師は炊爨を大火斗に取りて、どれ最う飯であろ、皆の者、欠鉢塲へ退擧げやうではないか。母屋の臺所には夕餉の支度忙しげに、手ら菜捔へに餘念無きは此家の內儀なり。下女は竈の前に烟たき眼を涙含ませつゝ、半燃の薪に水濺くる折から、轂轆と入來れる又六を見て、竈に懸けたる大鍋を指し、是を火鉢塲へ、とばかりに素氣無う、次手に其所にある擂鉢も一緒に。おゝ烟むと背向くる如し。

內儀は煮物の手を住めて、振返りたる面は有繋に品あり。言語も優しう、倉開の御祝に、と愛相好く言はるゝに、無口の又六挨拶に困じて、腰のみ屈めながら、言はるゝまゝに擂鉢、片手に鍋提げて出でむとするを、待ちやと呼留めたる內儀は、七輪煽ぐ團扇の手を休めて、お杉〳〵と急しげに呼ぶ。あい〳〵、と應ふる聲も媚かしき娘は、納戶の蔭より美しき姿を見せり。

芳紀は十七八の未だ初々しき中に、自ら媚ある半開の薄紅梅。豐腴と下脹に肉つきたる頤の愛くるしう、微に受唇の飽くまで汪洋なる容貌、結立の銀杏返に狗兒懸して、節糸の裲襠を懸け、結城銘選の着物に同じき半纏を着たり。阿母樣、何の御用でござりまする、と淑に內儀の邊に來れるが、端無くも下女の顏を見るより、まあとばかりに失笑して、阿母樣、那を御覽なされまし、お花の那顏を。眞箇に、宛然炭團屋のやうな顏して。お花、お前如何お爲だ、と內儀に心着けられて、お杉の笑ふを尙しげに眺めし下女は、始めて合點の行きたる如く、何か附て居りまするか、と慌てゝ撫下したる手の黑きに顏は一際汚れたり。お杉は彌可笑さに咏へかねたる口に、袂を掩てゝ、息も絶々に際限無く笑ひぬ。

用有りげに呼留められて、又六は彼の大鍋と擂鉢を兩手に擎げたるまゝ、

入口に石の如く突立ちて、人々の笑ひ興ずるを可笑しい顔もせず。只管お杉の姿を打目戍りて居たりしが、顔洗ひにとて、井戸傍へ馳行く下女の後影を眺めし眸を移して、端無くもお杉の此方を見向くにぞ、慌てゝ肯向ける顔の、然りとては合羞げに俯きける。内儀はやう〳〵笑を歛めて、納戸の火鉢の抽斗に青海苔が在つた筈なれば、其をば此へとお杉に言へば、直に取來りて、一把で可うござりまするかと母の前へ出す。内儀は又六の方を指して、足らねば幾許でも遠慮無う取りに來るやうに、と吩咐けられたるまゝを傳へて又六に遞せば、片手の擂鉢に受けて、離有いとも言はず、狐鼠〳〵と出行く後に媚しき笑靨、思はず振返りて獨顔をば赧めたり。火鉢塲には一同爐を圍みて、何かは知らねど、母屋より甕應のある由、最前の杜氏の辭を的に、未だ餉にも爲で在りけるが、又六が鍋と擂鉢の兩手に重げなるを見るより、それお待兼の御馳走が來たわ。甑番、此方へ其飯櫃、と悦て〳〵膳を持出すを、待て〳〵、高が一食缺けたとて死亡もすまい。

がつ〳〵爲ずに親仁樣の來るまで待て、と代師は仔細らしく若い者を窘めて、又公、何の御馳走だや。薯蕷汁か、結構と小膝を打ちて、さあ其方の飯辨慶們、がつ〳〵して居る間に芋でも摺れやい。

やう〳〵薯蕷汁の出來上りたる頃には、今迄見えざりし杜氏も打揃ひて、一同夕餉果ての運動に、いざ町でも素見にて來まそ、といづれも血氣盛の身に然りとは爺穢き猿衣半纏。古手拭を頸に捲附け、或は唐茄冠の一樣に、素足に輪寶鼻緒の栗下駄を曳摺りながら、大浪の退くが如く、動搖鳴き出づる迹には杜氏に年寄、さては代師の三人のみ遺りけり。

何やらむ思ありが如く、少焉兩腕組みて、默然と圍爐裏の中を凝視めりし杜氏は、やう〳〵頭を擡げて吃と二人を見遣りつ。此方等を留めたは外でもないが、實は、と火箸を把りて爐の火を撒けながち、些と内々の相談事。はて相談とは、と二人は思はず膝を進めて、言合せたるやうに杜氏の面を目戍りたり。

爰の會所を預かるは俺も初度。去年までの事は知らねど、今年の見込屆は千五百石に違無く、現在門札の表面にもある通り、俺も今日まで然うとばかり思信めてゐたに、最前母屋へ呼ばれて、直々旦那の酛豫算を聞けば、何が無しに唯二百五十と謂ふ注文、如何も俺には此勘定が腑に落ぬわさ。成程、千石の仕込に十五酛とか、乃至二十位の餘分は隨分有る例。腐敗、不熟の用意とも思はるれど、千五百石の蔭にて百からの不用酛取るといふは、手に櫂胼胝のある俺も是が初耳。何と年寄、此方は下總三界まで倉働で渡つたとやら、這麼な會所は關東にも有るまいが喃。はてさ胸算用でも知れ切つた事、石に四兩といふ高い稅金納めて、米食ふ人足を多勢抱へた上に、那麼な法外な酛を費ふて、什麼利潤の大きい造酒家なりとて引合ふことかい。察する所、是ぞ政府の目を偷みて、御法度の密造の高は少くも五百石、さて〳〵不敵を巧むだものかな。

地躰杜氏を合せて十人といふ倉働は、日に一つ仕舞の千石造が手一杯の人

足にて、千五百石も大分の無理と思うて居るに、今又五百石の密造を合せて二千石の大仕込。此一つ仕舞にも不足の人數にて、日に二つ仕舞も働かねばならぬとあつては、假令年來の旦那筋なりとて、有意な文句も言はずには居られまい。如何だ代師、義理も借錢も無い生面の會所で、二人前づゝ働かされて、加之世間並より廉からうとも、決して高うは無い少な給金で、腕力でいへば二人前もあらうといふ立派な躰を、喃年寄、お互に順に縛られて居られうものか。

縱又一同に二人前の給金與れるにせよ、此方達は知らぬ事、此布袋腹の源作は如何な〳〵、默つては引退がらぬわ。と言ふた所で先方に執太く出られて、不承知ならば頼まぬ分の事、疾々と會所を明渡してもらひましよ、と此儘解傭に爲れるも氣が利かねば、今日の所は故と順に、那麼氣ぶりは見せずに退去りたれど、何の此儘濟まして措かうか。軈て酛入も了ふて、何處にも躰の空いた杜氏無く、俺達に暇を出さば、直添掛に手を突かねば

ならぬ大事の時分を見込み、御法度の密造を籍に、給金の外の若干かを無心してやらうと云ふ所思よ。

然れど這麼事多勢の耳に入れては、結句破壞の原なれば、左右は此三人の胸に藏めて、纔て細工は歷々仕揚の上。若い奴等には一盃づゝも飲ませ與れゝば、と腹黒き源作が始めて明かす魂膽の、始終を聞取る兩人も孰慾に は目の無き輩、一も二も無く同意して、仍も密々諜合せぬ。

折から庭に草履の驚歩、誰やら立聞く氣勢を始めて心着きける三人は、思はず顔を見合せたり。代師は暴かに框の障子を引開くれば、殘らず出懸けたりと思ひし倉働の、惘然と其所に又六の立姿。杜氏は轟く胸を推鎭め、倘一人か、他の奴等はと問へば、知らぬと言ふ。一緒に出懸けて知らぬとは如何した事、途中で離れてか、と更りて代師が訊ぬれば、否と頭を掉りて、俺は曾と一緒に出懸けはしませぬ。それならば今迄何所に居た。又、倘は其所で立聞しをつたな、と杜氏は眼を瞋せぬ。然らでも野呂松と仇名

せらるゝ又六は、一同の血相に呆れて、對手の怒を解くべき早速の辨疏も出つればこそ、唯途方に晦れてぞ居たりける。代師は故と面を和げて、さあ又、倘は今迄何所に居たのかと其を言へ。外か、雪隱か、爰へは何時來たのに、何で又倉の中へは入つて居たのだと詰められて、應は得爲ず差俯く時、始めより一言も云はざりし年寄は、馬鹿めと矢庭に笑出して、涸倉と云へば、倘は又母屋を覗いてゐたなと星を指されて、又六は顏を赧め、いとゝ語は無かりけり。

（三）米淅

土地の醪にも酒屋の百日とて、苦は石上の百日に劣らずと謂へり。實や一夜酒の湧くべき土用の半にさへ、仍冷々と爰許のみは秋風の涼しき大倉の、冬は殊更氷室のやうなる二階に、火氣は窓洩る月影を灯にして、糟臭き園

桶の間に米俵を敷き、木枕に煎餅布團。温は未だ爪頭に行亘らぬ中、はや一番鷄の鳴音と與に杜氏に引起され、惜しや、見かけし夢も半に漸塲へ飛出せば、何時しか大屋根の彼方に陰約と東雲の色は動けど、有繋に長き冬の夜の天には仍一面の小糠星。闇は黒白無き廣塲の隅の釜屋には、はや籠を焚附けたりと覺しく、戸口を洩れて赤き光の長く地を這ふ邊、霜の華白く、折節窟の外に片々と吐出る炎の影に、黒物の動くは甑番なるべし。

働衣といふも纔に肌を覆ふに過ぎざる單衣一枚、膝より下は空脚の、徒跣に踏む漸塲は凍て延鐵の如く、十尋に餘る握太の釣瓶繩の霜を扱きて、指も所れなむ冷さに殘の夢まで覺め果てぬべし。繩襷十字に二腕まで露出し、二斗漸の大半桶を二人して、粉にも成れよと漸立つる懸聲勇ましく、渾身は時ならぬ汗に浸れと、腕首眞赤に腫揚りて、一漸了ふ頃には手頭に全く感覺はあらざるなり。

一漸二斗の米に幾度知らず換ふる水は、澄まして滑み、滑みて漸ぎ、復汲入れて澄ます。偖て漸揚げたるは傍より直に漬桶に移して、浸したる水は鰡て復新しきに換ふ、是ぞ麹の種米なる。

夜は全く明放れて、霜に凍れる曉の鐘の音重々しう、程無く母屋の臺所に引窓の開く頃、やう〳〵麹米を精け了れば、火鉢塲には仍有明の灯の下に一同朝飯を掻込み、腹も出來て、園爐裏の邊に全身の温まるに連れ、瞼自ら弛みて、其儘其所に轉と昨夜の續を夢るなりけり。

いづれも五躰に醪の匂浸みたる永年の倉男なれど、總じて酒屋働きは大寒限りの、過ぎつる春の搾揚より絶えて半桶にも觸れざりし身の、今日久振の漸塲に太くも憊れたりと覺しく、杜氏を始め正躰もなう昏睡けたる中に、又六は獨り子然と横にもならず、莨喫はぬ身の所作無さに、大なる叭のみ續様に洩しぬ。折しも母屋の雨戸繰る音に、屹と耳を欹てゝ、何やらむ思寄れる事ある如く忙はしげに立上りしが、一邊已が周圍の寐姿を眴せし後、潜戸の開閉密に廣塲へ出でにける。

涸倉の二階の窓より針に下瞰せば、忍返の羽目圍も効無く坪内は手に取るばかりにて、枝態面白う手入しなる植込の樹間班に、母屋の中の間は一目に壁樹まで覗かるゝなり。中にも最も見頃なるは、左の端なる窓の下に清酒桶を伏せて、是を足場に又六は、例の眞赤なる飯臺面を鋏網に擦附けながら、塀の内なる一本高き赤松の梢を邪魔に、退屈したる山門の二王の如く、延びつ、屈みつしてゐたり。

母屋は今しも朝の掃除と覺しく、昨日結立の髪を大事に手拭に包み、衲懸の効々しう、棕梠箒片手に中の間を掃出すはお杉なり。軈て掃除も了れば、庭石の上なる水仙の盆栽を取りて、一葉つゝ丁寧に砂を拂ひし後、手水鉢の水を一杓、更に己が手を滌がむとする時、不圖面を擡げしが、其儘戛然と柄杓を投捨てゝ、奥の方へ遁入りけり。

雲隱れにし月も待てば復現はるゝ事のありなむかと、又六は仍窓に取附きたるまゝ、氣永う下瞰して居たりしが、落月再び昇らず。飯でも食ひに行

きたるか、お杉は遂に出來らざるに憤れて身を揉めば、足場の桶の微微微微と底の落入らむとするに驚きて、やう〳〵其所を離れむとする途端、見たり人影。嬉しやと再び面擦附けて鋏網の隙より覬へば、見たくも無き肥滿の下女が、雜巾懸も匆々に濟まして、其儘礮と閉行く障子に一面の日影眩く、彼の一鉢の水仙のみぞ殘れる。軈て塀を潜りて轂觫と年古る黒猫、椽頭の日向に鞠のやうなる背を曝しつゝ、長閑に居睡る耳邊に鶯の早鳴、何時の間に來にけむ、苔蒸したる石燈籠の笠に宿りて、復軒端の手拭懸に移りけり。

恁て午頃まで待つ人の姿は遂に見えず。偶障子の啓けば、似もつかぬ大面の主が便所に行くなるに、さしもの又六も今はと諦めて、龍鐘火鉢場へ還れば、はや午餉も濟みて、又例の町を素見行の出懸と覺しく、今日は年寄さへ打交りて猿衣を被りながら、又、儞も出たくば疾く飯を濟まして後から來い。馬鹿めが、腹の空くのも忘れて、今頃まで何してゐたのか知らね

ど、お星樣を取るやうな及びも無い眞似は、可い加減にしろと喚く傍より、然う言ふたものでもない。先刻お孃樣の用だと言うて、母屋の阿爨が又公を探してゐたと一人が謔かふを、眞になりて打ち消す又六の顏は燃ゆる如く、嘘々、嘘を吐け。嘘ならば嘘にして措けだ。色男、火の用心を頼むぞよ。

如何も寐足らぬ故か、睡うてならぬ、と次の間へ杜氏の入りし迹の淋しく、圍爐裏の前に默然と獨思案に打沈みたる又六は、時々思出したるやうに氣味惡き笑を洩すと見れば、俄に又悲しげなる色を浮ぶる中、何思ひけむ、持ちたる火箸に爐椽を毆打りて、撞と仰向に踏反返りざま、お杉〳〵と物狂ほしう獨り言ちけるが、何時の間にやら睡入りけむ、軈て鼾の聲は聞えぬ。

暮易き冬の日脚大分傾きて、母屋には風呂を焚附けたるか、喧しき車井戸の轢轆、樋を傳ふて湯桶に濺ぐ水音手に取る如く聞えぬ。又六は怖しき夢

などに魘れたらむやうに、勃起と飛起き、其儘直に廣場に出行かむとする物音に、次の間の杜氏も目覺して、又、何所へ行くと障子越に呼留めたる聲音は、叭交りの激しうもあらざりしが、他に心奪られし又六が耳には雷の如く、世にも打魂消たる面色。那方へ行くならば、次手に昨日籍りて來た其鍋と擂鉢を返して來い、と他事無き辭に心落着き、言はれしまゝに急ぎて持行く。臺所には肥滿の下女が、毎ながらの無愛相に、何やら言出むとせし又六も繼穗無くて、手持無沙汰に佇めば、未だ何ぞ用でもござんすかと訊ねられて、遽に出づる語も無かりしが、おゝそれ、連木を忘れて來たと言捨に飛出しぬ。

後をも見ずして、淅塲の邊まで駈來りたる又六は、不圖立停まりて振返りつ。更に氣遣はしげに四下を眴せしが、人氣無きを見定めて、又もや涸倉に忍入り、例の如く二階の窗より下瞰せば、松尾大明神、椽頭に其人の立姿。今湯後と見えて、素肌に浴衣を引被けたるまゝ帶も爲ず、法ばかりに

掻き合せたる前を片手に抑へて、雪のやうなる胸元現に、少に色つける乳房の絹かしく、淡紅に上氣せる面は得も謂はれず艶なり。

又六は面熱りするまで心衝跳て、眸自ら凝り、呼吸急しく、我を忘れて見惚るゝ者ありとも知らぬお杉は、おのれの外には庭の樹立。設見るものあらば梢の鳥と、更に取繕はぬ姿亂次く、襟首の後毛を煩く濡手拭に掻揚げて、障子の蔭に脱捨てたる着物と着更へ、下締片手に褄を揃ふる時。又六は不意に背を搭されたるに驚き、咄と叫ぶ聲に始めて心着きたるお杉は、羞かしさに目も眩まむばかり、紐も結ばで通入りけり。

我物に眺めし蝶の羽色の仍眼に殘りて、飛去りし迹をさへ飽かずも凝視むる又六の、宛然醉へるやうなる後より、馬鹿め、可い加減に臓けて措けと又搭されて、やう〳〵狐の落ちたる如く嘘嗟と振返れば、其所に突立ちたる年寄の然りとは苦々しげに、さあ疾く行つて、夕飯を形附けて了はぬか。眠が覚れるわと喚散して、下りかけたる階子の中段より、そい、遅々せず

に蚤く來ぬか、手前には這海昏くなつたのが解らぬかやい。

日は西の端に落ちて、一時燃ゆるやうなりし夕映のやう〳〵薄れ行く頃、釜屋は頓に悪りて、今朝淅置の米の蒸揚る傍より、倉働は總懸りに造倉へ運びて、土間に敷きたる新筵の上へ投明くれば、盛に立騰る湯氣はさしもの大倉一面に溢れて、人顔も見え解かぬ中に、又六は年寄と與に大肌脱ぎの兩手に、今蒸立の燃ゆるやうなる強飯を、熱い顔もせず片隅より掻均す。

忽て人の體温ほどに冷めたるをば、代師は麹室に移して、殘らず薦筵に圍ひ了りたるは、世間寝鎮まりて、彼是初夜過ぐる頃なりき。

(四)　麹　入

麹室は造倉の片隅に築かれて、廣さ十疊餘、一面の小棟の上に薦筵を布き、天井より四方まで餘す所も無く薦にて圍ひたるが、厚さ一尺に越ゆるを猶又筵にて捲きたれば、鼻息ほどの風も通はず、一室に籠りたる蒸米の温氣

は永く殘りて、爰許のみは毎も花咲く彌生の如し。然れば翌朝に至るも、昨夜のまゝなる强飲の冷却らぬ間に、手早く種麹を摩混せて、再び室内に圍ふなり。

恁くて今日一日の仕事は了りぬ。一同は例の如く火鉢塲に團欒して、恁る折の徒然に、毎も又六を寄りて群りて玩物にしてゐたりしが、其も飽きてや、年寄を頭に三四人の倉働は、今日も復町を素見に出れば、杜氏は獨り釣道具を携へて、前なる入江の魚釣りに行く。迹には手作の盤を圍みて、飛車奪の下凡將棋に餘念も無き代師と倉働の一人、傍に頰杖突きて、抽斗違ひの助言を爲るは甑番なり。圍爐裏の前回には、五合升を枕に長々と平臥りたるが、一鞭與れて小栗の判官、と氣味惡き聲出して口三味線の源氏節。此方には又六一人談敵も無く、頤も外るゝばかりの大叭を洩らしつゝ、連に貧乏搖を續けたりしが、人は知らぬ間に、何時か例の涸倉の二階へ脱けぬ。

下瞰す中の間の障子は、堅く閉切りて、戀しき人の姿も垣間見むやうなく、唯昨日の水仙のみは仍手水鉢の許に在り。椽頭には片餅の黴びて、宛然綠青の吹きたるやうなるを筵に擴げたるが、赤松の梢に翼を休むる一羽の鴉の、先より聲をも立てゝ、首差延べて廂の内を覗ふ氣色なりしが、軈て沓脱の上に下りて四邊を窺がふをば、又六は遙隔つる窓の内より、叱々と聲懸くる時、銜と片餅の一顆を銜へて、慌忙しく飛去る羽音に、障子はやうやう啓きて、毎も艶麗なる半身を現したるはお杉なり。それと又六は思はず鐵網に面擦着けて、下瞰し、瞻ぐる途端、障子は磤と再び閉されて、雲間の月の少に影を洩して隱れけり。

髭在れば貴き人、世辭好ければ親切者と心得たる正直一圖の、何事も其と端的に言はれたる後、始めて果然と頷くやうなる又六も、毎もお杉の我姿を見るや犬に狐の慌てゝ影隱すを有繫に訝く、さては我を嫌ふてかと心着けば、一圖に其と思極めて、放心したるやうに火鉢塲へ歸りて後も、宛然

病める者の如く、飯になりても箸採る元氣はあらざりけり。

然りとて諦めたるにはあらす。思はなか〳〵募りて、午後も復涸倉の窓に三時間餘も立盡せしかど、中の間の障子は一度も開かず、お杉は遂に姿を見せざるに悲く、又六は幾と泣きも出さむ氣色にて二階を下りけるが、廣場に人影無きを見澄して、密に坪の内の板塀の邊に忍寄りぬ。内には人の話聲聞えて、時々可懷きお杉の笑聲も交るに、愈よ身を擦寄せて、健か耳を欹つるも、強ち其談をば聞取らむとにはあらず、唯其聲の懷しくてなり。少焉して障子の開く音するに、慌てゝ後へ飛退りしが、直に復擦寄りて、羽目の隙より内を覗かむと遄れど、効無くて、更に節穴を探す時、内にも其と心着きけむ、誰だと尤むる主の聲に、驚きて遁出す後より、手水鉢の水一柄杓浴びせられて、這々の躰にて火鉢場に歸れば、其態はと代師に問はれ、又六は當惑の頭を搔きて、是は其、一寸其。一寸其も無いものだ。又公、儞は何を覗いてゐた、と框の障子を開けて入

來るは、今朝源氏節に憂身を窶せし倉働の一人。撞乎と圍爐裏の前に大趺座を組みて、皆まあ聞けよ、今俺が樽屋部屋から見てゐたらば、野呂又めが喃、と塀越に水浴せられし一部始終に、嘘も少しは加味して語れば、一座哄と自笑して、業曝め、何だと云ふて那麼氣の利かぬ眞似を爲をるのであろ。はて、可憐しい色事か。成程那母屋の娘に？俺も其後の模樣は一向聞かぬが、いづれ最う出來たであろ。喃又、些と惚氣でも承らうではないか、と故とらしう問懸けられて、然りとは迷惑さうに忸怩するを、彌乘地になりて、何も那麼に隱慝てせずともの事、さあ〳〵蚤くと詰寄せたり。

嗷〻と口喧き群烏の嘴に弄られて、身は芋虫の手足も出でず、唯面伏の首を俛れて、耳の根まで眞赤にしたる又六の、譬はゞ大南瓜に夕榮の照添ふ如く、外に見る目も笑止とや思ひけむ、杜氏は一同を制して、愚にも付かぬ言云うて居ずに、さあ今の間に一寐入して措け。今夜は麴の盛分で夜が

更けるぞ、と次の間に退還りて、又、俺に些と談が有るほどに、此所へと手にて座を叩く。原來は復毎の口遠き小言か、と心怯れて進みかぬるを、促さるゝに是非無く、嬶の傍に悸々と蹲寄るを、杜氏は見遣りて、此頃から倆の妙な行事は、俺も氣の着かぬではなけれど、若い内には有勝の洒落、と今日までは寛大に見遁して措いた。所が最前母屋の下女が、故々俺を呼出して冒ふには、誰やら倉の者が、毎日酒倉の二階から母屋を覗くとて、奥の衆が厭がられて、取分お嬢樣は中の間の便所へもお出でなされず、故に故上便所へお廻りなさる始末じやとて、何にも知らぬ俺に散々の口小言。成程、倉の奴們の麁想は杜氏の麁想も同じ事、如何にも皆の監督の届かぬやうにて、手前よりは勞頭遣俺が申譯が無い。喃又、重ねて那麼無益眞似を爲るなよ。縱令倆が死ぬほど焦れたとて、先方は千石酒家の娘子樣、到底倉働風情の及びも無い事と諦めろ。喃思切れ、斷然と思切つて了へ。理なる杜氏の異見に、又六は返す辭も無くて、默然と頭も得擧げぬを捨し

げに、喃又、斷然と思切つて了へ。男らしく思切れ、と重ねて迫られて、やう〳〵搖ぐる面には涙の痕著く、杜氏は膝を立直して、何、否だと、否でござりまする、あの思切らぬと言ふのか。馬鹿め、手前も少しは物の道理を考へて見ろ、假令思ふて思ふて死ぬまで思徹しに思ふとも、所詮磯の鰒魚で思の達く時は有るまい。到底も女房に出來ぬばかりか、滅多に手さへも握られぬと知りながら、那麼的の無い思を運むでおやうより在所へ歸れば。無益〳〵、親仁樣、其は無益でござりまする、在所の娘子と比較にはなりませぬ。設ひ又俺がの女房に成らうが成るまいが、那麼事は一向管ひもせず。第一那觀音樣のやうな娘御を、何の勿躰ない、嘘に爲うなどとは、飛むでもない。唯外ながら那美しい姿を見てゐれば、それで俺の思は霽れるのでござりまする。親仁樣が何と言ふて下されても、是許は如何な思切る事ではござりませぬ。否でござりまする、と一圖の執着怖しくも、日頃の無口に引

更へて、然りとは呆れて源作も有間辞は無かりけり。

美し過ぎて女房にするは勿躰ない、唯姿さへ拝むでゐれば、それで氣の濟むものとわらば、何有も對手は爰の娘に限るまい。今一段美しい、出來の好い、左甚五郎とやらが彫つたやうな女人形でも買うて、一生其を見てゐたらば如何だ。什麼觀音樣のやうな女にもせよ、生きてゐるからには年も老る、皺も寄る、死も爲る。人形ならば百年眺めてゐやうとも、姿の變る憂無く、第一骨折つて涸倉の窓に縋附かずとも濟めば、塀越に水浴せられる心配も無いわい。喃又、悪い言は云はぬ程に、人形と見立替を爲ろ、と冷笑ふ杜氏の顔を、又六は怨めしげに打目戍り、何となりとお言ひなされ、親仁樣の知つた事ではござりませぬ。俺の毎日眺めると謂ふのは、那麼な年を老つて皺が寄つたり、醜うなつて厭になるやうな果敢ない物ではござりませぬ。高が五尺に足らぬ小な躰を、什麼に念入れて粧つてゐればとて、それは唯の一度で、頭の先から足の先まで飽く程見られまする。それに引

更へて、二度見ても三度見ても、四度でも五度でも、見れば見る程仍見た手足の外に、何か謂ふに言はれぬ不思議なものが在つて、俺の毎日見に行うなりまするのは、自分にも解らぬと、那白い顔と、綺麗な着物と、繊いのは其でござりまする。其證據には、然うして始終見てゐる娘御の姿を、今爰で想起さうとしても、唯何とも附かぬ影のやうなものが胸に浮んで來るばかり。甚麼顔で、甚麼着物を着てゐたやら、一向記憶は無いのでござりまする。記憶は無けれど、又何しても忘れられぬと謂ふのは、其姿の外に、何か俺の胸に泌込んだものが在るのでござりませう。顔や躰を見ずに何を見ると、不思議に思ひなさるも道理、それは俺にも解りませぬ。解らずに居れば、無性に悲しくて、何が無しに不快て、唯鬱勃して、何とも彼とも我慢が出來なくなりまして、不知不識眼きに行くのでござりまする。眼いて何を見るのか、其は自分にも解りませぬ。

何を云ふのやら、夢に雲掴むやうな言ばかり。俺には全然理が解らねど、左も右手前は見ずにはおられぬな？理窟は無しに唯見て居れば、それで成程傭の氣は濟むにもせよ、若しも先方が傭を厭つて見せぬ時は何と爲る。現に酒倉から覗かれるのを可厭がつて、中の間の便所へさへ行かぬと謂ふではないか、と急所を突かれて、其さ、其を俺もと言出でしが、口を噤みて其儘悲しげに俯くを、眺遣る杜氏の然りとは得意顔に、だから諦めて了へと言ふのだ。

又六は力無げに圍爐裏の傍を起上りて、其儘一同の臥したる次の間に、己も肱を枕に目は映げど、胸は苦しく物思に亂れて、微睡とも爲ざる間に、はや日は暮れて、夜は更けぬ。廳て火鉢塲の時計の十二時を打つを合圖に、一同と與に飛起きて造倉に到り、代師が室より取出す今朝の蒸米の、はや一粒毎に小紋のやうなる桃附きて、麹の香も高き出來榮を祝ひつゝ、悉く麹蓋に盛分たり。

桃附きたる蒸米の全く麹と化りたる翌朝、手返を入るゝ前の少時の間を偸みて、又六は又例の如く酒倉の窓より覗きしかど、今は正しく嫌はれたりと覺しく、皆ともお杉の姿を見せざるに、酷くも慣れて、已が寐所と定めたる炭俵の桶の間に、煎餅布團を引被きて打臥したるが、午餉にも來らず、夕餉にも出でず、夜半に到りてやう〳〵無理に引起されたり。例の麹蓋に盛りたるを再び筵に移して、今まで室に圍ひ置きたる暖氣を冷さむ爲、圍倉の土間に擴げたる麹を、一同と與に手入する樣の常と變りて、然りとは力無げなるが、著しく誰が目にも著きぬ。

（五）　酛　入

麹も出來て、彌々今日ぞ酛入の朝は、例の如く一同寅刻起しての米淅。總じて麹の種米と等しく、蒸揚げたる强飯は筵に移して、全く温氣の去りたる翌日の午頃、麹と水とを合せたるを半桶に分ち、其の夜大方水の退きた

るを見て、手酛と稱へて、一時間毎に手もて攪旋し、混合せて風入を爲す事晝夜の差別無し。今までは半遊仕事なりし倉働の身も是より忙はしく、晝は更なり、鐘凍る夜半も、霜結ぶ曉も、造倉の二階に音頭取る聲寒げに冴えて、藏やい〳〵さい〳〵さい。

然る程に又六が戀は如何になりけむ。見る事も霞隱れの高根の花に、及ばぬ戀と遂に歸めたるか。或は堰かれて募る谷川の水も、少時忍の森の下葉に隱れつゝも流るゝか。左にも右にも其後は涸倉の二階にも上らず。縱令上りたりとて覗くべき暇は無くて、何時か山卸も濟めば、忙しさは彌々眼も眩らむばかり、晝夜酛搔に追はれ勝の身は、半桶の傍に櫂執りて、米摺唄の一節、哀に力無く聞えけり。

仕込より八日目、やう〳〵酛醪の味はひ熟すれば、半桶より酛桶に移して、櫂入も匆々に、少時の骨休めを釜屋に寄集ふ時、又六〳〵と氣立たましう杜氏の呼ぶに、急ぎて火鉢場へ行けば、其所に見馴れぬ一人の男立てり。

年齡三十前後、黑と紺の縞スコッチの背廣に、同じき胴衣、竪縞の大柄の窄袴を華奢に穿做して、綾羅紗の良古りたる被衣を着たるが、黑の山高帽子の庇の下より金樣の眼鏡を輝かし、色白の細面に口髭麗しく、片手に酒造撿査の尺度を持ちたる、一目に收稅官吏と見るより、又六は連に小腰を屈めながら、親仁樣、何の用でござりまする。お役人樣を撿査場へ御案內申せ。俺は一寸母屋へ寄つて、直後から行く程に、不調法の無いやうにと杜氏の辭に、又六は働着の襟搔合せて、卒とばかりに案內せり。

撿査場は造倉の簷下に設けられて、麁末なる卓子に二三脚の倚子を置きたり。又六は煙草盆の火入に釜屋の炊燼を入れて持行けば、收稅吏は卷莨を吸付くるより早く、銜と倚子を離れて、造倉に入らむとするを、何うぞ且く、唯今親仁樣が參りますれば。否、杜氏は參らずとも可しい、其方で解ると言捨に進入りぬ。

程無く撿査簿を小腋に抱へて、算盤片手に主の康右衞門。少しく遲れたる

杜氏は、倉の入口に佇める又六を見て、お役人樣はと問へば、物は云はで二階を指すを、野呂松め、何故お附き申さぬ、と慌てゝ二階に昇行く。康右衞門は帳簿を卓子の上に置き、續きて階子を昇りしが、半にして又六を振返り、お前は母屋へ行て、お杉に茶を持て來るやうに云ふて來い、お杉に云へよと念推したり。

心得て臺所へ走行けば、森閑として、肥滿の下女さへ在らぬに、爲方無く土間に佇みて、人待顏に奥を見込む折から、お杉は何やらむ用有りげに出來りしが、又六の姿を見るや、其儘衝と引返さむとするを、慌てゝ呼留むれば、是非無く拂返りて、何ぞ御用？と逃足に立留りぬ。又六は口供取らるゝ鼠盜の如く、唯理由もなく惕息しつゝ、辛くも命けられし通を告ぐるに、お杉は不審の面色にて、私にでござんすか、と問へば頷くを見て、然うと小首を傾けしが、只今直に、と火消壺の炭を臺火斗に採りて、急ぎて奥へ入行きぬ。

他には用とても無けれど、又六は何とやらむ仍物足ぬ心地して、誰待つとしも無く佇みけるが、やう〳〵心着きて立出る右方の、坪の内の切戸の開放ちて、お杉は爰より出でたりと覺しく、遙に其人の後影可懷く、自ら足は其方に向ひて、我にもあらで再び撿査場の前にぞ來にける。お杉は羽織を脱ぎて、帶のみ紫繻子の新しきに結更へ、持來りたる茶盆を卓子の上に置き、急須を取りて惕息茶を注がむとするを、彼方の倚子に澁面作りたる康右衞門は、忙しく頭を掉りて、其ではない。一服立てゝ來いと苦々しげに言はれて、然らでも羞らひ勝なるお杉は耳朶まで赤うしながら、はいと應答も口の内に、急ぎて引返す後姿を瞥と見遣りたる收稅吏は、直に又伏目になりて、故と撿査簿を一二枚繰擴げて後、久しく片手に持忘れたる卷莨をやう〳〵口にして、然氣無くお杉の後影を見送りながら、虛空に向ひて長閑に吹けど、煙の出ざるに慌てゝ煙草盆を引寄せたり。

抑も這收稅吏は、二三年前より此地の出張所に在勤して、彭澤令之助と謂

ふ名は爰許の檢査簿にも度々。顏も見識合の間なれば、役目濟みての上は談も碎けて、去年までは確二千石のやうに覺えましたが、今年は些と耗りましたなと訊ぬれば、康右衞門は故とらしき笑を浮べて、仰の通り、今年は未だ五百石而已でござりますれど、來年はもう五百石も耗らして、漸々少くいたしまする心算。寔にはや意氣地はござりませぬ、と額を撫づれば、それは又何故な？折角これまで手擴く營られたものを。手前も不本意ではござりますれど、何分稅金が高うて、碌々利益もござりませぬ上に、年年御規則は難うなる、御檢査は嚴うなる。到底從前のまゝに營業いたすも覺束無く、殊に又承れば、仍此上に石稅の騰りまするやうな世間の噂。其では酒屋の立行かぬのも無理はござりますまい、と復前の渋面に返れば、果然、石稅の點は或は然うかも知らねど、檢査は什麽面倒になりたりとて、不正の廉さへなくば、一向貪着するにも及ばぬでは有りませぬか、と彭澤は冷かに康右衞門の面を見たり。

折からお杉は日頃嗜む千家の手前を見せて、大服の海茶一椀淑に持來れば、彭澤は俄に姿勢を正して、會釋も大風に受取りて啜了り、今御一服とお杉の薦むるを、否、もう充分でござりまする。御主人は？と讓れば、康右衞門は更に一應薦めし後、私は餘り欲しうも無ければ、もう可し〳〵と頤にてお杉を追遣りぬ。

又六は前より圍倉の戸口に蹲りて、簷頭に干揚げたる温桶の蔭より、他眼も振らず、只管お杉の所爲を目戍りて在りけるが、今しも母屋の方へと立去る姿を見送りて、急ぎ駈出る後の靴音。驚きて振向けば、最早檢査の了りて歸ると覺しく、例の尺度を腋下に彭澤、後より康右衞門は小腰を屈め、お閑暇の節は何うぞ些とお遊びに。唯今お談し申しました應擧の、御鑑定もお願ひ申したければ。それは是非拜見。

(六)抱湯

酛醪を酛桶に打合せてより二日目の朝、獨り造倉を見巡りたる杜氏は、慌忙しく火鉢塲に馳返り、温桶だ〳〵、温桶が遲れたと喚きながら、上框の障子手暴に引啓けて、昨夜の鹽梅では、未今日黄昏まではと思うたが、いやはや太甚い見込違ひ。さあ年寄、更一度箍を改めた上、直に温桶を入れさせて下され、と足下より鳥の飛つやうなる指圖に、一同身繕ひする間も有らばこそ、慌てゝ釜屋に駈附け、豫て洗ひ置きたる温桶に微温湯を塡め、蓋をば打ちて酛桶に差入れ、入れたる儘時々温桶にて酛醪を攪旋せり。

恁くて二十四時を越えたる翌日、這度は熱湯と塡め更へたる温桶を、再び酛桶に法の如く納めて火鉢塲へ退擧れば、御苦勞〳〵、と例に無き杜氏の笑顔も不思議に、今日は酛入の祝に、何ぞか饗應の出る筈なれば、皆が蚤く支度して母屋へとは彌々不思議。爰の家には酛祝も無い事と諦め居りし

に、それは〳〵、と手早く働着を脱更へて、杜氏を先にぞろ〳〵と一同臺所へ趣きけり。

今日は舊暦十一月上卯の日、松尾明神の御祭日に當れば、折からの酛入祝を兼ねて、倉男一同への大饗應。何も山猿のやうなる徒のみなれば、廣座敷は備後疊の狗に座布團、然りとて臺所の板敷も些と可哀相なりとて、納戸と佛間の隔の紙門を外して、都合十四疊敷は椽無しの琉球表。杜氏を正座に、年寄、代師、倉働より釜屋まで十人の同勢、整然と居流れたる末座は甑番にて、二人目は又六なり。

鯔の鹽燒、燒鯽の荒布卷、菎蒻と胡羅の白鹽に卷織汁といふ獻立にて、干鰕に芋幹と油揚の具澤山の骨董飯、酒はお手の物とて、黒塗の大湯桶に惜氣も無し。内義はそれ〳〵に膳も出揃ひたるを見て、皆樣、何もござんせぬが、遠慮無しに多度喫つて下され。さあお花、と下女に向ひて、お前お杉を呼むで來て、二人で御給仕を爲てあけたが可い。臺所は私が、と心利

かして席を外せば、一座忽ち賑出して、これよ、お花坊がお丸坊か知らねど、其肥滿した御手でお酌一盞。

背が遠慮無しに、今日は腹の痛を弛めて寛縱喫れ。酒の嫌な者は其所に飯がある、勝手に先へ始めるが可い、と自分の腹の痛まぬ事とて、杜氏が大氣なる辭に一同も寛ぎて、己が好々飲むやら食ふやら、手盛手酌の雜燴ら折から、下女は娘のお杉の外に、針妙の大年增さへ莵催して、さあ〳〵お給仕でも、お酌でもいたしましよ。

下女の不愛相に引更へ、是は又驚かれぬる針妙の口も八丁、手も八丁、多勢を敵手に避易もせず、前後左在の酌を一人に。取分女ながらも少許は飮る口と見えて、差さるゝ盃も強ちに辭まねば、座中自ら浮立ち、酒も進みて、はや鍵懸りし呂律怪しく、倉男一流の漫唄、甚句も都々一も皆米摺節となるも可笑し。

座は自ら二つに分れて、佛間は上戶の組、下戶は納戶の方に少に三人。別に一人既醉は名代の左利なれど、飮めば冗くなる捻上戶とて、日頃より一同に嫌はれたれば、今日も此男のみは退者の敵手も無く、納戶の片隅に湯桶一箇控へて、連に獨言ちつゝ、ぐびり〳〵と手酌にて搔吃ひぬ。

下女は始終酒の通に追はれ勝の、礒々座にも在らぬに、是非無くお杉は飯の給仕を受持ちて、酒の組には可成近かぬやう、愛嬌けらるゝも故と聞えぬ風して、見向きも遣らぬ己が前は、膳を隔てゝ又六と相對なり。焦れて焦れて、這美色一目拜まぬ內は、其日の飯も咽へは通らぬばかりに焦るゝ姿を、今爰に名殘無く眞向に眺めながら、加之其戀しき人の給仕とは、實に嬉しさは胸ふ方なけれど、又何とやらむ眩きやうなる心地もして、又六は唯胸のみ悸々。顏は飯まぬ酒に醉へらむ如く、箸持つ手の見苦しきまで顫ひて、食へども味無く、さあ盛けましよと言はれて、飯は仍半分も殘れる茶椀を我にも無く差出すなど、大方ならず狼狽へたるを、傍なる代師は可笑く、如何だ又公、酒倉から見るとは、と不意に肩をば摸かれて、萬一

聞かれはせざりしかと、言ふた者よりは、却りて又六の氣遣はしげに面を振擧ぐる途端、お杉は今まで此方に注ぎたりし眸を、衝と然らぬ方に逸らしぬ。想做しにや、急に氣色を損ねたるやうにて、取分我にのみ情無く見ゆるにぞ、又六は其の事のみ心に懸りて、あはれ飯食ふてゐる空は無かりき。

隣なる甑番は、最前よりの手酌に大分醉も回りたる躰にて、片手に飲未了の茶椀を摑み、片手を膳の傍に崩懸る躰を支えつゝ、贈乎に流るゝやうなる眸を居ゑて、管捲きたげに座中を見度す折から、又六はお杉の不興氣なる樣の氣懸りなるまゝ、飯も匆々に著投捨てゝ、何うぞお茶をと言ふ。何、お茶を與れと、唐變木め、今から那麼物を飲む奴があるか。さあ一盞受けよ、これさ、受けよと言ふたら受けて與れ。一盞位は恥搔かさずとも、と無理强に薦むるを、辭れども何かな肯かぬ日頃の飲癖。益々强ふるに持餘して、又六は徐々と座を隔たりながら、再びお杉に向ひ、お茶をと氣毒げ

に言へば、やう〳〵心着きて振返るを、傍より呼懸け、お嬢樣、那麼唐變木にお茶など與られずとも、何卒此方にお酌を願ひましよ。さあお嬢樣、お酌〳〵と茶椀を突出せば、お杉は所爲無く其方に膝行寄りて、撓げに湯桶を採上げたり。又六は宛然掌の物を奪はれたらむやうに、惘然と眺むるを、態見ろとばかり、甑番は憎さげに顋を反拗りて、人に恥を搔かせた其が罰と云ふもの。お嬢樣は茶など飲む奴はお所惡ださうなれば、欲しくば自分に藥罐を採つて、飲むなと浴びなと勝手に爲ろ。

お嬢樣、貴方は御存知あるまいが、又公は那でも今年は色を仕込むで、此頃まで毎日酛入に懸つて居りましたのさ、何と呆れるではござりませぬか。下駄穿いて首限と謂ふ事は昔より聞きたれど、又公のは桶に乘つて首限、是も呆れるではござりませぬか。貴方は何と思召します、桶に乘つて首限は呆れませう。所が未だ呆れた談と謂ふは、此方許冴泡のやうに昇つて居れど、先方は夏倉の麹室で、一向熱うも温うも成つてくれぬとは、仍々呆

れるではござりませぬか。何時までも然うして的無しに湧いてゐるのみか、園は未矣、容易初揚にも懸れぬ所より、此節は全然酢を腐らして、毎日暇さへ有れば轉々と、仕事も碌々手に付かぬのでござりまする、何と彌々呆れるではござりませぬか。ねえお嬢樣、呆れましょう、呆れ蛙の尿で候、と片手の酒をちびり〳〵、鼻窒らせて娓々と言續くるを、お杉は忌はしげに眉を顰めて聞きながら、時々嘲けるやうに此方を眺むるに、又六は面目無さ、腹立たしさに、顏は火の如く、胸は一夜酒の湧く想なりけり。

甑番は圖に乘りて、片々と舌鼓しながら、又公、何も那麼に羞含まずとも、些と爰へ來て、お嬢樣にお酌なりとしていたゞけ。はてさ、何故然うたろと膝も現に瞞寄り、嫌がる又六の手に茶椀持たせて、お嬢樣、何うぞ此色男に酌してやつて下されまし。はい〳〵お慈悲でござりまする、と差付くる湯桶を手にだも把らず、躰は次第に退り行くを、那麼にお遁げなさらずとも、はて、まあお嬢樣、と甑番の袖曳かむとする手を避けて、銜と身を

起す機に、ばらりと解けたる縞縮子の帶の、膳の上をば曳摩らむとするを、慌てゝ傍より探上ぐる又六。お杉は何とか思ひけむ、あれよと叫びながら、後樣に手暴らく振拂ひて、はた〳〵と中の間に遁入りたり。

此の物音に振返りたる佛間の連中、何だ〳〵、何を爲たのだ、と眉根を寄せて座高に問懸けたる杜氏は、亂次なく醉崩れたる甑番を見て、復しても捨めが、見界も無く何惡戲るぞ。第一手前のやうな癖の惡い奴に飮ませるが誤、代師、其湯桶を取上げて、蚤く彼方へ追行つて下され、と呶鳴付たる血相の凄じさに、甑番も本性違へず。あゝもし親仁樣、今のは俺ではござりませぬ、此野呂又めがお嬢樣の帶を。帶は解けたのを觸つたばかり。甑番こそ、嫌がりなさる袂を無理に。嘘言ふな、倆こそ。否、此方とそ、と水掛論の孰を是とも分ちかぬるに、代師は左も右も甑番を推宥めて、まあ〳〵、萬事は俺が承知してゐる程に、俺と一緒に火鉢塲へ行きや。又公、倆も來るなら後から喃、可いか。

火鉢場に歸りて後も、甑番は仍譯の解らぬ言のみ、何時までも娓々喋り止まぬに代師も幾と持餘しつ。左右は瞞しで、蚤く寐かさむと頻りに努むる折から、龍鐘歸來れる又六を見るより、甑番はやう〳〵其所に横はりたる身を、又勃起〳〵と起して、冗くも帶と袂との爭を反復すに、さしもの代師も今は匙を投げて、實に生酔と酒屋火事は手の着けられぬものかな。自ら火勢の鎭るまで敵手になるな、耳を蹙してあよと又六に言含めて醜の見巡に出行きけり。

如何にも袂は俺が吏きたれど、お嬢樣のお腹立は全く儞の帶を曳張つたが因、と謂ふのは、儞が焦れて〳〵焦拔いてゐる程、お嬢樣は儞を嫌つて嫌つて嫌切つて御出なさる〳〵。ぢやに因つて他の者なら笑つて濟まされる事も、つい那麼に眞赤になつて怒られたのじや。嘘と思はゝ、劈頭お嬢樣の擧止を考へて見ろ。儞がお茶一つ與れと言ふても、聞えぬ風して見返りもなさらぬ、俺が頼むだ事は何でも唯々、順に傍へ來て酌までして下さるのは如何だ。何と俺の持方は凄じいか。又公なぞは毎日〳〵涸倉の二階へ日參して、塀の羽目から覗くやら、手水鉢の水を浴びせられるやら、いやはや、散々に憂身を窶しながら、偶のお茶さへ順に注いでもらへぬとは、沙汰の限の腐色男！些と俺樣に肖かれ、と爲たり顏に頤を撫づれど、又六は始終俯きたるまゝ應も無きに、甑番も拍子拔して、吻と熟柿臭き息を吹懸け、何と又公、俺の手腕は今日の樣子で大方知れたであろ。以後は餘甑々〳〵と安う言うてもらふまい、と言捨に轉と後に倒れしが、其儘其所に鼾の聲は猪などの病めるに似たり。

迹には又六一人圍爐裏の邊に腕を組み、眼を閉ぢて、少時は死せるが如く身動もせざりしが、折節母屋の方に咄と賑なる多勢の笑聲。不圖面を擧げて其方を見遣りしが、無益〳〵、無益だと獨言ちつゝ、更に己が傍なる甑番の寐顏を、忍めしげに瞶る眼中は次第に曇りて、零と膝に一滴。

間も無く代師は歸來りぬ。潜門を入る途端に芬と焦臭き匂の尉しく、慌て

て障子を啓くれば、又六は後向に木像の如く、太くも物思に打沈みたる傍に、正躰無く醉潰れたる甑番の着物の端、圍爐裏に落ちて燻れるに驚き、火がそれ、蚤く裾をと駈寄りて、手早く爐椽に揉消しつゝ、儞はまあ傍に附いてゐながら、呆れた野呂松め。嘘嗒にも程が有ると喚かれて、又六はやう〳〵頭を擡げしが、其のまゝ物をも言はで眤と代師の顏を打目戍りつゝ、俺は最う可厭になつた。何が。爰に居るのが熟々可厭になつた。寧親仁樣に頼むで、在所へ返してもらはうか不知。

（七）酛揚

一時毎の温桶廻、一日毎の温桶湯の塡替も八九度に及べは、始めて冷泡と稱ふる小泡の粘りたるが、軈て七八寸に昇る頃、更に復湯を塡替ふれば、酛醪はやう〳〵温氣を生ずるに連れ、一度降りたる泡の粘氣も脫けて、此度は粒も大きく盛に盛上るを冴泡とは呼ぶなり。恁くて温桶湯の塡替へら

るゝ毎に、温度は益昇りて、粒は稱々大く、物凄じう沸々と湧立つ玉泡は、何時しか一重泡と成りて再び降れば、温度は人の肌に一度を增して、味甘く、澁く、又苦し。本圍、樽圍、諸白何千石の酛は是。

麹、酛、仕込より酛揚までの日數はやう〳〵二十日に足らざれど、米淅、甑の抑々より、手酛、山卸、さては擢入、温桶湯とそれ〳〵順序の狂はざるやう、縱横に眼端を利して、多勢を指圖の杜氏が苦勞は一方ならず。剎那〳〵に變行く味は、宛然大病人の容躰の少時も油斷ならざるが如くなれど、有繫は年効。冷泡の湧加減、玉泡の消鹽梅、萬上々吉の酛揚に、早速温桶を拂ひて、姑く打置せたる後、首尾好く酛醪を半桶に分ちたるは、仕込より十九日目の正午過なりけり。

杜氏は臂頭此由を母屋へ知らせ措きて、年寄、代師の兩人に何事か密々打合せし後、設談の熟らぬ曉には、明日とも謂はず唯の今、左も右も會所を退拂はむ心算なれば、萬一の用意、俺の還るまで皆の奴等も外へは出さぬ

やうに、と言遺して出行きぬ。

旦那樣にお目に懸りまして、お話し申したい事あれば、と臺所より取次を頼めば、心得て奥へ入りし下女の、程無く出來りて、卒とばかり案内するまゝ、主の居間に通れば、康右衞門は片手に手爐を押出して、さあ、仍そつと此方へ、と愛相好きも希しく、杜氏は徐ら躪寄りて、まづ滯無く酖も揚りまして、御目出度うござりますると祝けば、私も大きに安心しました。其方の事なれば、萬々失敗もあるまいとは思うたれど、此二三年不吉のみ續きし後なれば、假令親仁殿に過失は無くとも、如何いふ拍子で、降つて湧いたやうな失敗のないにも限らぬと、實は心配して居りましたが、先々骨折で。　如何仕りまして、寔に行屆かぬ勝でござりますれば、と杜氏は更に一膝進めて、而し二千石からの大仕込を、一つ仕舞の人足で押通さうと謂ふのでござりますれば、それは〳〵、落着いて飯食ふ間も無いほど忙しうござりました。否何有、決して恩にお着せ申すのではござりませねど、

先酖搔が濟みますると直甑、甑が漸と了へたと思へば、既已淅塲に懸らねばならぬと謂ふ始末にて、皆の奴等も大分徹ましたか、何の彼と癪な文句を並べまして、手前も大きに持餘しましたれど、恁して二千石からの大仕込を成さらうと謂ふ大腹中の旦那樣が、豈夫一日二朱の端日傭で、此儘使放しにもなさるまい。左も右も酖さへ揚れば、此親仁が受合ふて、少許の御無心もお願ひ申してやらう程にと申しまして。　可し〳〵、其方の言ふのは能う解りました。後は聞くまでも無い、給金の前借であろと星を指されて、杜氏は面目無げに頭を搔き、那麼に何事も能う御承知の旦那樣に、此上強請がましい言申上げるのも、恐入りました次第なれど、皆も那して順に二人前づゝ働いて居りまするなれば、と半言はせず、それも解つてゐる。紛紜無しに半人つゝ給金を增しましよ。

半人づゝでござりまするか、と杜氏は不足なる顏色なり。半人さ、倉働が十九錢、其方が百日七十五圓、不足は無い理。　いんや、不足でござりま

する。積つても御覧じましと辭鋭く、杜氏は康右衞門の顔をは乾と見遣りて、是が唯忙しいと謂ふばかりなれば、成程、一人半が假令一人並の給金なりとも、お談に依つては隨分承知もいたしませうなれど、何分千五百石の屆で、酘の二百五十も取らうと謂ふ途方も無い仕込でござりますれば、一人半や二人前の給金では、些と得心が爲難うござりまする。餘計な事はお廻ひ申しませぬ程に、何とか其所の色氣而已お附けなされて下されまし。然うして目鼻さへ附けておいて下さらば、手前も布袋腹の源作、下手な事はいたしませぬ。美事尻尾の志の字も出さずに、旦那樣の豫算通釀成げてお目に懸けまする。はい、屹と釀成げて御覽に入れまする。

最うはや何とかお談の有りさうなものと、實は此頃からお待ち申して居りましたなれど、今日になつても一向お沙汰のござりませぬゆゑ、さては恁した危い仕事は今年が封切の、お心弱くも打出して仰有難うて、とお察し申しましたれば、催促がましうも手前の方より打明けた所を申上げるので

ござりまする。御心配なされまするな、五百や六百の密造はお家に限らず、些と大仕込を爲る所には有勝の事、頓と奇しうはござりませぬ。なれど何方へ參りましても、恁いふ節のお手宛は、事新しげに申上げずとも、いづれ謂ふのが通相場でござりまする。なほ〳〵年末にも近きまして、在所では金御存知の事、旦那樣に御如才もござりますまい。就きましては、皆の奴等も人並に女房子のござりまする者、追々の來るのを待かねて居りませうなれば、給金は置きましても、其も手宛の所を、切めて半金なりと、只今お貸し下されましと言出せり。

康右衞門は腕組堅く、默然として一部始終を聞きたりしが、然りとは外形に寄らぬ、其方も憂い腕を持つてゐなさる喃、と嘲ける如き笑を含みて、而し可惜腕もお氣毒な、私の所では樵人の水練、一向用には立ちませぬ。聞けば其方は最前より、太う氣にして二千石〳〵と言ひなさるが、縱令二千石が三千石にもせよ、其方には微塵關繋の無い事、はて餘計な苦勞でど

ざるぞよ。成程、門札にも記いて打つて在る通り、私も最初は千五百石の見込、官廳へも其心算でお屆けはしたれど、其後些と思ふ仔細有つて、推量通り二千石に增しました。時と塲合で最初の見込と違ふのは、隨分世間に有る例、殊更物奇しげに騷ぐ事でもあるまい。唯增石の屆を出して、其だけの稅金納めれば其で濟む事。密造だとか、隱蔽だとか、思も寄らぬ事を世間躰の惡い。はてさ、那麼な見當違ひの强迫を爲うよりは、私の云ふ言肯いて、設令半人づゝでも約束の外の貰德、順に得心したが其方達の利であろ、と空嘯きてゐたりけり。

聞くより杜氏は急込みて、是は又旦那樣でもない、那麼不知をお裝りなされても無益でござりまする。手前も布袋腹の源作、半人足の甑切から仕上げて、三十何年の倉男、五躰に醪の匂の浸込むだ渡杜氏でござりまする。生丁目か生丁目で無いかは盱と一睨に知れ切つた事を、今更隱蔽爲さるは些とお若うござりましよ。成程、帳簿面は筆頭次第、撿査官の眼は如何と

も眩せませうなれど、現在會所をお任せ爲る此親仁まで眩さうとは、はて虫の好いにも程の有つたもの。何程隱遂さうと爲されても、圍になれば何の道知れずには濟まぬ事を、愁ひ隱蔽なされて、撿査〳〵の度毎に獨競々なさらうより、洒々落々に打明けて、夫相應に交渉さへ附て下されば、手前も其氣で一廉御忠義を立てましよ。何と旦那、少許の出惜をなされまして、設撿査でも過つて御覽じまし、それこそ。はて冗い。何も規則に外れた事さへせねば、設令毎日撿査が有らうとも。管はぬと有仰りまするか。有繋は五百石からの密造を爲さらうと謂ふだけに、太い度胸でござりまするな。可うござりまするわい、と杜氏は意味有げなる氣色を見せて、高の知れた目腐金に、手前も未練らしう重ねて無心は申しませぬ。然やうならば何うぞお約束の給金だけ日割にして、今日までの所を只今お渡し下されまし、直に會所を退拂ひませうと言ふ。折から何方も倉働の手空無き此頃なれば、是には鬼めも角や折らむと案に相違の康右衞門が振舞、些と

も動ぜず。其方一人が杜氏でも無ければ、限拂ひたくば勝手にしやれ。無理には留めねど、十人といふ多勢が一度に手を空けて、當分遊ばねばならぬ事なれば、と早や片手に帳箚筒の鍵の音立てゝ、悪い事は言はぬ程に、最う一度相談爲直して來らば什麽であろ。

(八)　配　劑

師走半は仕込の眞盛、何方の倉男も皆それ〳〵に會所を定めて、杜氏は未だ、半人足の甑番といへども、手を空けて遊べるは無かるべく、又今日まで倉男無しに、酛入にも悪らざる會所は日本國中何處にも在るまじ。然れば今新に抱へむとするも難く、抱へられむとするも難しき今日此頃。添掛近く會所を動くは兩損なれど、互に敵手の弱味を見込みて、何時までも折合はざる爭の彌根を待ち、今は意地にも留まらず、留められずなりて、結句源作は今日中に會所を明渡す事に定めたり。

假にも雇人と名の附く者に先方も意氣地なり、今更手を下げて、留まりくれとは言はれまじ。然れど今我等に退揚げられては、添掛は聞はずもあれ、劈頭今宵の糀入にも差支ふる始末、何時まで強い言云ふて居るべき。必ず後より人橋架て呼返さむは定なれば、今日は未練無く退拂ひて、飽くまで此方の強味を見せむと源作が辭に、年寄、代師は措きて、餘の者は皆今日初耳の、即座に分別も附かぬたるが、杜氏を始、頭分の二人まで皆同腹なるに、縦や異存を稱へて殘ればとて、玉泡の消加減さへ能くは解らぬ倉働のみの所爲無く、長い物には捲かれろの喩、左も右もと言ふがまゝにぞ隨ひける。

然らば今日までの給金請取にとて、杜氏の母屋へ行きし迹は、年寄の指圖に何も已がとり〳〵。證紙の荷拵。親仁樣が還られるまでに又公、倆も早々と支度を爲ねかと急立てらるれど、氣の無き顏して、一同は早や荷作了ひで、擔ふ者、背負ふ者、氣早きは草鞋さへ附けたるもあるに、又六は仍紙

包の中緊さへせざるを捫しく、然ほど爰に未練があらば、我一人歸らずに居ろと口々に囃されて、這麼所に殘りたくはござりませぬ、と口尖らするを代師は冷笑ひつゝ、年寄樣、又は最う疾から歸りたがつて居りまするのさ。先頃の酩酊の時に手酷く撥られて、全然脈を揚げて了ふたのを、此方は未だ御存知無しか。全然と知らなんだが、其ははや氣毒な。又打寄りて又六を玩弄に嘈散らす折から、歸來れる杜氏は額に靑筋、面は朱の如く、撞乎と園爐裏の前に足投出し、畜生、もう怎うなれば敗れ被れだ。管ふ事は無い、今日まで俺の手で仕込むだ酩は、一本不殘腐敗して與れるわ、と旗立たしげに膝頭を打叩き、誰か裏の畠へ行て、塀內に有る橙を五顆六顆採つて來い。又、行けと激しく逐遣りたり。然りとは容易ならざる辭に、一同は目を睜りて、言合せしやうに源作の顏を瞶めたりしが、中にも年寄は不審の眉を蹙めて、何を那麼に親仁樣、全躰如何した事情、と氣遣はしげに訊ぬれば、如何したも怎したも、いや太い奴は爰の主め！

まあ年寄、何さ代師も皆も聞いてくれ。一つ仕舞の人足で、二千石の仕込は仕麼も骨であろ。皆の給金を半人づゝ增さうとは、最前俺に向つて吐した舌も乾かぬに、もう二枚舌を使ひくさつて、今行けば最初の約束通り一人分の給金。それも日割勘定にして、皆が會所に着いた倉開の日が半日、今日が半日、合計十八日分より渡されぬと吐しをる。御法度の密造をしながら、然りとは虫の好い言草。俺も散々掛合うてくれたなれど、何分初の約束が一人分の、書附が口利けば、心外なれど楯は抗かれぬ。外道め、騙兒め、毎日二人前づゝ骨折つてやうゝ仕込むだ酩をば、此儘義理不知の畜生へ遣して行くには及ばぬ。那まで見事に揚げたは此方の技量なれば、這慮も要らぬ、會釋も要らぬ、行懸の駄賃に悉皆腐かして與れるわ、と居丈高になりて、さあ年寄、此方は造倉へ行て、好い程づゝ橙を入れさせて下され。何の用捨は無用な事、片端から一本不遺打込むが可いわさ。造倉と涸倉との庇合を抜けて裏に出づれば、其處に野菜畠の四十步餘、葱、

大根、牛蒡、人參、蜿豆、蚕豆、眞菜、苣など、四季折々の總菜は大方爰に足りて、別に菜園男とて、此世話のみに傭はれたる老爺あり。南は造倉に限られ、西と北とは少に拘杞垣を隔てゝ一面の田圃續、東は母屋の裏庭に方りて、丈高き板塀もて遮られたるが、梢茂れる雜栽の中に例の橙の一本。斑に殘れる實の霜に染みて、宛然丹売にて色揚したるやうなるを、又六は竿を片手に頻に叩落さむとすれど、忍返に妨げられて効無かりき。是非無く塀に攀登りて、辛くも三顆まで懷に捻入れ、仍も手近の枝を手繰寄する時、盜賊と一聲。不意に後より曳下さむとする者あるに、膽消すばかり驚きて振返れば、例の肥滿の下女が、緊乎と我の裾を捕へたる後に、小籠片手にお杉も彳めり。又六は欵と胸を突きて、面目無きに冷汗流れ、五躰は窘みて、あはれ眼も眩まむばかりなれど、眞下に下女の立てれば飛下もならず。然りとて摑める裾を放すにもあらねば、兩手を堅乎と塀に取縋りたるまゝ、物をも言はで、身を悶きて振放さむと遄るを、お杉は可笑さ

怺へて眺めたりしが、次第に擦落つる態の見る目も危く、お花、もう赦して、蚤く其所放してあげぬかと聲を懸くれば、下女は漸く曳く手を緩めて、那やうにお孃樣も有仰る事故、隨分放しても上げませうなれど、謝罪の證に、其採つた橙をば皆私に與れるか。さあ、其が否ならば金輪際爰は放さぬ。如何でござんす、と又力を籠めて曳かるゝに、屹と呈げまする程に、其處を放して、と泣聲立てゝ詫ぶれば、下女もやう〳〵裾を放すを、得たりと又六は後樣に飛下りて、懷より取出せし橙一顆。投附くるやうに遞して遁行かむとするを、約束通り、其懷に高うなつてゐるのを不殘出さねば、遁やうとて遁しはせぬ、と跳り懸りて袂を執られ、お杉の手前、又六は消えも入りたき風情の可笑く、彌々迫らるゝに所爲術盡きて、今は有丈投げて行かむかとも思ひしが、空手で還りて杜氏に叱られむも怖しく、其も得爲ねば、途方に晦れて見えけるを、お杉は氣毒とや思ひけむ、折角骨折つて採つた物を。これお花、お前那麼物を何に爲うと思うて。何にと申し

まして、お孃樣、橙は皹の藥でござりまする。皹の藥ならば、私の玉椿を分けて與らそ。其一顆も返すが可いと宥むる辭に、下女は摑みし袂を放すや、宛然弥を免れし狐の如く、後を振向き〳〵一散に逃延びしが、軈て庇間に入ると與に、足は忽ち重く、轂觫と半程まで來懸りて立停り、姑らく何やらむ打案ずる氣色なりしが、軈て踵を返して元來し方へ蹈歩しつ。庇間の盡頭なる涸倉の羽目に取着きて、密に畠の方をば窺ひたり。お杉は下女を對手に餘念無う水菜を拔きて居たりしが、折節又六の面差出すを、端無くも下女は見着けて、お孃樣、貴方に面白いものを御覽に入れませう。前向の庇間の角をと叫くまゝ、何の氣も無く誨しへられたる方を眺めけるに、とも知らで又六の復もや面を差出せば、這抑、二人は眸を凝して此方を打目戍れるに、慌てゝ首を退込むる途端、又と呼ぶに驚かされぬ。見れば庇間の入口に思も懸けず年寄の立姿、何してゐるぞ、採れたか、未だか、野呂松め。採れたらば蚤く持て來い。

今日は朝よりの雪催に、窓の煤障子は灰色の影曇りて、然らでも薄暗き造倉は宛然の闇なるに、立て罩むる酛醪の湯氣は一面の狹霧。土間も壁も濕氣を帶びて雨後の如く、殊に八間梁、桁行二十五間の大倉の、陰々として、麴臭き一種の冷氣水のやうに肌を侵し、足踏入るゝと與に、怪しう全身の粟立つを覺えぬ。然れども慣れし年寄は座敷の内を行く顏して、忽々と奥深く、酛桶の小蔭に橙を碎きて、半は己が片手に一握、其半をば又六に與へて、二階のは俺が引受ける程に、儞は下の酛へ一摘づゝ打込め。母屋の者に見着けられな、人の來ぬ間に速行れ、心得たか。何瞢然して居るぞ、と背を一つ搭して、見着けられぬやうに打込むだら、直に火鉢場へ還れよと言捨に、急ぎて階子の方へと立去りぬ。

迹に又六は仍惘然と佇みけるが、忽ち我前を諷のやうなる物の靉靆く中に、赦してあげぬか、と聲も優しう下女を窘めしお杉の姿、陽炎の如く眼に浮ぶにぞ、少時我を失ひて、夢路を辿ると覺えけるが、やう〳〵片手の橙に

心着きて、酖の打合せられたる半桶の傍に踽々と歩寄り、あはや一摘打込まむとすれば、心の迷か、空耳か、何方とも無く朗にお杉の聲するに、欵と思ひて振返りしが、元より人影の有るべきにあらねば、其儘片手を桶皮に掛けて、再び打込まむとすれば、不思議や又もお杉の聲す。微に、細く、鋭く、宛然己が頭腦の奥より呼びたらむやうに聞えて、身柱寒う、思はず慄く片手の橙取落して、唯現の如く目迯もせで、何方を瞶むるとも無く恍惚と瞪れる眼の卒に輝き、滿身の血は一時に逆上して、額に膏汗流れ、呼吸は燃ゆる如く、氣も狂ほしう猛然と身を躍らして、乳虎の如く二階に跋上りぬ。折から年寄は壁際に並びたる半桶に、今しも例の一摘を打込まむとせしが、此物音に驚きて見返る横面を、又六は榮螺のやうなる拳にて、横鬢懸けて頬も歪めよと一撲。

年寄は眼も眩まむばかり、踉蹌と倒れ懸りし身を辛くも半桶に支へて、狂人めがと一喝せしが、火の出むばかりに憤りて、能くも撲つたな。儞と又

六の胸衿把りて、二つ三つ續樣に撲飛ばせし後、何意趣有つて撲つた。さあ、何故撲ちをつたと小突廻せど、又六は痛さ苦さに涙含る目もて、墨々と年寄の顏を瞶むるのみ。一言も答へざるに彌々怒りて、今はなか〳〵醪の事も打忘れ、見着けられては一大事の橙も其處に落散りたるまゝ、遮二無二杜氏の所へと曳摺り行きぬ。

火鉢場には主の康右衞門框際に立擴かりて、雇を解けば。最早何の緣無き此方衆を片時も會所に置く事愜はぬ。疾く〳〵退拂へ、明渡せと疊を拊きて、躊躇はゝ掃きも出さむばかりなるに、業は沸ゆれど、道理に返さむ辭も無くて、杜氏を始め一同無念を怺へて總立の折から、眞赤になりて飛込みたる年寄は、此場の躰に思はず又六の胸衿弛めて、やゝ親仁樣、もう出懸けるのかと呆顏なり。杜氏は苦々しげに頷きて、此方も蚤く支度をしやれ。又、手前も蚤くせぬかと急立てゝ、然らば康右衞門樣、沸湯を呑ませられた爰の會所は、一生忘れはせぬ十人の者。いづれ一度はお禮に出ます

そえ。

(九) 櫂入

夕暮より雪は撩亂降出でゝ、然らでも更易き冬の夜の、別けて今宵は、夜毎の枕に通ひし倉唄も聞えず。久しう耳に慣れたる櫂拍子も急に途絶えたるに、未だ宵ながら寂寞として、手に取る如き臺所の鐵の騷、折々の咳、宵に鎖忘れたる何所の扉戸にやあらむ、絶えず丁々と風に煽らるゝも疎まし。主の康右衞門は居間に垂籠めて、帳簿を前に算用に餘念も無かりしが、軈て算盤下に吻と嘆息。腕拱きて惱ましげに眼を瞑ぐ折から、毎ならむには未だ焚けの塡めのゝ騷がしき湯殿の、今宵はしも早や湯を拔く音の一時、遙に冴ゆる擊析は九時の火之番なるべし。今宵は早寐と机片寄する時、磕々と足音野く駈來りたる小僧は、襖の外より面差出して、旦那樣、只今倉の者が一人返つて參りまして、內へ入れよと申しまするが。あれ、那通妄

に門の呼拍子木を叩立てまする、と言はれて始めて耳を澄ませば、實にも火之番の拍子木と思ひしは是、然うなうては成らぬ理。而し一人では有るまい、皆返つて來たであろと問へば、如何でござりまするやら、門叩くは一人のやうで、と皆まで聞かず。入れて與れ。畏りましたと起つを呼留め、他の者は臺所へ廻して、杜氏一人を此方へ通せ。

間も無く小僧は引返して、仰の通り廻して措きましたれど、猶且一人切でござりまする。他の者とは途中で別れ、又とか謂ふ倉働ばかり參りましたとの言に、康右衞門は太き眉根を寄せて、又とは、那野呂又とか謂ふ嘘嗒。

はい、其嘘嗒でござりましよ。はてと小首を傾げしが、左も右會うて與ろ、と臺所に立出づれば、古風なる釣灯の影黯き土間の片隅に兀然と又六の立姿。裾高々と端折りて、露出したる赤臑に潑泥の痕燕の巢の如く、素足に古草鞋、弓手に三度笠、馬手には四五貫も有らむずる澁紙包を提げたり。浸々と濡朽ちたる布子の所々、仍解遣らぬ粉雪の白う殘れるも寒げ

に、清洟啜り〳〵、嘖々と打顫ひて居たるを、足濯がせて、臺所の火鉢に寄せ、お前一人か、如何した仔細ぞと問へば。

如何もいたしませぬ。唯在所へ歸るのが急に可厭になつたゆゑ、皆の氣着かぬやうに、密と三角の渡場から遁げてまゐりました。旦那樣、俺は給金も何も欲うはござりませぬ程に、何うぞ何時までも爰の會所へ置いて下され。お願でござりまする、と又六の一向に頼む辭を能くも聞かず。それで他の徒はと問へば、大事ござんせぬ。皆船に乘つて歸りましたれば、最早連れに來るやうな憂はござりませぬ程に、何うぞ舊の通りに使うて下され。今度の事なども皆親仁樣達の巧で、俺は何にも知らぬのでござりまする、と仍も娓々無益の辯疏。さては日頃より野呂松と仇名せらるゝ奴の、意地も張も何の給金は廉うとも、遊びて居やうよりは勝の一日二朱の欲しさに、一人返來たるも格別用には立たねど、邪魔にもならねばと高を括りて、居る意ならば居るが可し。然し杜氏も定らぬ會所の、お前一人の爲に火鉢場

を開ける譯にも行かねば、左も右人足の揃ふまで此方に居て、水なりとも汲むでくれるか。其はもう置いてさへ下されば、什麼事でも致しまする。とあるに、然らばとて納屋の庇の四疊半は、菜園男の部屋に寐させぬ。又六は永年の勘氣の端無く赦りもしけむやうに喜びて、おち〳〵眠りもやらで一夜を翌朝、酝醪に一櫂入るゝやう奥より指圖の有りければ、飯も匆々に搔込みて、例の繩襷十字に外へ出づれば、昨夜の雪は餘影無く霄渡りて、屋根も庇も墻も廣場も、一圓に降敷きたる白銀の旭に映りて目も文に、塀際に干並べたる番傘の乾立つ蒸氣は糸遊の如く、はや解初むる簷の滴を潛りて、餌を渉獵る雀の忙はしげに飛交ふも麗かなり。雪搔兩手に臺所の入口を掃除せる菜園男の久造爺は、我手傳ひに來れるとや思ひけむ、いや、想ふたよりは太う積りをつて、搔くのに大分骨が折れるわ。大哥や、之を貸さうに向方の雪を、と着出す雪搔を手にだも取らず。其事所ではない、俺は是から櫂入をせねばならぬ、と駈行くを呼留めて、此方の分を殘

して揩く程に、倉を丁ふて蚤う掻きに來さしやれ。　應喃、合點と言捨に
はや造倉に馳入りけり。
酢揚の醤は半桶に分たれて、造倉の上下に冷まし置けるを、蒸らぬ爲の樋
入。　又六は先二階を一旦入れ了りて、階子を降來る出合頭、如何だ、少し
は冷めたやうか、と康右衞門は入違に昇行きけるが、間も無く又六〳〵と
氣立たましう呼ぶ聲に、土間の酢に入悪の樋投捨てゝ、慌忙く二階に昇來
れる又六。是は何だ、いやさ如何したのだ、と康右衞門の敎圄暴く板敷を
指すを見れば、氣着かざりけり。唯有る半桶の傍に彼刻みたる橙の、昨日
年寄の零せしまゝ落散りたるに、是はとばかり應答に窮りて、然しも呑氣
の又六も少しく當惑せるを、礒と睨めつけ、左右の僉議は後の事。劈頭又、
手前は何々へ入れをつたか其を言へ。よもや是ばかりでは有るまい、他の
半桶へも打込むだであろ。さあ又、何を遲々〳〵、えゝ蚤く言ひをらぬか、と
骨も拆げむばかりに又六の肩頭引摑みて、曳けど搖れど答の無きに怒を增
して、蚤く白狀しをらいで、設此儘に腐つたが最期、儕は赦さぬぞ。執太
い奴め、纒着にして突出しくれるが、其でも言はぬかと苛立つを、又六は
矢庭に噸興なる高笑して、心配爲しやるな、何にも打込むではござりませ
ぬ。　何、打込むでないと。這奴が〳〵見形に寄らぬ、何所まで執太い胴
骨か。　慥した確な證據のありながら、未だ那麼不知しい言を吐しをるか。
可！　白狀しをらねば、吃と白狀するやうにして白狀爲すわ。
野呂松と謂ふに油斷して、氣を弛せしが此方の不覺。いづれ那悪杜氏が指
金で、執念くも這麼執拗い仇爲に來たのであろ。打殺しても飽足らぬ奴、
と地鞴踏みて切齒をなすに、又六は其疑を辯解かむと心ばかりは惱れど、
生得の口不調法に、搗てゝ康右衞門の尋常ならぬ血相に恐惶をなして、唯
惕息と云ふ言さへも後や前、何のお恨も無い、微塵お恨も無い此方樣へ、
俺が何で仇爲になど來ませうぞ、勿躰ない。　儕、未だ那麼言を。　まあ
ま、俺の言ふことを旦那樣、お願でござりまする。何うぞ一通昨日の事を

聞いて下され。

悍立つ康右衞門を辛くも宥めて、在りし昨日の次第を、爰ぞ大事の瀬戸と思へば、日頃の野呂又にも似ず、條理明に遺無く語れば、康右衞門もやう〳〵合點行きて、疑雲たる雨後の月の冴けしや。其折此正直者の在らざりせば、と今更に阮揚美事なる半桶の醪を眺めて、又六、晩には一杯飲まそ。

（十）揚後

縦や身は旅鳥の少時なりとも、花の山近く塒の夢香しう、絶えず霞を隔てて慮れし戀人の姿も、是よりは名殘無く見飽るゝならむ、と樂にせし効も無く、然のみはお杉の端近う出來らず。やう〳〵臺所などに、折節の影見るのみの又六は、最ど物足らぬ思ひして、慾りずも又涸倉の二階に昇りて、窓より下瞰す例の中の間に、設ひ居るにもせよ、世間は冬籠の置巨燵、師走も末なる此頃の寒さに、怎でか其所邊の開放てあるべき。月は雲に大方ならぬ不本意、然りとは心着かぬ久造爺は、絶えず物思しげに打鬱ぐ又六を見て、若い者が然うでも困つたもの。大哥や、些と活潑しやらぬか、と壁に懸けたる手鍵を取りて、奇らしい物を此方に聞かさう程に、一緒に島まで來やれ、と窠を肩にして出でぬ。

然のみ心は進まねど、又六は言はるゝまゝに野菜畠に到れば、仍消殘る雪の所々。裏庭の例の橙を見るにつけて、過し日爰に我を庇陰ひしお杉の情らしき面影眼に浮びて、其所に惆然たる後より、何を土筆坊のやうに。これさ、些と其方の生寫でも抜いてくれぬか、と爺に注意られて、始めて我に復れる如く、漸々足許の五株ばかり抜きたる頃、不圖耳に入る妙音。是はと塀越に見遣る二階の内より續いて洩來る聲の、故とならぬ情を含みて、言ふ方も無く嬲しく、何唱ふやら、何奏づるやら、聞くは今日始めての更に解らねど、唯何がなしに魂搖めく心地して、抜懸の生薑片手に恍然とせるを、如何だと爺に肩叩かれて、感に堪へたる太息を吐き、巧いものだと

漸く言出づれば、巧いか拙いか解りもせぬ癖に。第一那は何と云ふ物か、名も知るまいがのと星を指されて、月琴かと問へば、阿呆吐すな。那は琴と云うて、御大家で無うては彈かれぬ[illegible]もの、と久造爺の一廉心得面なるも可笑。

曲は夕天の一節。強ち上手と稱ふる程にはあらねど、馴れたる爪音流るゝ如く、魘て如意ならぬこそ如意ならね、と唱納めたる聲音の、清う透明るやうなるは確にお杉、と仍も又六は其方を見入りぬ。

三味線などのやうに下品で無うて、聞いてゐて氣色の好いものであろ、と問へど應答の無ければ、これよ、感心したか、と重ねて聲高に呼悪けたるに、やう〳〵夢の覺めたる如く顧みて、俺は今日まで些とも知らずに居たが、毎日那麼して彈かしやるのか喃、と執心面に現れて見えけり。晝か夜か、孰にしても毎日一段づゝは彼二階で、と久造爺は抜きたる生盛を篦に拾ひ入れ、やれ〳〵、此節の日の短かい事は、と早や山の端に落悪る夕日の鮮に、茜映す天を眩げに打見遣り、篦を擔げて、大哥や、何時まで其所に立つて居ても、今日は最う聞かれる事ではない。明日又お彈きなさる程に、さあ還ろと促されて、漫々爺の後に引添ひ、廳て庇間に曲らむとする角より、又も殘惜げに又六の見返りたる途端、二階の障子の諷と啓きて、其か、有らぬか、戸を繰る人顔夕日に赤し。

夕餉果つれば、最早母屋には用無き身の、宵より納屋の廂に閉籠りて、煤行燈の下に久造が毎夜の内職。草履作るを傍に手傳ふ又六は、藪砧打ちながら、爺樣、爰のお嬢樣は今年幾歳？と訊ぬれば、十八と聞き、未だ嫁には行かつしやるまい喃と問ふ。何故と爺は鞋作る手を休めて、行かしやれねば如何する。此方が聟にでも成らうと謂ふのかと笑へば、馬鹿な言を、と極悪さに手暴く槌打つを、これよ、那麼妄な事して、不廉襲を叩截つてくれるな。はてさ、何も那麼に憤慨せずとも、もう癲狂言はぬ、眞面目に談そ。

お嬢樣も今年は十八、親人樣の身になれば最早初孫の顏も見たうて、再々實のお談も有つたさうなれど、何分當人のお嬢樣が一向お郤舍みなさらぬ程に。　然う〳〵、然うでござりまするのでござりましよ、と我を忘れて進むる膝に砧の臺を押出せば、錦は思はず談を止めて、又六が擧止を不思議と見遣りつゝ、一生彼儘で居さしやるお心か、其邊は俺には解らねど、お嬢樣には幼少い時から許嫁の聟殿。此土地一番の分限者、中村の永壽丸の弟息子と、今年の春あたり御祝言の有る噂なりしが、と聲を密めて、高うは言はれぬ事なれど、此四五年前より綴樣の惡腐敗に、さしも一時は新堀の楠長者と取沙汰せられた此方樣も、近頃左前の內證は何時しか世間に傳はつて、急に先方の氣の變つたのやら、祝言も近になつて、何の彼のと適口上の故障立。お嬢樣も全然其にお儘りなされたやら、其後旭町の相場師で、三河の大仙と云ふ大金持の息子が、何も悉もならぬ程お嬢樣に惚込むで、是非嫁に與れ、與れられねば、自分の身上不殘持參で、養子に貰つてくれと言込むだも、旦那樣は大得心なれど、お嬢樣が澁くつて今に談が纏まらぬさうな。然しお血統は唯一人の嬢樣の、何時まで那して御獨でも居なさるまい。いづれ養子取をなされねばならぬものならば、惚藥も佐渡のが第一能う利く當世、那麼割の好い聟殿を、お貰なさらぬと謂ふ事があろかと語る。一部始終を神妙に聞きたりし又六は、此時面上に怪しき色を動して、何も養子など爲さらずとも、一生那して居なされば可さゝうなもの。ないか。それとも先程言ふた通り、那麼量見は無けれど、唯那して居なさる方が、何時までも美しいであろと思うて。

又六は其夜の夢もお杉の姿、覺めては仍も目に殘る朝の間より、聞きし昨日の初音戀しく、折から阪揚後の用無き儘、幾度と無く裏の畠に通ひけるが、徒にのみ還りて、短き冬の日脚の傾ける頃、懲りずも又樣子見に行きたる

五度目に、始めて待焦れたる爪音聞つけて、是、是、是ぞと塀に立寄り、息を凝して、餘念無く耳欹れば、次第に澄度る調子に自ら身も溶行く心地して、覺めながら夢路を辿る又六の耳には、曲も無く、歌も無く、琴も無く、お杉も無く、唯五躰に沁度る梅檀香風。折からの薄曇に、苅田に鳴の聲細く、枯柳枝も戰がで靜心無く散る。

手事の中にも、分て短き夕天の曲の早くも了りて、爪音擢と絶えけれど、妙なる聲音は仍耳底に殘りて、醉へるが如く又六は立窘みぬ。少焉して二階の障子の啓く音するに心着き、見着けられては、と慌てゝ塀に身を貼着けたる人ありと知らぬお杉は、一人垂籠めたる辛氣さに、態度懶く欄干に倚りて、㊗苅田、汚野、煌々と日は無情も霜枯の色を打眺めつ。それも飽きてや、又内に入りて再び奏初めしは長唄の櫻盡、這度は障子の啓放ちたるまゝなれば、滑しき聲の一入妙にぞ手に取る如く聞えける。

飽かでのみ花に心を盡す身の、思餘りに手を折りてと唱出せば、又六は徐々と塀を離れて、密に二階を瞻げしが、雜木に遮られて効無かりき。大家ならでは彈かれぬと謂ひけむ、其琴とやらむを奏づる姿を切めて一目、と伸びつ、屈みつ、頻に心を碎きけるが、所爲やう無さに塀に攀上り、辛く も取縋りたる馬手の忍返は、朽ちてやありけむ、剣々と音するに驚きて、思はず面を擡げしお杉の調を過めて、啊呀と叫ぶ途端に忍返は脆くも折れて、無慘や、又六は仰向樣に投飛れつ。同時に硲と閉切る障子の内に、吃々と笑ひを忍ぶお杉の聲す。

(十一)　掛前

温桶を拂ひてより七日目、不意に又檢査のありけるが、檢査官は例の彭澤一人にて、一遍檢査簿を繰擴げしのみ。近來に無く手輕に濟みての歸時、母屋にて御一服、と切に康右衞門の引停めしが、他縣は知らず、爰許の收稅官吏は出張先に唯一椀の茶、それのみは構無けれど、氷砂糖一片、捶餅

一枚の鹿末なるも、菓子には手を附くるを許されず。意地汚くも撮める事の露るれば、收賄として罰せらるゝの掟。勤務中なれば是にて御免、改めてお邪魔に參らむとて歸りぬ。翌日役所退署後の夕暮、窮屈なる洋服扮裝に變りて、書生羽織の着流姿、是が昼間ぶりたる日頃の彭澤かと怪まるゝばかり、然りとは愛相好く遊に來れりと。

墨染の身は魚河岸の素通さへ、糸ほどの事も世間は井戸細の丈に丈足して、何の彼のと後の噂の煩さければ、と母屋に遠き茶室的の離座敷に、お杉が手前を賞翫しながら、釜の松風、茶筅の時雨、落葉を誘ふ凩の物靜なる夜咄。膳て會席紛ひの料理も出でゝ、彼是十一時近くまで酌交せしが、特に彭澤の嬉しく頂戴したるは、夕日に映ふ牡丹一枝の櫚を含みしお杉が酌と、其面差げに琴を調べし姿の消ぬべき風情なりけり。

鹿笛に寄る小男鹿のそれならねど、又六は敏くも琴の音を聞着けて、今宵も根好く塀外に立聽きしが、あはれ唯一目奏づる姿を見たき此頃よりの願

に、火影洩來る羽目の節穴を探して、遣る隈無く覗き廻れど、庭の木立に遮られて其効はあらざりけり。縦又木立の障無くとも、夜風を厭うて閉切りたる茶席の内の、見透かさるべき理無し、と一度は諦めしが、有繋に思に堪へざりけむ、密に裏なる野菜畠の塀を乘越え、生垣を潜りて、茶席の前栽に忍入り、下地窓の障子の糸の如き隙より窺へば、少に絃上を走る左の手をのみ認めつ。恁くては慶ばかり聞けると然して違はず、如何にもして唱へる顔をと憧れけるが、内より氣取られやせむと、身動きさへも儘ならず。只管息を凝して、姑くは石の如くに瞬れり。

手事、長唄、組、と宵より六七段も調べけるが、膳て十一時に近く、嘸やお疲勞ならむが、何卒今一曲聞納めにと望まれて、更に奏でし長唄は折からの冬草。設もや誘ふ水しもあらば、戀の柵堰止めよ、と唄了るを機に、御苦勞でござりました、と彭澤は褄を辷下りて、始めて伺ひまして色々と御馳足、特に思はぬ長座いたして申譯もござりませぬ。改めてお禮にと立

懸くるを、まあ〳〵宜うございませう、と主の留むれども肯かざるに、然やうなれば、是非又お近い内に。　何卒とお杉も共々、廊下傳ひに母屋の方へ送出づる氣勢なり。今はとて、又六もやう〳〵窓の邊を離れて、忍入りし生垣を潜出でむとする時、廊下に足音。お杉は一人早くも返來りて、取散したる跡片附と覺しく、皿小鉢等廊下に運出す樣子にて、折節微に琴の空鳴するは、裾か袂の觸れてにやあらむ、幽さに又六は又忍寄りぬ。程無く庚右衞門の返來れる後より、內儀も與に座に着きて、御酒の道具は今お花が退げに來る筈。其所へ出して、措けば可いほどに、一服立てゝたもとお杉の手前を賞翫しながら、徐ら夫に向かひて、彭澤樣は何ぞ御用でござりましたかと問へば、格別用でも無く、唯遊にと言未了て、毎小意地惡う背酷家の彭澤樣に、ついぞ無い昨日の檢査の寬かさ。何も合點の行かぬ事と思うて居たが、今日やう〳〵腑に落ちた。　落ちましたか、と內儀は氣遣しげに膝を進めぬ。　庚右衞門は其と無く先娘の方を見遣りつゝ、今夜

の口氣、何やら彼を嫁に欲しい樣子、と洩聞く外の又六は、思はずも佗と眼を瞪りたり。

懸替の無い後繼の一人娘、嫁に與る譯には行かねど、養子にとならば年恰好も好し、大仙よりは學問も有り、男振も醜からぬ彭澤樣、貰うて恥かしうない聟ではあり、殊に收稅吏と謂ふのが此方の目的。來年の普請まで彼男の檢査にて、首尾好く密造を見遁がさすれば、折角骨折つて釀成げたる酒を桶ぐるみ沒收られて、石稅の三倍などゝ謂ふ手酷い灸を點ゑらるゝ心配も無く、此方も大きに都合好けれど、とばかりに吻と太息吐きて、最早那麼魂膽爲るまでも無い、今年も何やら酒は失敗らしい、と投首したる庚右衞門。　あの今年も、と急込む內儀と與にお杉も色を變へて、其はまあ、如何した事でござりまする。

未だ確に失敗つたとも付かねど、酌の揚つてから今日で八日目。秩序の可い所では最早添掛に取懸る頃なるに、恁うして未だ杜氏も決めず、便々と

會所を閉めて措くなどと謂ふ、途方も無い事があるものか。運うても明後日か、明々後日頃には懸からねば、今年の仕込も最う不要！

此土地生抜とも謂はるゝ舊家を、俺の代になつて潰したとあつては、御先祖樣を始として、世間の人にも面目無く、第一今日まで恁うして華美に暮した者が、俄に零落の暁は、闇に悪崖から突落されたる如く、只唯途方に暮れるばかり、親子三人早速路頭に迷はねばならぬ次第。俺も今茲で會所を仕舞ふのは寔に殘念と謂はうか、無念と謂はうか、此儘では死んでも死なれぬ、と切歯をなしてみたりしが、舊の身上の半分とは行かずも、切めて四半分までにも恢復したい存念。左も右も龜甲鶴と謂へば、四五年前までは開東一圓に鳴響いた銘なれば、一年鹽梅好く出來中てれば、舊の盛に復すは苦も無い事。然らば設ひ今年は失敗らうとも、今一仕込、是非來年とこそは。難うござりましよ。今年の仕込さへ、那麼に無理算段なされたのでござりますれば、其を失敗つて又來年といふ事は、と内儀の危む顔を見遣

りて、それ、それだから此頃の談の彼男を養子にして、其持參を資金にと半言はせず。彼男とは、旭町の大仙とやら云ふ投機商の事でござりまするか、と辭急しう訊ぬれば、お前等は投機商と謂ふと、一口に博徒か何ぞのやうに卑むが、米相場と謂ふ事は決して那麼。卑い者とは申しませぬど、第一那麼齢の違ふ者に可哀相でござりまするし、出戻とか、二度目とか、此方に何ぞ弱味がござりますれば、設令親子程齢が違はうが、繼子が在らうが、我慢もいたしませうなれど、許嫁こそ破談になりましたれ、處女の十八と謂へば、今が嫁入の花盛。待ては未だ〳〵但附かはしい縁はござりますれば、彼談だけは思止るやうに。それよりは當面まづ倉の者に持參金が欲しければとて、彼が一生の大事を探して、及ばぬまでも、今年の仕込の失敗らぬやうに算段なさるゝが上分別。明後々日までに杜氏さへ間に合うて、今年の仕込が滿足に揚りますれば、少しは其で餘裕も附き、那麼聲取るにも及ばぬのでござりましよ、

と子を思ふ親の心は父も同じく、俺とても一人限の娘が聟に事を缺いて、好もしうも無い者を強與ひたくは無けれど、到底今年の揚は覺束無いと諦めて、よく〳〵の苦しい算段と察してくれ。お前達の指圖を待たうか、俺も此頃中より心當と云ふ心當は、遺る方無く問合せたれど、杜氏は謂ふまでも無い事、益に立つやうな年寄さへ見附からぬ始末。倉働而已は毎年傭附の甑切人足にて、何やら恁やら間に合はす事に爲たなれど、何分肝心の杜氏が無うては、要の脱れた扇も同然、添掛は未矣、淅塲にも懸る事は難しい二千石の大仕込。二百五十の酛醪は見す〳〵廢つて行くを知りながら、向河岸の火事見るやうに、獨り鬱勃と氣ばかり遄らす俺の切無さは、まあ什麼と思ふぞ、と齒を緊切りて男泣に泣きけり。

然こそは苦しき父の辭を、娘は聞くに悲しく、急上る涙を推拭ひて、それ程お困りなさるならば、甑切の若衆よりは勝でござんせう程に、彼又六とやら謂ふ倉働樣を代に使うて見たらば、と始めて口を開きしお杉の聲を聞

くと俾しく、最前より窓の外に貰泣せし又六は、忽ち全身を戰かせつゝも、蠱乎と突立つ時、不要〳〵、他の倉働ならば、隨分見樣見眞似に行つて出來ぬとも限らねど、人並外れた野呂作に、何で杜氏の眞似が出來やうぞ、不要な事、と首から更付けぬ主の辭は、百雷又六の頭上に落ちて、覺えず俊僜と茶席の壁に僵懸りぬ。

不意の物音に內なる人々は驚きて、衝と立出づる康右衞門、手暴に障子引啓くれば、颯と火影映す沓脫の傍に、黑き物の蹲まれるは必定曲者。誰だ、と聲懸くれども答應は無くて、更に動かざるに氣味惡けれど、弱味を見せじ、と衿頸取りて火影に引据ゆれば、然りとは爰に思寄らぬ又六が、色蒼白めて打顫へる態の合點行かねど、左も右一同の轟く胸は鎭りて、何所から入つて來せたと問へば、面無げに頭を擡げて、塀を乘越え、生垣を潛りて、と在りし始末を打明しぬ。此又夜更に用も無い者が、那麼難儀して、何爲に爰へは忍入りしぞと更に責むれば、早や言句も出でざるを、彌々嚴

しう折檻せらるゝに包みかねて、お嬢様の琴とやらを弾きなさるが見たうて、と實を吐けども康右衛門は疑霽さず。嘘言ふな、那麼淺薄な辨解が立つと思ふか、馬鹿め。さあ眞直に云うて詫ずば、警察へ渡してくれるぞ、と疊を叩きて居丈高になれど、元よりそれに僞あらぬ又六の、外に旨解かびやうも無く、只管身を窘めてみたりけり。

お杉は初より母の後に隠れて、氣味悪げに此場の躰を眺めたりしが、やう〳〵進出でゝ、お父様、最う勘辨してお遣りなされまし。常から此人は琴が大好でござりまするが所好のやら、時々裏の塀際へ來て、私の復習のを聞いて居りますれば、今日も同是其にて、外に如何爲うとて入つたのではござんすまい、と庇はるゝ嬉しさに、又六は蹲踞して、然やうでござりまする、俺は不斷から琴過し橙の事より、康右衛門も太く此男の正直を見抜きたる上に、お杉の言ふ所も聞けば、如何樣仔細は有らじ。唯愚者の無分別、とやう〳〵了簡して、今夜は此儘赦して遣れど、二度と這麼事のあるが最期、叱と赦さぬぞと赦されても、仍立遣らぬを捂しく、蚤く歸つて寐よ、と重ねて促す康右衛門の顔を、又六は睨と瞻げて、旦那樣、お願がござりまする。何ぞ俺をば杜氏に使うて下され、と思入りたる氣色なるを、康右衛門は冷かに打見遣りて、何吐すぞ、野呂松めが、と冷笑ふに懲もせず。何ぞ俺に造らして下されまし、旦那樣、一生のお願でござりまする。野呂松でも出來しますると、叱と！命に懸けて叱と美事に。はて不要だわ。蚤く歸つて寐て了へ。

(十二)　打置

酘の揚より添掛までの打置は先七日、八日乃至は十日の間にて、十一、十二と過ぎなば最早手遲れなれば、康右衛門は實に眉に火の附くばかり遑りに過るなりけり。過ぎつる年の改革以來、相談對手の番頭も無く、悉事の伝さるべき手代も有らぬ野杜の、主翁ら三河に出向きて、寺津、一色と偏

く杜氏の抱入に廻りぬ。

然る程に又六は茶室の庭に立聞の折、我を杜氏の代にと云ひしお杉の一言胸に沁みて、それよりは絶えず此事をのみ言續に、幾度となく主にも願ひけれど、二千石と謂へば石税のみも八千圓の大仕込を、野呂松と仇名の男には任せかねて、疇昔牛に化損ねたる蛙の喩。那麼益無き事を考へて居る暇に、組繩なりとも編めとばかり、採用られざるを口惜しく、夜は終宵、晝は終日之にのみ心奪られて、折々釋の解らぬ言を口走る外は、談懸けられても耳に入れぬ又六の、鬱々として病める人の如く、然りとは急に變れる擧止を、氣でも狂ひはせざるか、と他ながら久造爺の杞憂。

今日も朝より物思はしげに飄然と出行きしまゝ、正午になれども還らざるに、復裏の塀際に餓さも忘れて、二階の爪音を待銷すにやあらむ。世話のやけた奴め、と口小言ながら探しに出てし久造爺は、隱るゝ小蔭もあらぬ一目の野菜畠に、影も形も見えざるに胸安からず。此頃より樣子の怪しか

りければ、萬一井戸などに陷りはせぬか、と急ぎて釜屋の前の倉井戸七桁一々覗きて見たれど、變れることも無きに、更に樽屋、印屋と探廻りし後の造倉。爰には用無き身の入るに慣はぬ事とて、晝仍黯き奥の方の氣味惡く、唯仄に射入る窓の日影を便に、桶の間を彼方此方と、大哥や、又大哥や、と呼はりつゝ、軈て二階に昇りて、積並べたる酛醪の半桶を巡り、不圖前面の柱の根方を見れは、其處に石の如く蹲まれるは又六なり。おゝ、此方は爰にか。やれ〳〵嬉しやと胸撫下しつゝ、さあ、蚤く午餉に來やと促せど、仍物思はしげに眼を睞げるまゝ、俛れたる頸を起しもやらぬに、さあ〳〵蚤う來ぬと、阿爨めが又片附けて了ふわと急立つれば、又六は力無げに、爺樣、頼があるが肯いてはくれまいか、と更まりたる辭に爺は眉をば顰めて、俺に頼とは。　少し申上げたい事がある程に、お家樣の所へ伴れて行て下され、とは彌々訝しく、お家樣に此方が亦何用有つて、と小首を傾げしが、解めたと手を拍ち、彌々聟入の申込かなと笑へば、又六は

日頃の愚癡に似もやらず、然りとは色まで變へて卒の腹立。癲狂言はしやるな、人の眞面目な頼を然うした薄情爺樣に、重ねては何も頼むまい。見るさへ氣色が悪い、寄つて下さるなと言捨に起つを引住めて、是も劣らぬ愚癡の久造爺は、大方ならず氣を揉みて、慍るまい〳〵。何の用かは知らねど、左も右會うてもらうやうに、お家樣に申上げう、と打連れて此を立出でぬ。

午餉の箸も下さぬ先より煩く又六に促されて、餘儀無く久造爺は其由内儀に告やれば、左も右もと仲の間に通して、私に何ぞ談があるとやら、聞きましよ、と容も正して見ゆるに氣憶しつゝ、お願でござりまする、と又六は恐懼蹐出でゝ、何ぞ俺に造らして下さるやう、お家樣から頼むで下されましと。何程お願ひ申しても、順と旦那樣は肯いて下さりませぬが殘念で、殘念でなりませぬ。是非に御家樣から此念の達きまするやう、と後は胸迫りて得言はねど、言ふには勝れる執心の面色を、内儀も有繋に可憫しく、

解りましてござんす。お前樣が杜氏を爲たいと言ひなさる談は脇ながら聞いて居りましたが、それほどに執心とは。御存知無いはお道理、誰も俺の心を知つてくれる人はござりませぬ。眞の事、俺は給金も何も要ぬのでござりまする。唯美事に今年の仕込を揚げて、あの、あの何が一生那、して、唯那して在なさるやうにと思ふばかり。お家樣、俺は命懸けて醸成げまする、と何を言ふやら能くは解らねど、内儀は大方に推量して、それ程までに、内の事思うて下さるかと想へば、私も疎忽には思ひませぬ、云うござんす。旦那が歸られましたらば、屹と那麼に申しましよと云へば、又六は不足らしう、後とは言はず何ぞ今直、旦那樣にお願ひなされて下されまし。然も無ければ俺は爰を動きませぬ。と言ふたとて、旦那は外へ出られて昨日からのお不在。今夜遅くで無うてはお歸りなさらぬものを、然りとは餘り肯分が無い、と内儀の眞蹄然としたる氣色に、はい〳〵、俺が無理でござりました。それでは今夜お歸りなされたらば、お忘無くお

家様から、と本意無げに出行きたり。

肉儀の言へりし如く、昨日より寔康右衛門の不在ならば、我は左もなれ、久造爺は常住奥へも立入る身にして、主の他出を知らざる理無し。左右は爺にと思ひつゝ納屋に歸れば、久造爺は皖々と笑懸けて、甚麼模様であつた。お家様は御承知なされたか、とは先に造倉にて畔し聖入の談とも心着かねば、又六は萎々として、何やら不要らしい。いづれ確な事は今夜解る筈なるが、爺様、旦那様は全くお不在か喃と訊ぬれば、お不在の理は無いに、と爺も同じやうに眉を皺めたり。

抑康右衛門が遣度の三河行は、飽くまで内證にて、母屋の者より他は渡場の船頭、それさへも爰の主とは氣着かざりしほどなれば、滅多に塞所より奥へは入らぬ菜園男の知らざるも、理とは怎でか思及すべき。さては唯一筋の力草と頼みし内儀も、主を不在に言捨へて、躰好く我を追拂ひしか、と又六は無念さ遣る方無く、日暮を待かねて、再び内儀に會うて前の願を

繰返せば、其志は嬉しけれど、未旦那のお歸り爲さゞればとあるを、詐と思へば冗くも迫るに、遂に内儀の氣色を損じて、取附く島も泣かぬばかりに、復悄々と納屋に還りぬ。

一時も經ざるに、又六は猶懲ずも又臺所より取次を願めば、下女は遖々奥に入る間も無く返して、お家様はお風邪の氣味にて最うお寢み。何の御用か知らねど、旦那様は未だお歸りなされませぬ、と手も無く追返されし心外さに、久造爺を捉へて、然りとては日頃の無口には似ざりけり。

人は皆俺の事を野呂松〳〵と一口に、人並の交も出來ぬやうに蔑めど、全躰俺は何が他の者に劣つてゐるのやら。背も五尺に餘り、力も人並勝れて、不具でも無ければ病身でもない。此頃の倉働們よりは縱令勝れてゐやうとも、劣ることでは無い理の俺をば、野呂松〳〵と口逢く吐しをるは、何故であるやら一向解らぬ。

總じて他の者は功勞經たる山猿の、爲る事成す事皆人眞似にて、人が笑へ

ば笑ひ、人が泣けば泣き、人が慍れば慍る。那等が勤勉に動くのも、躍るのも、いづれ自分の心からでは無うて、人が恁うする故自分も恁うせねばならぬと心得て、自分の了簡とては無うて、其人眞似をせぬのを野呂松と謂ふものならば、如何も俺は野呂松に違ひ無い。成程他の徒は始終倦〳〵と、手足を動かし、目口を動かし、而も面白可笑う上手に動かすことぞ。なれど那等の動くは、皆自分の肚に動かねばならぬと思ふでも無く、唯人眞似に動かす分なれば、喩へば人の泣くのを見れば、自分は悲しう無うても一緒に空涙を零し、人の働くのを見れば、自分の仕事で無うても同じやうに不要働きをする。那等の躰は自分に動かすのでは無うて、縁も無い他のものに動かされる木偶坊。押並べて恁うした人前ばかりの奴等なれば、自然働くにも蔭日向を分けて、人前では人一倍に働く奴が、人の見ぬ所では人一倍に懶けるなど、隨分胡散な事もあるわさ。

人が何と言はうが、俺は俺の心ほど、確なものは無いと思うてゐる程に、自分の心に思ふ事より外は、設令指一本、舌一枚も決して餘計に動かさぬ。俺の泣くのも、笑ふのも、躍るのも、跋るのも皆心から、眞實泣きたうて泣き、笑ひたうて笑ひ、躍りたうて躍り、跋れたうて跋るのゆゑ、縦令人が褒めやうと、貶さうと俺は一向苦にはせぬ。

人は人、俺は俺、人が何爲うと俺の知つた事では無く、又俺が何を爲うと人の知つた事では無い。何所までも俺は俺の心のまゝに爲るほどに、自然他の者と合はぬも道理、やれ野呂松の、間抜の、馬鹿の、と道端の捨草鞋のやうに言はれるのであろ。眞箇の事、他には管はぬ、俺の肚は俺が能う知つてゐる、野呂松か野呂松で無いか、人眞似で固めた奴等に何の解うか。それを旦那樣まで那等の云ふ言を眞に受けて、俺には人並の事も出來ぬやうに、唯一口に野呂松と極めて頭から、手前などに人間の飲む酒の造られう理が無いとは何の事。旦那樣にも似合はぬ、餘りと謂へば無法な御辭で

はあるまいか。杜氏と謂うたら何程難有いものか知らねど、同じ人間の爲る事を、縱令野呂松の俺にも、出來ぬ理窟はあるまいが喃。何れ野呂松で通つて來たものなれば、今更怜悧者になりたうも無い、野呂松で可い、野呂又で管はぬ。何の〳〵、嘘にも怜悧者と褒められたくは無けれど、唯野呂松ゆゑに杜氏になれぬと謂ふのが、爺樣、俺は殘念で〳〵ならぬわな、と日頃に似合はぬ又六が言分に、久造爺も氣を呑まれて、一度は身の程知らぬ其望に呆れしが、有繋に又切なる一心の笑止にもなりて、道理だ〳〵、此方の口惜しがるのも至當なれど、左右は野呂松などゝ不景氣な仇名取つたが此方の不幸、まあ〳〵急かずに辛抱してゐや。寔野呂松か野呂松でないかは、旦那樣も目の有らしやる事、其間には此方の價値も知られやう程に。否〳〵、待たれるものならば誰も恁して遣りは爲ませぬ、と腹立たしげに蹈反返りて、獨喧嘩に飽倦みてゐたり。

霜月も二十五日と押迫れば、早きは中掛の最中、晩きも既に添掛には懸り

たる頃なれば、設令丹波は倉男の名所氷上の奥にも、最早手を空けて親仁の遊べるは無かるべし。然れば康右衞門の三河三界まで抱入に行きし効は無くて、會所を任かすべき杜氏は未矣、温桶巡さへ滿足に成る倉働も無くて、其夜の十時少し過ぐる頃悄々歸り來りけり。一日草鞋懸の田舍道に疲れ果てたる上に、萬鶸の嘴と咬違ひたる落膽に、身も心も綿の如く、着物着更ふる氣力も無くて、其儘納戸に轉となりたる康右衞門。㊗寢ながらお杉に脚半脱らしてゐれば、又樣が是非今夜、お目に懸りたいと申しまするがと小僧の取次。聞くも懊惱なる氣色にて、何の用かは知らねど、明朝來いと言ふてやれ、とけんもほろゝの挨拶に、小僧は狐鼠〳〵と遁行きぬ。是非杜氏に使うてと申して、氣毒な、午后四度も臺所へ參りました、と膝の上にて脚半疊みながら、聞かせがましきお杉の獨言。康右衞門は何とか聞きけむ、思はず勃起と頭を擡げて、姑く思案の躰なりしが、お杉、又六を呼返せ。あいと臺所へ急行けば、又六は仍上框に小僧と押問答してゐ

たりけり。お父様が合ふと仰有る。さあ此方へ、と思も寄らぬ吉報に狼狽ふるやら、喜ぶやら、飛立ばかりの又六は、分てお杉の斡旋と想へば、實に胸も破るゝばかりに覺えたり。

お杉の案内に隨ひて、康右衞門の前に出でたる少時は、唯迫來る胸をはやう〳〵推鎭めて、旦那樣、俺に酒を造らして下されまし、とばかり後は吃驚りて辭も續かず、眼をのみ瞬りて、答や如何にと頻に切無き片唾を嚥みぬ。康右衞門は仰向に臥したるまゝ默然としてゐたりしが、聽て此方を見向きて覺束無げに、手前は確に二千石の酒を釀成げる覺があるか、と問はれて少しも驚がず、有りませぬと事も無げに言發てり。餘りの答に辭も出ずず、呆れて瞶むる又六の面には、見る〳〵紅を濺ぎて、覺は有りませぬと、俺は釀成げねば措きませぬ。腕に覺が有らうが無からうが、同じ米で、同じ仕込を爲る分の、出來して出來ぬといふ理窟はござりませぬ。何でも彼でも釀成げねば承知しませぬ。出來ても出來なくても、屹と出來ます

る。設萬一、萬々一滿足に釀成らずは、其時は、其時こそは死むで退けまする、と膝を折つて詰寄すれば、康右衞門は屹と頷きて、可！今年の會所は貴樣に任せた。

（十三）添掛

一心一向、不退不轉の大發願。やう〳〵茲に成就せる嬉しさに、又六は一夜を睡ぬに曙の色、隱約と白うなりける頃より獨起出でゝ、會所を啓け、火鉢場を掃除し、神棚に燈を供へ、神酒を奉げて、精進潔齋拍手の音、鷄の聲、車井戶の轆轤も賑はしく、久しう沈みたりし野杜家の、俄に景氣附きて春來ぬる朝の如し。

這度康右衞門が抱入の約束せし人足といふは、大方此土地の百性にて、折からの野耳仕事も手空なるより、毎年唯大甁中を手傳に備はるゝ身の、元より其道の者にあらざれば、年寄無しには米淅も任せられず。之を倉働に

使はむは、下戸に唎酒爲すよりも無理なれど、唯一つ都合好きは、孰も近き邊に住へる者等なれば、それと沙汰すれば直に集來りて、其日の午後には早や米摺唄の陽氣に聞えぬ。

年寄の指圖のまに〳〵、機械の如く動きたりし從來の野呂又と違ひて、今日よりは苟にも二千石の大仕込を名譽の杜氏。殊に人足不足の會所の、住慣れし親仁にも隨分持徹ある大部屋を、昨日までは温桶巡さへ許されざりし倉働の身一つに、搗てゝ多勢の人足を使役の年寄に、麹係の代師も兼ねて、然りとは大分の勝荷なり。見事皆造まで又六に預け通さるゝや、と任せたれども康右衞門は有繋行先の心許無く、分て久造爺は我子の事のやうに心配して、二千石と謂ふ大仕込の、萬一失敗つた曉は旦那樣への申譯、此方も生きては居られまい。大丈夫か、失敗は爲ぬか。設心許無いやうならば、決して恥にもあらず、外聞も無ければ、無益な我慢を張らずに、今の間にお辭り申して了へと心着けて、あはれ咬殺されむばかりに慍附けられぬ。

日暮までに蒸米も精け訖りければ、漬桶に浸措きて、萬事は明日。日出前より甑に取懸る手筈なれば、今日は未寐道具も持來らざりし一同は、一先家に歸りて、迹は淋しき火鉢塲に、又六唯一人兀然と圍爐裏の傍に蹲り、掛留の日數、搾揚の順序など胸算用の折から、一寸と呼ばれて母屋に到れば、康右衞門は仲の間に夕餉の膳を控へて、お杉の酌に一銚子傾くる所なり。さあ又樣、此方へお入りなされ。其所は冷ゆる程に、後を閉てゝ仍少許前へ、と內儀は瀨戸燒の手爐に炭を加ぎて薦めたり。色々談も有れば、直と火の傍へ、と康右衞門は飲未了の盃干して、一先一盞と差出すを、手にだも觸れず。俺は一滴も飲めませねばと云ふを、馬鹿言ふな、酒造る杜氏が酒を飲まぬと謂ふ事があるか、一盞受けよ。是は去年の圍なるが、何と思ふか、利酒してくれと差付けられて、今は是非無く受くれば、傍より德利を把りてお杉の酌に、盃持つ手の見苦しく顫ひて、健溢せしに、あれ、

御免なされまし、と桃色絹の手巾にて濡れたる膝を密と拭はれ、胸は彌々悸々、顔は飲まぬに醉へるが如くなりぬ。

何か又公に肴を、とお杉を起たせし後、強つてとの頼故、左も右此方に會所を預けたれど、如何だ喃、見事出來さうか、と覺束無げに顔を視られて、又六は口惜しげに一膝動出で、出來るか出來ぬか知りませねど、俺は何所までも出來さずには措きませぬ。何でも彼でも出來しまする、と毎ながらの思入りたる氣色なり。康右衛門は安心も出來ざれど、一度任せしものを、今更所爲無き怨言を聞かして、折角の意氣込を挫かむよりはと思返して、いや、其だけ聞けば私も大きに安心。此五六年以來、可惜人氣の落ちた龜甲鶴の銘も、お前の手腕で來年は是非評判を恢復すであろ。私も其を樂に、初呑切を待つてゐる程に、お前も精々骨を折つてくりやれ。多度とは言はぬ、切て半分も火を乞はずに圍ひ了せたらば、お前に二人前の給金を、と半言はせず、はて無用にして下され、俺は給金が欲しうて。造るでは無

からうが、働けば働いたほどの酬は無うてならぬもの。何れにもせよ未だ半年も先の事、添掛にも懸らぬ今の内から、那麼穿鑿するにも及ぶまい。お杉、私は最う飲まぬゆゑ、又公に多度馳走して與つてくりやれ。醉ふたぞ〳〵。

實に戀人の姿は日輪にも喩ふべくや。一日お杉の姿を見ざれば、心鬱ぼれ、氣朽ちて、終日雨に降籠められし如く、快からぬ事は一方ならねど、然りとて又今宵のやうに膝突合せては、宛然土を出たる眞晝の鼹鼠、眩き光に射窘めらるゝ心地して、倒眞向に眺むべくもあらず。膏汗津々と切なき思の又六は、飲めぬ身の早や爰に用無ければ、留むるを振り拂ひ、告別も匆々に立ちし跡に、内儀は手爐の火を巨燵に移しながら、折角與らうと謂ふ給金も取らずに、好むで無酬働かうとは、如何いふ意と訝るを、娘は何氣無う、其代、一生家に置いてもらひたいと言ふのでござんせう。さあ、其一生が解らぬではないか。恩も義理も無い所に、一生無酬で飼殺にして

もらひたいとは。其も久造のやうに行場も無い老人ならば知らぬこと、何處へ行ても一人前の若衆で通る又六の、而も杜氏さへ爲やうといふ男が、何樂に、不思議ではないか。

折から帳簞笥の置時計は十時を打ちければ、醉倒れたる康右衛門を搖起し、一同臥戸に入れば、間も無く火の番の拍子木と與に、臺所の者等も早や寐仕度と覺しく、大戸の潛鎖す音。お杉は何とか爲けむ今宵に限りて就眠惡く、十二時過ぐれど目は合はずして、何所やらの夜伽の念佛微に、犬の長啼、五位の一聲、納屋の塒に鷄の膈膊つくは、例の黑猫や入りけむと思ふ耳、許に、颯と降出す雨。

間も無く時計は一時を打ちぬ。お杉は便所に起出でゝ、手水せむと椽の雨戸を開けば、水のやうなる月影の流入るに、さては雨と聞きしは空耳なりしか、と柄杓片手に手洗鉢の氷を叩きながら、顏のみ出して外面を見遣れば、宵の間の凩に雲や吹散されけむ、宛然拭へる如き一天に霜滿ちて、十

日餘の月は冴けく、晃々と瓦を辷る光の凄き大屋根の彼方に、少に見ゆる入江の檣に低く、夢のやうなる淡き星影一點、二點。慓然と身に泌む寒さに胴顫しながら、急ぎて戸を閉むとして、不圖造倉の方を見れば、二階の右の端なる窓の煤障子に、氣着かぬまで仄に火影の照せり。未だ蒸米にも取懸らぬ今宵、夜更けて倉の二階に人の居るべき理無し。合點行かずと幾度か見直せども、正しくそれに違無ければ、氣味惡うなりて、仲の間の父を搖覺まし、恁くと告ぐれば、康右衛門も寒さ忘れて起出で見るに、實に造倉の二階の窓に微なれども映光。捨措かれず、と寐衣の上に有合ふ半纏引被け、坪の内に下立ち、木戸の鏁外して出行きたり。迹にお杉は寒さと怖しさに、唯戰々と火影の窓を目戍りてありけるが、自己一人の心細さに、軈て納戸の母を起しにぞ行きける。

大地は凍てゝ氷の疊、跡も切れなむ冷たさに康右衛門は足爪立てゝ、月光に屹と前面を見れば、今しも造倉より出來る人影あり。さてこそ曲者、と

小蔭に忍びて覗へば、這は什麼、重着してさへ最と堪難き寒天の真夜半に、褌一つの赤裸、抑如何なる氣紛者にやあらむ。稽々と廣場の果の釜屋の方へ駈行きけるが、其まゝ廂の前なる倉井戸の傍に立寄るを、投身かと思はず一足踏出す途端、細をば手繰る轆轤の音。はや一釣瓶汲揚げしよと見る間も無く、然りとは潔く頭より颯と浴びたる水は、月に光りて、宛然白銀の簀を被さたらむ様なりき。

抑何人の如何なる念願ありてや、奇特の寒垢離、と見る間に六七杯の釣瓶を替へて、其盤再び造倉の方へと駈行く。廂傳ひに尾來る者のありとも心着かぬ彼方は、傍眼も振らず戸口を入りて、内は黒白無き闇に姿は見えねど、確に階子を昇行きし氣勢は著く、康右衛門も續きて手探に二階に上れば、北の隅なる屋根裏の神棚に、訝しや、今頃何の燈明豆よりも小く、影朦朧たる下に稽首けるは例の裸なり。覺られじと桶の後を廻り、傍近く忍寄りて、微なる火影を便に透見れば、思も寄らぬ又六が、全身濕鼠の見る眼も酷く、噴々と齒根も合はぬばかりに打顫ひつゝ、緊乎と兩手を合せて、一心不亂に祈念するを聞けば、南無や松尾大明神、何卒！何卒今年の仕送を許らせ給へ。

怪くと聞きたる康右衛門は、忽ち霜を浴びたるばかりに總毛竦ちぬ。世に憚しき其志の程身に浸々と、我にもあらで眼を濕ませしが、今無下に驚懸けて、祈願を妨げむも心無しと思ひ、其盤踵を返して、密と母屋に歸るを、待かねたる妻と娘は、氣遣はしげに問寄る右左、如何でござりました。

(十四)　中掛

南無松尾大明神、此身は縦や恒河砂の菩薩を潰す罪業深く、生ながら濯口地獄に墮落して、五十由旬の熾鍋に酒茹の苦患も厭はねば、唯只這度の仕送を首尾好く揚げさせ給へ。身を生贄に飽くまで醸成げむ、と躬ら誓し金剛不壊の大勇猛心は、宛然燃ゆらむやうに全身の血を沸して、飯食ふ少の

間も絶へず心に繫る造倉に、多勢の人足と與に必死となりて働ける間は、實に一切の忘想を忘れて、其にのみ一向專念に心を注げど、少時仕事の絶間を火鉢場に憩へば、忽ち胸に浮ぶは軈ての釀成。最切て待遠しくもあれは、然りとては怪しう氣遣しくもあり。何とやらむ怖しくもあれば、又樂しくも思はれ、遂には其身を其儘に堪へ難くなれば、毎も物狂ほしう造倉に駈入りて、手中次第に櫂入する事夜晝の別無し。最初は人足們も怪みけるが、後には慣れて、復例の狂搔とのみ笑うて聞流しぬ。

八斗四升酛一つに付米一石、麹三斗六升、水一石一斗は何方の添掛も大方變る事無し。清酒桶一本に酛一つ、水、麹、さては蒸冷却の强飯と次第に懸了りたるを、萬遍無く混合せし後、藁筵もて緊乎と桶を裹置く。恁くて一日一夜を越えて、翌日の夕暮、はや盛に沸騰るを四つに切りて、荒う櫂入を爲るなり。それよりは絶えず沸方を試みつゝ、軈て丑三近く二番櫂を入れ了れば、一同火鉢場にも歸らで、直ちに己が臥所と定められたる涸倉

の二階は、燈火も無き闇の手探、疲れし身には糠臭さき空俵も鏡布團の三枚重、睡る間こそ刹那の極樂。此方は是より地獄、と引違へて起出づる甑番の、獨り竈の下を焚附くる時、又六は未だ寢ずやありけむ、働着のまゝ然と釜屋に入來りて、俺が代つて與らそとばかり、早や又棒片手に竈の前に蹲れり。

强がち爰許のみにあらず。總じて造酒屋の杜氏は、何方の會所にても親仁〳〵と立てゝ、主も一目措くの勢なれば、一時傭の甑切人足など、直接に口利くことも愜はざりし去年までの事を思へば、然りとは又六の輕々しき爲方を甑番は却て氣味惡く、もう以來は大丈夫、決して昨夜のやうに水を斷らしなど爲ませぬほどに、何卒安心して寐むで下され。氣を着けて焚きまする、と其場を立たぬをやう〳〵追やりて、手づから水を加し、薪を添へ置き、着物を脱捨て、例の淅場に毎夜の如く水垢離を取りけるが、如何しけむ、今宵は寒さの特に身に沁むとぞ覺つる。軈て祈念し果てゝ、釜屋

に着物着たれど、手足の戰慄は何時までも歇まで、卒に頭さへ重く、髮毛の焦げむばかり竈に寄れど、仍五躰は鳥肌立ちて、顏のみ熱强く、頭は彌々割るゝやうなるに、さしも氣丈の又六も我慢爲難く、夜の明くるを待かねて、飯番の起出るや否や、身は火鉢塲に偃れたるまゝ、少焉は起上る力も無かりけり。

然れば晝間は衆ながら大方の事を指圖して、大事の時のみ辛くも起出でけるが、其日も暮れて、早や荒櫚より二十四時の一番造は、彌々中掛を懸くべき時刻となりけり。米淅、蒸米、さては添掛の懸入ならむには、總て昨日の爲方を反復すのみ、一同に任せたればとて事も無けれど、中掛は一番造の是ぞ發端。設令身は造倉まで遣行きてなりとも、杜氏躬ら手を下さゝれば什麼とも所爲無きまゝ、又六は向鉢巻に頭痛を忍び、狼狽廻る一同を對手に、劈頭巻筵を剝ぎたるを清酒桶二本に分ちて、添掛に倍增の米、麴、水、總べて懸方前と伴しく打合す頃には、心地一入惱ましう覺えけるも、今少時と强ひて悚ゆる苦しさに、齒を緊切りながら、清酒桶に架渡したる踏板の上に戰く兩足踏緊めて、額に浸染む膏汗を拭ひも敢へず、一心不亂に混合の櫂入るゝ樣の、他に見る目も側はしや。毎の元氣好き倉唄も出でずして、やう〳〵一本の櫂入を濟ませ、更に今一本の清酒桶に入初めたる間も無く、急に頓激しく、踏板の音するまでに身を戰かすよと見えしが、片手に鼻と櫂をば摑みたるまゝ、朽木を倒すが如く後樣にぞ撞と落ちける。それと見たる四下の人足們は一度に驚きて駈寄り、辛うじて助け起せど、顏色土の如く、起上るさへ苦しげに見えければ、中にも力有る一人が肩に曳懸けて、やう〳〵火鉢塲に舁入れたり。

怱くと母屋へ報すれば、唯一本の力草なる又六に、今過ありてはと取るものも取敢へず、目色を變へて駈着けたる康右衞門。昵と枕頭に容躰を目戍りて在りけるが、素人眼にも確に重くはあらぬ瘡と見て取り、やう〳〵安堵の胸撫下しつ。耳許近く口を寄せて、如何だ、苦しいかと訊ぬる聲の通

じけむ、又六は弗と目を睜き、切なげなる息を吐きて、あゝ、旦那樣でござりましたか。何の氣遣うて下されまするな、唯少し惡寒がする許。明日は必ず癒りませう程に、誓文、掛を亂はすやうな事は、と恁る中にも仍仕込の秩序を忘れぬ志嬉しく、然うとも〳〵、些の眞似程の輕い瘧なれば、二三日内には屹と癒るであろ。無用な心配せずに、今夜は可成温にして寐むが可い。後から藥と一緒に巨燵を持たして寄越そと言へば、勿躰ないとばかり、又六は感涙に辭もあらざりしが、卒に思出して、旦那樣、何卒倉の者に吩咐けて、今の清酒桶に蚤く擢を入れさして下され。可成能く混るやうに。

翌日は間日の事とて、宛然病も忘れたらむやうに、毎の元氣にて起出でしが、有繋に食ふ物には味無く、殊に働衣と着更へて仕事に懸れば、自ら常に異れる躰の氣怠くて、取分身に沁む寒さの堪へ難さに、再び火鉢塲に引返して、圍爐裏の邊に布團引纏ひながら、那是と一同の指圖してゐたりし

に、下女を案内に、思懸無きお杉の見舞に來りぬ。慌てゝ布團撥退け、框際に出迎ふるを押止めて、可うござんす。さあ寢むでお在なさんせ、とお杉は淑に座に着きて、病の樣子を問出づれば、又六は世にも嬉しげに潛々と涙を流して、はい、忝うござりまする。今日は餘程氣分も宜しうござりますれば、此樣子なら午後は仕事に懸れませうと云ふを、那麼無理して、設瘴返すやうな事があつては大事ゆゑ、寛縱と落着いて、氣も無いやうに熱を除つたが可うござんす。現に今度の瘧も、餘り無理に體を役うたゆゑとのお父樣のお辭。此寒いにまあ、聞いても悚然とするやうな水垢離など。

えゝ、貴方が如何して其を、と口には言はねど、太くも呆れたる又六の面色なり。

其程までに内の仕込を心配して下さるお志は、眞に〳〵、お父樣を始め私までも、疎忽には思ひませぬ。忝いとも、嬉しいとも、口には申しやうの無い程難有うは思ひますれど、綿入の重着してさへ凌がれぬ此の寒天に、

那麼無理な事しては、甚麼な丈夫の躰にも障りましよ。松尾樣も大切には違ひ無けれど、會所に取つては其よりも、一層大切な杜氏樣の躰に、萬一の事がござんしては、折角是まで取懸つた仕込をば、又休まねばならぬと言うて、それは〳〵、お父樣も昨夜此處からお還りなされて、始終其事ばかりを御心配。　えゝ、然程に俺の事を、お孃樣は俺の事を思うて下れまするか、と涙の眼輝きて、何時までも呢と面を目成らるゝ氣味惡さに、お杉は思はず漸々と退りたり。もう〳〵心配して下さるな。俺も此後は可成躰を大切に、忘れても無理な事は爲ませぬ程に、安心して下されまし。皆樣にも厄介懸けて濟みませぬ。　何の、濟むも濟まぬもござりませねど、何ぞ私達の心配も想うて、呉々も躰は大切にして下されまし。之は美味うもござんせねど、熱のある時は鹽氣の物よりもと思うて、わざと私の手製、と下女に持たせし瀬戸重を枕頭に直して、軈てぞ歸るお杉の後影を、又六は只一向に伏拜み〳〵ぬ。

元より康右衞門の吩咐もありけれど、お杉の心入も優しう、暇ある毎に幾度と無く見舞ひ來るを、又六は嬉しさ過ぎてなか〳〵に心苦しく、殊更元氣を裝ひて、仕事に起きむと頻に遄るを、次の癉が强ければ、と常に辭を盡して留めけるが、一番造は中掛の出來。是大事の瀬戸なれば、人足等に打任せ難し、と布團を蹶つて起出でし又六は、造倉の清酒桶に二王立の姿贏れて、有繫櫂持つ手の懈げに、聲張上る一節も寒蛩月に咽ぶの力無く、宵は酖搔く、夜半は甑、曉の淅塲が愁ろごさる。

（十五）留掛

お杉の優しき介抱ゆゑか、或は鹽酸規尼涅の効か、又六は僅に二度癉ひしのみにて、再び火にも燒けまじき岩疊なる躰に復りつ。元氣は一入盛に、仕込は逐次捗取りて、一番造は中掛の出來となれば、這度は清酒桶四本に分ちて、彌々留掛の懸高は添掛の三倍、合せて米十石、水十石の勘定は是

にて成立ちけるなり。

混雜、荒櫚、初櫚、二番櫚、總べて、添掛、中掛と異る事無く、彼是二晝夜にて、留掛の出來となりて、一番造の始めて大桶に移されたるは、年も改りぬる初春二日の朝なりき。

總じて田舍は昔を守る事堅く、今も仍此邊は押並べて陰曆を用ふるが中にも、造酒屋ばかり分けて舊ならでは松さへ立てぬ正月も、有繋に春と名の附けば、雪催ひの天にも霞や立つかと想はれて、自ら人の心も長閑に、野杜の家も毎年此三箇日の間は、交替奉公人に暇を與へて、倉の者にも心ばかりの盃。樽底の埃臭き濁酒も飲めば醉うて、何時しか流懸りし眸に何をか見若けゝむ、二三人の人足等、一度に哄と響動き出づる廣場の隅には、平常着のまゝなるお杉が、針妙對手の遣羽子に餘念無かりしが、恁くと見るより、嵐に吹飛ぶ蝶の裾も翩々と、慌忙しく遁出すを面白がり、彌々追迫るに狼狽へて、我にも無く造倉に馳入る途端、呵呀とばかり、人足等は一度

に立停まりぬ。

實に一同の驚きしも理。總じて酒倉には不淨を怖るゝ事甚しく、園頃の酒倉にさへ、情慾附きたる女の近くを忌むほどなれば、況て仕込最中の造倉に、年頃の娘の足踏入れたる、誰かは恐れ驚かざるべき。松尾大明神の御祟烈しく、百何十本の醪は立所に腐了らむ、と人足等は醉も醒果て、互に顏を見合はすのみなり。お杉も始めてそれと心着き、慌てゝ驅出でたるも今は遲し。折節火鉢塲の窓より恁くと見て取りし又六は、素足のまゝ狂氣の如く飛來りて、矢庭に無圖と肩頭摑める血相の凄じさに、あれと思はず聲を立つれば、何とか爲けむ、又六は忽ち糸の切れたるやうに、搖然と手を放して、只悲しげにお杉の顏を打目戍れり。

私としした事が、まあ飛むでもない。如何いたしたら可うございませう、と聲も惕息逸方に晦るゝを、又六は身動きもせず、言句も出さず、木像のごとく成りて、健瞶めらるゝお杉の身は行くにも行かれず、在るにも在られず、

顔は上氣に紅して、額に苦しき汗の玉を綴りぬ。眞に如何いたしたら可うござんせう、と濕愛を震はすれば、俺にも解ませぬと言捨様、衝と倉の内へ入行く又六の影見送りて、惘然と立窘みたるお杉の後より、針妙は密に忍寄りて、那麼馬鹿に管うて居なさらずと、早く母屋へお出なされましと勸むれど、お杉は身の罪の可恐しさに、顔蒼白めて去りやらぬを、今の險脈では、又甚麼眞似を爲るやら知れませぬ。早く〳〵と急立て、連れ去りけり。

始終の樣子を眺めたりし人足等は、造倉に入りて見れば、唯在る清酒桶の臺木に腰打懸けて、又六は腕を拽き、目を閉ぢ、深き思案の首を俛れたり。親仁樣、如何爲なされた、と劈頭年長の一人が聲懸くれば、やう〳〵重き頭を擡げて、徒爾、もう徒爾、と言發ちて再び力無げに差俯くを、縦令徒爾であらうとも、せめては今の間に早く清めたらば甚麼もの。曾が總で桶から土間まで、倉中鹽花で清めたらば、又失敗ずに保たうも知れぬ。設令保たぬまでも、唯恁うして腐敗るを待たうよりは勝でがな。え、是、親仁樣と人足等の口々に勸るに、効無しとは思ひながら、左も右も其辭に從て、後は一同に任措き、其身は火鉢塲に蕭靡と打仆れたり。

造倉は直に人足總懸の大掃除、片隅より帶目清く掃出す跡より、限無く撒散らす鹽花は粉雪と散布きて、桶を居去らす譬、諸器械を動かす音は地震のやうなる騒に、康右衞門は何事と來て見れば、此躰なり。驚きて仔細を問へば、徒愛無き迷信を心可笑く思ひながら、言うて聞かすも無益の業と、爲すが儘にして、何も言はずに其塲を去り、足次手に火鉢塲に立寄れば、又六は枯木仆に優れてゐたり。如何ぞ爲てかと壁を悪くれば、勃起と啜起きて、是は旦那樣とばかり、續く辭は無くて悲しげなる顏色を、心許無く餌ぬれば、窮つた事になりましたとは氣懸、又癪でも始めたか、と框に腰を下したり。何の、俺の躰ならば如何ならうとも管ひませぬど、一大事が出來まして、と言ふさへ憚る氣色なるを、推て問ふ程言はざりけり。

聞かずとも大方推したる康右衛門は、少しく辭を改めて、甚麼大事が出來たのかは知らねど、皆が大騷して倉を清めて居るのを見れば、何ぞ不淨な物でも入れたのであろ。而し罰の、祟のとは開化けぬ昔の愚。元々何の氣無に爲たる不調法をば、神は裏の裏まで見通し給へば、大方の事は寛大に見免して下さる筈。喃又、此方さへ正しければ、罰も祟も滅多に中るものでは無いわ。那麼何でもない事に氣を落さず、何所までも精を盡して、天晴見事に出來してくりやれ。從來のやうに丹精して、遣る所まで遣拔いた上で失敗る分には、これは爲方も無い。私の不運と諦めもせうなれど、設茲で嘘にもお前に中折の氣色が見えたら、縱令何の祟で失敗じりたるにもせよ、私はお前の怠た所爲にして、何所までもお前を恨まねばならぬ。可いか又六。

今更言うて聞かすでも無けれど、温桶巡さへ許されぬ甑揚りの倉働に、默つて二千石からの大仕込を任すといふは異例の事。他で見なされ、設令松

尾樣が證人に立たうと、お前のやうな生若い、素性も知れぬ渡者に杜氏は未矣、年寄にも使ふ事では無い。何迄も彼鬼のやうな源作に、野呂松〳〵と口汚く追廻されて、一生頭の上る時節も無いのが氣毒さに、他に煩いほど申込の有つた杜氏を皆辭つて、恁うしてお前に會所を持たした私の志も、少しは汲むでくれねば困る。と言うて何も其を恩に着せて、餘計な働を爲さうと謂ふではない。唯世間の杜氏並に働いて、切て半分丈火を乞はずに圍通さるれば、而も二人前の給金を與らうと謂ふではないか。それ程私の肩を入れて居るのも思はずに、今更氣を挫くやうなお前でもあるまいが、設又間違うて然うあらうものなら不埒千萬、と種々勵ます辭に、弱る心を辛くも取直して、可、解りました、最う以來は松尾樣も何もござりませぬ、俺が腕一つで屹と釀成げまする。縱令甚麼罰が中らうと、祟があらうと打拂つて、見事出來してお目に懸けまする、と潔く辭を番へたる又六は、又もや奮ひて高調子の倉唄に、長く二十五間の桁の塵を動しけり。

然れども仍旦夕此事をのみ心に懸けゝるが、遂に然るべき樣子も無くて、仕込は彌々調子好く捗行き、其月の末方、懸了りたる留掛は悉く大桶に打合せられたり。恁くて二時間毎の櫂入幾ど五六十回にて、酛と伴しく冷泡、大泡と次第に湧出して、やう〳〵温氣を持つに隨ひ、彌々盛に七八寸を昇りて、軈て冴泡とまで湧上れば、再び大泡に返り、小泡に還り、湧きは自ら薄く、遂に玉泡となりて消えぬ。此間彼是十一日餘にして酒の風味は出で、茲に始めて醪は成れるなり。

（十六）初揚

十石搾の大槽四艘、いづれも八尺に三尺、深さ四尺の總檜なり。直徑二尺、長さ一丈五尺の櫸の支柱を埋て、五間の桿棒を添へ、十六枚の松の板木、二十貫の搾石九十六箇。垂甕の蓋を開き、樋口を切りて、初揚遲しと待構たる一同。醪撿査の了ると與に、それと又六の指圖を合圖に棒を揃へて搾

り始めぬ。

澁の利きたる酒嚢の、宛然杉皮もて仕立てたるやうなるに、大桶の醪を塡めて、一槽に十二乘。緊乎と檜の一枚蓋をしたる上に、板木を挾みて、天秤撥に跳上たる桿棒の柄の下に、繩打二人づゝ相對に立ちながら、與つた、取つたの懸聲面白く、互違に打懸くる組繩の端には、一抱もあらむずる搾石を釣下す。恁くて桿棒一本に十二、さては十三づゝの石を二列に懸けて、さしも根府川石のやうなる根松の板木も、窪入るまでに緊着たれば、布目を洩れて盛に樋口を迸る荒走の垂、一口嘗めて、又六は思はず出來たと躍上りぬ。

丹精に丹精を重ねて、膓も腐らむばかりに心を苦しめし醪の、首尾好く搾揚げられたる其嬉しさ。又六は物狂ほしきまで勇躍をなして、傍なる甑番の柄杓を捥取り、有合ふ猿桶に汲出して、溢るゝ滴の働着に傳ふも氣着かず、心も空に母屋へ持行きて、出來ましたわ、旦那樣。搾れました、出來

ましたと臺所口より呼ばはれば、まあ、それは〳〵と奥より走出づるお杉。おゝ、お孃樣出來ました。出來ました〳〵、見事に出來ました、と猿桶突附けて、旦那樣はと喚立るに、今一寸お出懸なされてお不在なれど、須臾お歸宅。眞に之を御覽なされたらば、甚麼にお喜びなさるでござりましよ。貴方もお喜びなさまれまし。俺も念願愜うて嬉しや〳〵、と手を採り足を蹈鳴せば、それでは直に初揚のお祝を、とお杉は笑も滴るゝばかり。否待つて下され、未だ一番槽をやう〳〵是而已、搾揚は明日の事でござりまする、と又六は倉遑造倉へ引返しつ。樋口の垂はやう〳〵細り行きて、次日の午少し過ぐる頃には、はや一滴も出でずなりければ、垂甕に溜りたる濁酒を溜桶に汲出して、澄桶に移たるを量れば、醪一石の手前、八斗八升と謂ふ上々吉の垂歩合なり。又六は彌此出來榮を嬉しく、直に二番槽に取懸らせて、澄桶の目張も爲せし後、一番槽の搾粕は母屋の注文。大方離せたらば、外形の可さゝうな所を麴蓋に

一抔、臺所へと人足們に吩咐措きて、更に手近に離したる二三枚を取り、慌忙く主の居間に候ひて、旦那樣、如何でござりまする。八八といふ垂歩合にて、皆此通裏打つたのは一枚もござりませぬ、と矜顏に投出せし粕を、康右衞門は左瞻右視て丁と小膝を拍ち、いや如何も見事に搾れたわ。此粕の鹽梅では然ぞ醪の湧も好かつたであろ、是ならば什麼苛酷家の撿査官にも小言はあるまい。又六、忝いぞ、と然しも大風なる康右衞門も思はず頭を下げて、眼をさへ連瞎きぬ。此の鹽梅ならば今年の出來は大丈夫、圍までは心配もござりませぬ、と昂然なる又六の辭を、實にもと康右衞門も打頷きしが、否々、未だ容易安心は出來ぬ。仍一つ何よりの難所を越さねば、とは訝しさの限なり。火入か、初呑切か、それとも澄でござりまするか、と氣遣はしげに膝を進むる又六を打見遣りて、康右衞門は唯口を噤みぬ。旦那樣、其越さねばならぬと云のは、何でござりまする、氣懸でなりませぬ程に、何卒早う聞かして下され。聞かぬと言うても、是非聞いてもらは

ねばならぬ事、と謂ふは他でも無い、實は此次の撿査が、と言未了て一際聲を密めたり。改ては未だ言うて無けれど、いづれお前も源作から聞いてゝあろ。縱令聞かぬまでも、現在内の仕込を引受けてゐる杜民の、寇門札通りか、然で無いかは、知るまいと思ふても知れる理の那五百石。是までの撿査は唯算盤の上のみなれば、帳簿面で如何とも濟むで來たれど、此清酒撿査の次の皆造撿査となりては、然う手易うは得も濟むまいと想へば、是が何より難所の苦勞。

運拙くて、設那五百石を發露されなば、それこそ此龜甲鶴の會所も一度に戸を閉めねばならぬ。去る十五年御改正の第六十一號の御布告にも、隱蔽したるものは其酒類を沒收し、其酒類の石數に相當する造石稅三倍の金額を科すとあつて、發るが最期、五百石は否應無しに沒收られ、折角吟味に吟味して、鬼の牙のやうな阿久比米を用うたのも、お前が丹精に丹精して、水垢離まで取つてくれたのも、皆是水の泡。犬骨折つて鷹とやら、元も利

も情無い目に遭ふのみならず、其上に一石四圓の稅金を三倍といへば、十二圓づゝ二五の十、一五の五、六千圓といふ甚太い罰金を取られねばならぬわさ、と聞くに又六は目を圓うして、それは又眞箇の事でござりまするか。えゝ、其丈眞箇に取られるのでござりまするか、と呆きれて少時は辭も無かりけり。さあ、其が眞箇の事なればこそ、私も這麼に心配する。御道理でござりまする。俺は又罰金と謂ふものは、政府が懲戒の爲に取るもの故、高々五十兩か、百兩が最極のものと想うてゐましたに、六千兩とは餡魂事！

折から隔の襖を細目に啓けて、旦那樣、お支度が出來ました、と知らする下女の辭に、康右衛門は膝を起して、左も右其五百石而已は何所ぞへか隱して、撿査官に發露けられぬ工夫が肝要。何れ詳しい談は後の事にして、今日は先初揚の祝に一盃。何も無けれど、お定例の骨董鮓に荒走の濁酒、未だ洋のまゝなる新酒の麹臭うはあれど、お前等の丹精を賞翫に、私も一

緒に戴かう程に、さあ、早う皆をば伴れて來やれ。

（十七）滓澄

如月二日、千五百石の醪は昨日までにて殘らず搾揚の日取なりければ、故と屆出も待たず、收稅官吏は不意に出張して清酒撿査を行ひけるが、此方の用意や好かりけむ、撿査は事無く濟みけるに、康右衞門を始、又六も吻と一息せり。恁くて搾揚の濁酒は悉く澄桶に、目張も堅く封じてより七日目、彌最終の皆造撿査を受くる事とはなりぬ。

是や造酒屋の店卸。一期中の仕込の總勘定に帳簿の總算をして、澄桶は固より其他の桶類一式、樽、槽、甕、釜に到るまで、總て記上の諸器械を洩無く撿め、造倉、圍倉、涸倉は更なり、釜屋、搗屋、樽屋、火鉢場、麹室より、仕込に用無き土藏、納屋、物置、さては奉公人の部屋、主の寢間までも隨分踏み込まるゝ例あれば、未明より母屋は上を下への大混雜。會所

は又一入の騷動にて、垂甕の底の一滴まで抄上げ、端酒を一つに寄せて、滓と荒走は酛桶に打合せ、室を撿め、槽を片附け、桶、櫂、麹蓋などの取散けしを集めて、撿査場を掃除するやら、神棚に燈明供るやら、又六は八方に駈廻りながら、殊に何用ありてか、訝しきまで母屋へ往來せり。

午後撿査官は來りぬ。毎年此撿査には少くも三人は出張せしに、今年は例の彭澤と、他に下役らしき收稅官吏の、靴刷毛を横銜にしたるやうに目立ちて髭深のと唯二人なりき。撿査場の倚子に着けば、人足們は悉く火鉢場に遠慮させられけるが、又六は杜氏の役目を是非無く、一人窮屈さうに主の後に佇みぬ。軈て一通り帳簿撿査も了れば、例の髭の收稅吏は石高を撿めむとて、主を案内に圍倉に入りける後に、記上の圖面を披きて細に調たりし彭澤は、獨頷きて、杜氏、此土藏と謂ふへ案内せよと言出せり。

又六は胸に針打つ思を隱して、土藏でござりまするな、と然あらぬ躰を裝ひけれど、自ら澁くる樣子を怪みて、早く〳〵と急立つるに、是非無く母

屋より鍵を籍來りて、表門まで一文字に通りたる土間の、右側の最端なる土藏に案内すれば、中には山を作したる樣々の手道具ばかり、格別酒臭き匂もせざるに、何やら案に相違の彭澤。更に二階に昇りて見れど、爰にも微塵怪しき躰無く、其儘階子を下りて來れば、何所へ行きけむ、在りし杜氏の姿は見えず。不思議と戸口に立出づる出合頭、壁隣なる物置の内より突然出來る又六は、太くも驚ける氣色にて、慌てゝ其戸を閉てむとする擧止の訝く、待て！と一喝して、飛鳥の如く駈寄るを、手早く錠を鎖さむとすれば、倥無き彭澤の早くも立付に片手の杖を挾みてけり。待てと言ふに何故待たぬか、不埒な奴め。さあ、疑はしき廉あるに因つて爰も一應撿めねばならぬ、啓けよと犇けば、又六は切齒をなして、戸口に立塞りたるまゝ、如何な從ふべき樣子のあらざるに、彭澤は居丈高に色さへ變へて、儞官吏の命を拒むか、無法者め。其所退け、と力を極めて衝飛ばされ、我にも無く踉蹌と退歩する間に、彭澤は戸を引啓けて衝と踏入りたり。

唯一つの鴨居際の明窓さへ閉されて、内は宛然黄昏頃の薄暗けれど、一目にそれと見分けらるゝ一面の燃料、樽屋より運入れしと覺しき木片の幾束は、屋根裏まで犇と積重ねられたり。唯見遣りたるのみにては、格別怪しき所も無けれど、有繋は職掌の彭澤は、杖片手に取直して、束と束との間より突入るれば、案の定、何やらむ奥に支へて戞々と音するに、さてこそ隱廠！と積重ねたる束をば片端より引下さむとする時、又六は矢庭に彭澤の後より飛蒐りて、犇と肱に取縋りつゝ、お役人樣、何ぞ是而已は勘辨して下されまし。何ぞ、何ぞ寛大に見免して下されまし。旦那樣は何にも知らぬ事、俺が一量見で餘計に仕込みましたのでござりますれば、咎は俺の身。假令撲たれても、縛られても、殺されても厭ひませぬゆゑ、お役人樣の氣の濟むやう、俺を存分に叱責むで、此内ばかりはお願でござりまする。此通り拜みまする、と涙を流して只管に打嘆きぬ。然れど固より私ならぬ收税撿査の、見免すべきにあらざれば、如何な肯ぬ彭澤の生餌を見たる餓

虎の勢に、効無しとや諦めけむ、又六は貪はりし身を飜して、眞一文字に馳去りけり。

辛くして片端の木片を搔退くれば、歷々と露出たる吉野檜の澄桶。其に並びて、仍二三本は確に隱したる樣なるに、彭澤は先其桶に封印して、更に次なる束を引下さむとする折から、氣立たましき物音に驚きて振返れば、厚刃の斧を馬手に拜して、阿修羅の如く飛來る又六。是はと身を退く彭澤を突除けて、眞向より振下せし斧は健か澄桶の胴を劈けば、潑と罅裂たる親箍諸與に、桶は蓮華に開きて、漲り出づる醪の泉は何時しか米泔汁ほどに澄みたるを、避くる暇無く、彭澤は右の肩頭より全身眞白に浴びたりけり。

想ともいはず、額ともいはず、一面に流るゝ醪は膿汁の如く、又六が忿怒の形相を彩りて、見るさへ凄じさに、彭澤は足も空に遁出せば、此間と急ぐ又六の再び斧を取直して、二本目の澄桶を打割らむと振拜す後より、馬

鹿めと叫びて、利腕緊乎と抱留むるは康右衞門なり。又六は身を悶へて、振解かむと遍れど効無く、放せ〳〵と地鞴踏むを、馬鹿め、狂人め、那麼物振回して。えゝ、無法者めが何爲るぞ、待てと云ふたら待たぬか、と敎圍く聲も逆上せたる耳には入らで、仍も必死と揉合ひたり。

爰は火鉢場に遠く、倉の者等は更にそれとも知らざりしかど、土間を隔てゝ直前面なる母屋にては、早くもそれと聞着け、見着けて、內儀も娘も下女も小僧も一度に駈着けゝるに、康右衞門は又六が斧持つ肱に縋りつゝ、お花、お杉、早う彭澤樣を奧へお連れ申して、召物をと喚けば、內儀は彭澤の脫捨つる醪塗れの上衣を受取りて、まあ、飛むだ事を致しまして。只今濯がせまする程に、何ぞ少時く彼方にて。さあお杉、早う奧へ御案內を急立てゝ、お前はまあ、氣でも狂うたか、無法しやるな、と其目前に立塞がれば、欵と心着たる又六の忽ち力脫して、戛然と斧を取落しぬ。

康右衞門は遮二無二又六を納屋に連行き、出口を閉して土間に引据え、怒

れる聲を密めつゝ、無途方にも程のあつたもの。全躰如何いふ量見で那麼眞似したるぞ、馬鹿めが。運好く先方が遁げられたればこそ可けれ、兎の毛ほどでも傷けて見よ、敵手は政府の御役人、一段事が難しいではないか、と眞赤になりて眈着くれば、俺はお役人樣を何爲う意はござりませぬ。無いならば、何の爲に刄物など振回せしぞ。威嚇か、洒落か、それとも澄桶割るのが始からの。然うでござりまする、始から澄桶を割る意でござりました。其は又何故に、と急込む康右衞門を眤と見遣りて、何故と云うて旦那樣、見露されたが運の極でござりませう。那旋毛曲の役人めに封印を貼附けられて、六千兩といふ大金を無殘〳〵奪られうよりは、いづれ政府へ遞さねばならぬものならば、寧那桶を打割つて、糺問の種を土に埋めた上、俺一人にて咎を引受たらば、旦那樣の御災難は免れやうと思ひまして、と聞けば嬉しき心入に、叱りもならぬ康右衞門は、詳しい話は後にして、早く物置の醪を始末せよ、と故と澁面作りて出行きぬ。

髭の下役は一足先に返して、一人母屋の座敷に通りたる彭澤は、寒凌ぎに少時是なり、と勸めしお召縮緬の丹前を辭りて、胴衣の上に外套を引絡ひ、在りし杜氏の無禮は早や忘れだる如く、內儀を對手に四方山の雜談。毎と變る躰もあらざるに、康右衞門も少しく心落居て、先內儀をば立たせし後、さて最前は雇人めが、謂はうやう無き無禮を働きまして、何ともはや、と重々恐入りて詫せし上、日頃より那者は、野呂又といふ仇名迄附られて、生得愚な奴にござりますれば。殊に只今も色々問糺しました所、全く貴方樣を如何致さうなど、然やうな不埒な了間は微塵も無く、唯隱蔽の證跡を消したい一心に。什麼も殺して何の所爲も無き、手前に豈夫斧を向けたのではござるまい。今更それを咎立はいたさぬなれど、御主人、那物置の澄桶は、と言未了て彭澤は屹と容を正し、よも千五百石の中ではあるまい。殊に隱蔽は那所許でも無い樣子、如何でござる、手前の見込は違ひましたか。御返辭に因つては、家宅搜索を行ひまするぞ、と嚴に言放てり。

恁有べきは豫て覺悟の康右衛門も、今更胸を躍らせつゝ、返すべき辭も無くて、面目次第もござりませぬ。唯何分にも御内濟の程を、と只管頭を疊に擦着れば、宜い、然う仰有れば日頃御懇意の間の事、強ひて依估地もいたすまい。隨分内濟にも爲ませうなれど、御主人、其代手前の方にも、是非聽いて戴かねばならぬ無心がござるが、如何でござるな。必ず御承引あるとならば、其所は則ち讀と歌。

（十八）倉納

十五日の滿潮、晦日の闇、暦は左右舊の事とて、都は既に餅の味を忘るゝ頃、やう〳〵爰許の春は昔ながらに梅咲て、然らば野川の水の音も暢かに、張詰し去年の氷は解けて流れて、東風吹くや、雜煮烹く臺所に初霞、淅場の若水、門の綠。取分今年の仕込は大方は首尾好く、最早澄桶の滓も引果てゝ、昨日悉く大桶に卦ぜられたる新酒は、園倉に目張を揃る五十九本の

廻返、洩來る杉の香に梅の匂の紛るゝも、倒に可慶き春なり。

倉納も今日となりて、是よりは唯夏倉を守る杜氏の外、用無き人足們は一先舊を解く事となりければ、折からの屠蘇を兼ねて一同に暇の盃。小濁の荒走は少に滓を引きたるばかりの麹臭きに、數子、田作、開豆、開牛蒡など式の如く、味噌汁の雜煮は幾椀なりとも、盛の好い所が賞翫。さあ〳〵皆樣が遠慮無しに、と内儀が機嫌顔に、下女、針妙まで目出度がりて歡待せども、此家の箸も是を取納かと思へば、一同も有繋に名殘の惜まれてや、諸は自ら沈み勝なるに、殊に頭分の又六が今日に限りて、面白からぬ氣色なるに座中意白けて、酒も卻舍まず、餅も進まず。

室は變らぬ佛間と納戸の打通なれど、變りたるは實に又六の席なり。去年の甑入祝には、野呂松〳〵と甑番にまで口汚く蔑まれて、末座の隅に卷纖計の替するさへ控勝なりし倉働の、一足飛に二千石仕込の杜氏と立てられて、十何人の人足の上に今日の身の、我ながら不思議なるべし。然るにて

も思出さるゝは其酖入祝の酒に、醉癖惡き甑番の惡戯より、然らでも強顏き戀人の最ど機嫌を損ねしが、と在りし昔の忍ばるゝに就け、今日に限りて暫ともお杉の姿見せざるを不足に、未だ大年のやうなる顏して居たるなりけり。

折から康右衛門は、恁くてこそ大酒屋の主とも思はるゝ黑七子の三紋の羽織に、白扇手にして、醉面白き足取の蹌踉と入來り、搓と又六の傍に座れば、是は〳〵と一同姿勢正して、先明けましてお目出度うござりまする。結構なお正月と口々に祝くを、はい、お目出度い喃。はい〳〵皆も結構な春を迎へて、と盃の獻酬一順濟て、冬中は皆の大方ならぬ骨折にて、お蔭で今年の仕込も先九分通りは上首尾、忝うござる。此調子では、故々三河邊まで抱入れに行かいでも、此方達で仕込は充分なれば、今年の冬からは是非又末長う頼みまする。否冬とは謂はず、お互に程遠からぬ住居なれば、此後とても再々遊びに來やれ。然らば先今日は寛縱と飲むで、目出度う退

去つてくりやれ、と徐ら立上り樣又六に向ひて、奥へは今彭澤樣が年始に見えられたれば、何時までもお杉に對手を爲して置くも失禮。私は是にて中座する程に、皆にも最う會れぬか知れねば、能うお前から、と一同へ挨拶して奥へ入りぬ。

引違へて此度こそは、お杉の出來るならむと待てども〳〵、遂に姿を見せざるに、又六が不興は彌增して、特に日頃より虫の好かぬ彭澤の敵手と聞くに、妬さも妬し、腹も立てど喧嘩もならぬ悔しさを、胸に据ゆるがやうやうにて、盃受くるも煩きに引更へ、人足們は湛納するまで飲食したる後。さて家には女房子も有る身なれば、早く歸りて、己が各自我宿の春を迎へむ、と日頃の後曳上戸も珍しう尻輕に總立となりて、親仁樣、永々お世話になりました。又何ぞ使うて下されまし、然やうならば奥へも宜く。お い喃、皆も壯健で。お前樣も、隨分健でお暮しなされ。

今日を刑と出行く一同の後影を見送りて、獨り取殘されたる又六の貧乏搖

して、思積るゝ處へ、さあ〳〵掃出しまするゆゑ、少し其所をば、と女どもに追立てられて、懶げに起上る後より、お待ちと呼懸けて、中戸口より內儀の手招。御用でござりまするかと引返すを、其儘表座敷へ案內すれば、床には應擧の三幅對を懸けて、正面に鏡餅、床柱には輪柳の綠、椿の紅、黑檀の卓に老梅の盆栽を据ゑて、障子の日影も匂はしく、室の眞中に緋毛氈を布延べ、屠蘇に喰積を陳べたり。彭澤は何時歸りけむ、お杉は何所へ行きけむ、康右衞門一人書院火鉢を控へて、黃八丈の袖の上に裕に居たる曠がましさ。又六は恐懼閾の外に蹲れば、內儀も主も辭を添へて、強ひて火鉢の傍に進ませ、先改めで盃取らせて、固より私の運の強いのには違無けれど、別してはお前が骨折にて、左も右も大桶に圍ふまでに運びたれば、先九分通は成就と謂ふもの、いや這麼目出度い正月は無い。眞の事を言へば、私も思切つてお前に會所を任せたものゝ、代師が溫桶巡ならば知らぬ事、甑揚りの倉働に二千石といふ大仕込は、如何であらうかとは始からの

心配。縱令や杜氏で無うても、切めて年寄位は爲た男をと思うてゐた所、殊勝にも水垢離まで取つて、松尾樣に願立する其志に私も幾と我を折つて、石に立つ矢の喩、然まで一心になつて懸つたならば、爲遂げぬ事は得もあるまい。設令爲遂げずして、元も利も情無い目に遭はうとも、然うしたお前の志を無にして、他の杜氏に取更へるのも氣毒さに、何の皆敗けた所で二千石。捨身になつて內の事に、骨折てくれる其志への禮と歸めれば、それまでと高を括つては居たものゝ、さて又先頃も談した通り、今年の仕込は此野社家が一期の浮沈。龜甲鶴の銘を潰すか、恢復すかの瀨戸なれば、私も蔭ながら松尾樣に祈つて居ました、と眞事虛事打交ぜて、異に恩がらせたる慰勞も、正直一圓の又六は身に浸々と忝なく、旦那樣なればこそ、俺のやうな野呂松〳〵と人の數にも入れられぬ者に、寔旦那樣なればこそ二千石といふ大仕込を、えゝ、忝うござりまする。今は何を隱しませう、俺は玉泡の立ちまする時には、始終角鑿を肌に付けて、已れやれ！泡の消

具合が惡かつたが最期、只一突に此、此吭を刺貫して自滅る覺悟でござりました、と急來る涙は潸々と、膝に玉走る霰の如し。

健氣なりける又六が志を聞くに就け、康右衞門も思はず濕す睚を抑へつゝ、何にもせよ、お前の志は決して忘れは措かぬ、一生嬉しう思ひまする。就いては先頃も一寸談した給金の事、未だ圍には間もあるなれど。否、それは無用にしてくだされ、其代には一生俺をば。抱へて置くと云ふに就いては、猶更給金の極をせずば、と仍も强ふるを、又樣も那麼に言ふのでござりますれば、其は又改めてお談しなさる事にして。今日は元日でもござりますれば、と傍より內儀の留むる辭に、それも然うぞ、と康右衞門の更に一盞と差す盃を、兩手に受けて戴く又六。折から塀を隔てゝ廣場の那方に男女の嘈くは、遣羽子と耳を立つれば、あれ彭澤樣、其はお不正ござりまするゝと媚く聲はお杉なり。

（十九）新圍

目張も堅う圍桶に封じたる上は、最早一番火入の八十八夜前、藤咲亂るゝ春の末方まで爲す事も無く、樽屋、印屋の是より忙しきに引更へ、會所は遊も同然なれば、造倉は固より釜屋も閉し、撿査場も鎖め、火鉢場も空拂ひて、又六は例の納屋の廂なる菜園男の久造爺が許に起臥して、時々思出したる樣に、鵠砧の手傳を爲るより外は、唯食うて寐て、覺めて食うて、鳥も鳴倦む永き日を澤庵漬の噫氣と、お杉の夢のみにぞ送りける。

過し日の皆造撿査以來、不思議にも彭澤の足近くなりて、殊に近頃頻繁の出入。佛頂面の康右衞門が又平素の大風なるに引更へて、來る度毎に喋々と款待す事など、自から奉公人等の是沙汰となりて、然しも迂濶なる又六の耳にも入りければ、それよりは絕えず人の出入に目を着くるに、實にも或時は前臨に頂きたる帽子の庇より、少に金緣の眼鏡のみ露したるが、黃

昏頃の薄暗黒を便に、臺所口より取次を頼むを見るもあり。又或時は二重外套の頭巾眞深に、麗しき口髭ばかり見せたるが、夜更けて提燈も無き闇を幸に、裏の木戸口より送出るゝを見。或は離の茶席に青葉の雨の茶筅の音と與に、調子輕き談聲を聞く事あれば、或は裏座敷に流るゝ水の琴の音と與に、時々冴えたる男の笑聲、いづれか彭澤にあらぬはなきに、又六は何と無く面白からぬ心地して、毎も帶に手拭冠せて、煽ぐ團扇に胸の焔ぞ燃勝りける。

別けて今宵は家路をや忘れけむ、十時過ぎて、何時か半さへ打ちけるに、仍歸るべき氣色のあらざるを氣にして、又六は幾度となく塀の外より窺ひけるが、何時も内には樂しげなる笑聲。此方は最ど悄々と納屋に歸りて、皆造撿査も濟めば、最早役人などに用は無い理なるに、旦那樣とした事が、那麼な奴をば寄附けなされねば可いに、と聞かせがましう呟くを、久造爺は草鞋作る手を遏めて、手刻の疎莨を薫らしつゝ、大哥や、那麼な言を大

きな聲で言はしやんな。あの彭澤樣とやら謂ふお役人樣が、何やら今度お孃樣の聟に極るさうな。設然うでもなつて見ろ、俺等には大事な御主人樣、と皆まで聞かず又六は、又しても爺樣の癲狂、嘘も好い加減に爲なされ、誰が其樣な途方もない言を眞にするものぞ。とは又何故。全躰此方は惡い癖にて、俺の談す言は一から十まで嘘にして了へど、如何に俺じやとて、眞面目な時は眞面目な時、然う毎々癲狂ばかり言うてもゐぬわ。尤今の談は未だ極々の内證で、俺も復聞に聞いたばかり、確にとは受合はれねど、何やら然うでも在らうかと想はれる樣子の、往々俺の目にも入る程に、と爺は飽くまで眞面目なり。

不要〳〵、爺樣は何も知らぬゆゑ、然うした飛むでも無い勘違ひを爲なさるも無理はなけれど、お孃樣に限つて、構へて其樣な事は無い筈。聟の、養子のと謂ふは、去年未だ添掛に懸らぬ前の穿鑿。恁うして見事に仕込さつ出來揚れば、お家は安泰、お孃樣も最う其樣な者をお貰らひなさらずと

も濟む事。何の見たくも無い敗腐聟、縱令旦那樣や御內儀樣が無理に持たさうと爲されても、今更默つて其樣な者をお持ち爲さるやうなお孃樣では無い、無い、決して無いわ。金輪際、お孃樣は那まゝ一生那して獨で居なさる御心、と我事のやうに又六が意氣込めば、久造爺も負けぬ氣にて、此方こそ途方も無い勘違ひ。假令二千石が、縱しや一萬石見事に仕込が出來て、御身代が倍增に成らしやらうとも、一粒種のお孃樣に聟も迎らいで、一生髮結ふた尼でお果てさせ申す道理が無い。第一それでは此野杜家といふものゝ、大事な血統が絕えて了ふではないか。絕えやうが、絕えまいが、何でも彼でもお孃樣は一生那まゝに。うんにや、聟樣をお迎ひなさる。否、爲さらぬと言爭ふ所へ、又樣、旦那樣のお召、と母屋の下女の呼に來りぬ。

又六は言分ありげの口を噤みて、下女の後に從ひ行けば、入るは今日始ての茶室、天井低く、疊狹く、然りとは窮屈なる內に樣々の道具を並べて、

お杉を亭主に彭澤、康右衞門の三人にてさへ狹溢しき入口に、肩を窄めて鞠のやうに蹲れる又六を、さあ、此方へと末座に着かして、豫て知てゞあらうなれど、此方が彭澤樣と仰有る收稅の御係にて、毎の撿査にも色々とお世話になるお方。只今お前の噂を申上げた所、それは面白い壯俠、改めて會ひたいとのお辭ゆゑ、能く先日のお詫をしたが可い、と云ふ康右衞門の辭を引取りて、何のそれには及ばぬ。いや又六とやら、今も御主人から其方の談を承つたのであるが、倉男には近頃殊勝な心入、幾と感服しました。私も當時は收稅官吏であるが、何れ此方へ、否此方とは別懇にいたして、再々伺ふものなれば、以後其方にも心易うしてもらはねばならぬ。先頃の皆造撿査は、那は私の役目なれば致方もなけれど、役目は役目、交際は交際であるから、其樣な事を何時までも根に持つて居てくれては窮る、と口髭撚りつゝ、謙退振たる中に自ら人を逸らさぬ口前なり。然れど前世の仇か、星の合はざる故か、一から十まで小癪に障る又六は、聽答は未矣、

莞爾ともせず、忍びては憎さげに唯其顏を見遣るのみ。耳許近く鳴渡る順正寺の鐘に、彭澤は帶の間より時計を取出して、いや、もう十一時。是は〳〵夜の更けるのも存ぜずに、太い長座をしました、と忙はしく歸支度するを、留むる間に早や席を離れぬ。それではお杉、お提燈を早く、印の無いのをとの父の指圖に、母屋の方へと急行くお杉の後より、其には及びませぬ。お杉樣、もう何ぞと彭澤の出行くを、唯今點けさせまするゆゑ、まあ〳〵、と送出す聲も次第に遠く、軈て母屋の方の嗷々と、遙に大戸鎖す音の聞ゆるに、又六は吻と一息吐きたり。お杉は誰よりも一足先に歸りしが、漸く盡行く油に消方の灯火淡く、壁に映れる影の朦朧と薄淋しう、茶室の隅に兀然と座れる又六の、足音聞きて、振擧げし面の怪しうも物凄さに、思はず二足ばかり後退れば、力無げなる聲の細けれども鋭く、お孃樣と呼懸けられて、襟元漫に寒う覺えぬ。遁出さむも有繫なりければ、氣味惡々立窘みたる姿を、怨めしげに眺めつゝ、

何やらむ言出むとする又六の氣色に、お杉は身を緊付けらるゝやうなる心地のしけるが、折から康右衞門の歸來れるにやう〳〵胸撫下しつ。父の後に小陰れて、搔立つる灯の影に竊と見遣れば、又六は仍も何事をか言出でむとしては、幾度か躊躇ふ心を我と勵まし、旦那樣、あのお役人樣が、今度聟樣に成らつしやるので御在りまするか、と思寄らざる辭にお杉は固より、康右衞門も慄然とせしが、故とらしう呵々と打笑ひて、其樣な根も無い事を唯が言うた。嘘だ、嘘だ、氣も無い事と打消せば、それ〳〵、然うでござりませうとも、嘘で無うてはならぬ理、と又六は始めて心の安堵きたる顏して、直に暇乞して立出る廊下の闇をば仍も、嘘だ、嘘々、大嘘と日の內にて反復しつゝ。

（二十）火入

花散りて浮世に風も夏近く、五月二日は八十八夜に當れば、又六は未朝よ

り一番火入の支吏とり〳〵。人手無ければ久造爺を敵手に、釜屋の竈を焚附け、圍倉を啓き、大桶の封を解きて、新酒を汲出し、溜桶もて釜屋の大釜に擔き入れて、酒暖計百二十五度に温め、温めたるを再び溜桶もて大桶に運入れつ。

母屋にも今日は何やらむ事有りげに、騷然雜然と午前より人出入繁きを、又六も異しと思ひけるが、火入の忙しさに追はれて、覗きに行くべき暇もあらばこそ。軈て正午にもなりて、火鉢塲に膳を運び來りし下女が、一寸手を籍して、と連れ行きし久造爺の、歸らば訊ねむと心待せし効無く、永き日も何時か夕暮の倉に燈火點きて、火入も殘少になりぬれど、如何しけむ、爺は再び手傳にも來らざりき。

夜に入りて母屋の賑さは一入にて、間毎〳〵の燈火晝を欺き、左右に往復ふ影法師は障子を走りて、多勢の人聲湧くが如し。又六は唯一人、煤びたる鐵網行燈の火影も黯き圍倉の土間に、五十二號の大桶まで火入を濟して、

五十三號も早や三釜まで温め了り、今一釜の七石を竈に架けて、更に薪を添へ、火吹竹を吹立てゝ餘念無き後より、大哥や、此方は然ぞ腹が空いたであろ。多度御馳走を貰らうて來ておいた程に、早く夕飯をと久造爺は入來れり。おい喃、待かねまたと又六は火鉢塲へ駈行けば、爺は上框に置きたる刷溜を、圍爐裏の傍に引寄せて、何でも好な物をと差出すを見れば、汁、一坪、平、猪口、吸物、硯蓋、さては燒物、引物など、遂に嗅ぎし事も無き見事なる料理の數々。是はとばかり手も出しかねたる又六を、然もこそと笑立てゝ、何と太い御馳走であらうがの。漫然食うて腹の虫の目を眩るぬやうに要心しろよ、と箸突付けられて、全躰今日は何であるぞ、と氣味惡げに問出せば、何であるぞとは此方こそ何であるぞい。日頃最負のお嬢樣に、お目出度のある事を知らいで其で濟むのか。いやはや、此方の野呂松にも呆れたもの、今夜はお嬢樣のお聟取。えゝ。收稅の彭澤樣を、と聞くより又六は血相變へて、蠱乎と立上るよと見えけるが、引留むる間

る北風の吹去る如く飛出せり。

呆氣に取られたる久造爺は、如何した事やら譯は解らねど、彭澤と聞いて、素足のまゝ飛出せし又六の、常ならぬ容躰に心許無く、後を慕うて走行け[illegible]、通に母屋の臺所に駈入る後姿は認めしが、爰には料理の支度とり〳〵、[illegible]を下への混雜に紛れて、何方へ行きけむ見えずなりけり。折節前を通過やる下女を呼びて、見懸は貧なんだかと問へば、其所ではござんせぬ。今[illegible]樣のお入來と言捨に駈行く。聞くと伴しく其邊に立働きの者們、それ迄一度に手の物捨てゝ、擾々と土間の閾口に群塞がる間より、久造爺も首を突出して其方を見遣れば、八文字に啓かれたる表門の邊に、提燈の星を輝かして、待間程無く媒人を眞先に、親類、緣者、供、迎の一同に取圍まれ、[illegible]と邊來るは今宵の花婿彭澤令之助。爰邊は今も仍黒龍紋の袴に、金緣の眼鏡と、八の字髭は似合はしからねど、色白く、長高く、傍目も振らず打通る重々しさ、實に〳〵三國一と見えたりけり。

久造爺は再び其四邊を、限無く[illegible]廻りしかど、遂に又六の姿は見えず。萬一と思ひて、更に釜屋に來て見れど、爰にも人影は無く、竈の下のみ盛に燃立ちて、大釜の酒は湯玉沸騰りて煮返るに、是はと慌てゝ薪を退く時、大變だ、酒が沸々湧立つてゐると騒ぐ聲に、又六は漸く穀棟より下り來れり。おゝ大哥や、大變だ、酒が沸々湧立つてゐると騒ぐを外に、又六は深く物思ひつゝ、釜樣、那が眞にお孃樣に違無からうかと、釜より棒に問懸くれば、釜は揺出せし炊爨に水洗けて、爆と立つ煙に面を背向けながら、此方は見たのかやと問返せば、見たわ。裏の庭口を乘越えて、障子の隙から覗いて見たに、何やら躰格はお孃樣のやうでもあれど、頭から綿被をすつぽりと冠つてゐるゆゑ、誰とも確には、と又六は小首を傾けて、今更お孃樣が釜を取らしやるとは、何も俺には受取れぬ。殿やお花ではあるまいか。馬鹿云ふな。什麼御大名潤の家ぢやとて、お嬢樣が天竺迄で呼集めて、此樣な大騒をする家が天竺に釜も有ものかい。さあ大哥や、釜く此湧過ぎた酒を何とか爲ねば、え、是、

圍に惡からうが喃。

心着けられて又六は、柄柄杓忙しく汲出し、一抱もあらむずる大溜桶に漫々漾へたるを、慣れし事とて少に片手を添へたるまゝ、輕々と肩にして、小走に廣場の垠なる圍倉に運び、勾配急しき踏板を足許輕く擔昇るや、渹然と大桶に打明けて、又も引返し、運入れ、軈て七石殘らず圍桶に合せ了りし後。更に温度を斗りて見れば、仍酒暖計二百度を越えて、舞揚る湯氣は白煙の如く、桶は熱して湯婆のやうなり。此まゝ明朝まで措きたりとて、容易に冷むべくもあらざれば、攪冷さむとて涸倉より手頃の櫂を取來れる時、又もや慌しげに馳來れる久造爺。今綿帽子を脱つて表座敷へ出なされた程に、お嬢樣か、お嬢樣でないか蚤う來て見や。蚤う〳〵と急立つるに、それ見免しては、と又六は櫂を片手のまゝ、足さへ空に駈着くれば、表座敷の十疊、十八疊の二間を打通したる廣間に、星を列ぬる燭臺の光は金屏に輝きて、禮服の折目正しう兩側に居流れたる親戚一同、彌茲に十一獻の

大酒盛。嫁御寮が衣裳限の色直も是よりにて、今しも花婿と並びて面羞げに正座に着きたるお杉は、實に目覺むるばかりの扮粧にて、高島田に角帽子式の如く、土地の風習とて、一獻毎に白、赤、黑、紫、と次第に着更へ行く其緋鹿子の總模樣に、鴾色鹿子の下着を重ね、緋の紋縮緬の長襦袢、金入の厚板の丸帶、繻珍の振袖の襠裲姿は常と異りて、宛然繪に見る何姫の如く、御光も映さむばかりに氣高くも又妖艶なり。

又六は廊下の仲戸口に立塞がりたる多勢の後より、一向それにのみ目を奪られて、少焉は身も魂も醉へらむやうなりしが、不圖右手に膝を並ぶる彭澤の姿に心着くや、全身の血は忽ち沸上りて、瞋恚の焔に呼吸さへ熱く、胸は悸がるゝ許の心地しつ、不覺に廣場に踽ひ出づれば、月無き闇の物凄く、微に一つ星のやうなる圍倉の火影を便りて、宛然冥途を辿る身の謂ふ方も無く裏悲しく、手に取る如き母屋の騷は後に聞きつゝも、堪へられぬ心細さを覺えながら、行くほども無く、遽に重き温氣の氛と息苦しきに、

不圖我に復れば、身は何時か倉の内に入りけるなり。

今も仍緊乎と握れる片手の椢に心着きて、又六は直に踏板投悪け、衝と駈登りたる例の五十三號は、六尺五寸の胴返。二十五石を餘る大桶に漫々と漲へたる熱酒は、仍弗々々と沸立つ小泡の物凄き上に、椢杖支いて盈乎と立てる時、さしも喧しかりし母屋の人聲一度に歇みて、水を打ちたるやうに鎮まり返りしと思ふ間も無く、所は高砂の尾上の松も年古りて、老の波も寄來るやと小謡の一節。聞くと同時に擯と椢取落して、怨の一念眸に籠めつゝ、屹と眈めつくる母屋の謡は、此下蔭の落葉掻くなるまで、命生存へつゝと一際張揚げて、節面白う聞ゆる途端。大叫喚！の一聲と與に、滾と立ちたる湯氣は濛々として、なりたる迹には、唯五十三號の大桶のみ、在りし又六の姿は消えて無かりけり。次第に散行く湯氣は彌々薄く、薄く、梟は窓の鍛網を潜出でゝ、外面の冷なる夜風と消去る那方には、仍何時までもいきの松、其も久しき名所かな。

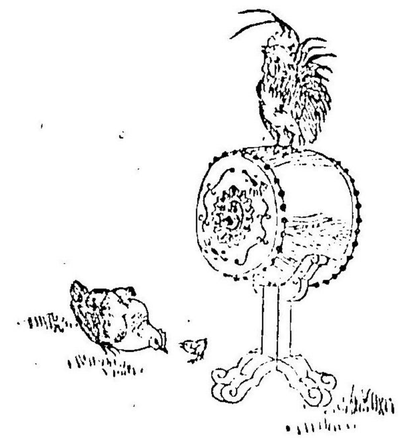
＊　＊　＊　＊　＊

此年の秋も稍雁下揃ふ頃となれば、冷下何百駄、日々の荷造さへも追はれ勝に積出れけるが、間も無く龜甲鶴の銘は、再び開東に灘酒と譽を競ひぬ。それよりして夏も露けき園倉の奥深く、西の隅なる土間の薄暗黒に胴返一本、不斷の目張は堅く封じたるまゝ、永く呑口も不明の圍桶と與に、毎年春は暮行く八十八夜の更けてお杉が、爰許代々の過去帳に無き無縁佛に、心ばかりの手向草。是や菜園男の久造爺が、去し夏の初方より唱出せし藪砂の念佛拍子と合せて、野杜家の三不思議、と今も土地に其名高し。

龜甲鶴

終

(二十九年二月稿)



松島剛長谷川哲次兩著

新式英文典教科書

定價三十錢

本書は特に日本學生の爲めに編輯したるものにして一々文法上の要義を日本學生の了解し易き樣日本語にて丁寧に說明し、各章每に英文和譯、和文英譯、並に會話の練習を爲さしむる樣編述したれは此書に據りて英文法を敎授すれは文法を知ると共に英文を和譯し、和文を英譯し、又英語會話にも熟達するを得べし英文法を學ぶの捷徑之に若くはなし

郵稅四錢

新編 理科示敎

理學士　宮本久太郎著
金文字クロース製
定價二十五錢
郵稅四錢
印刷鮮明紙質佳良

從來世に流布する理化の册子は、大概理學化學を箇々に記述し或は之を折衷すと雖も、時に殆んど相互の因緣を隔絕したる者なきにあらず、されば學に入る事日尙淺きの少年に於ては兩學を通ぜて比照應用するに困難ある事論を待たず、蓋し理化示敎なる科目は理化學上卑近の智識を授くるは勿論なれども又學生をして習學の傍ら新生面の興味を得さしめ以て其門に入るを易からしむるにあり、故に理化學上箇々の事實を列記するのみにては徒らに學生の記臆力を疲勞せしめ反つて斯學を厭ふの念を起さしむ、本書編纂の要は、全く二者を混記し且筆を分つと雖、實は全篇を通ぜて聯環せるの方法なり、左れば敎授時間の都合を斗つて可成簡易の解釋を擧げ、且每章の末に其要點を摘記し學生をして容易に要領を得せしむ加之らず、本書揭ぐる處の實驗は、如何に理化學器械に乏しき處たりと雖も容易に施行せらるべし乞ふ鑒識を給へ。

學校用

松島剛先生編　最良西洋紙印刷金巾表裝

新式掛幅世界全圖

東半球　壹軸
西半球　壹軸　全二軸

長五尺
巾四尺

實價三圓五十錢

本圖ハ小學校、中學校、女學校、師範學校其他中學諸學校ノ地理、歷史ノ敎授上ニ適用スベシ又家庭敎育上ニモ便利ナレバ大家貴族ノ家庭ニハ勿論中等以上ノ社會ニハ欠クベカラザル敎育具ナリ

(一)海流ト溫海ハ記號ヲ以テ判然ト表ハシ又寒流ト暖流トノ區別ヲモナセリ

(ホ)河流ハ極メテ筆太ニ書シタレハ數間ヲ距ツルモ能ク之ヲ見ルベシ

(ヘ)大都會ノ位置ハ大ナル記號ヲ以テ表ハセリ

(ト)本圖ノ四隅ニハ特ニ八個ノ小圖ヲ掲ケテ赤道、回歸線、極線、五帶等ノ區別ヲ示スニ便利ナラシメ且ツ北極、南極ノ地形及水陸ノ分布ヲ明ニセリ

(チ)氷山ノ流域ヲ表ハシ、日附變更ノ經度ヲ掲ケ、又各地ノ時差ヲ示シ易カラシメタリ

(リ)右ノ如クナルヲ以テ獨リ地域ノ敎授ニモ適用シテ頗ル便宜ナリ

(ヌ)本圖ハ大日本圖ト同シク紙面ニ光澤ヲ加ヘサルヲ以テ光線反射ノタメ學生ノ視官ヲ害スルノ恐モナク又適宜ヲ地名等ヲ記入スルヲ得ベシ

(イ)本圖ハ球形ニ畜キタルヲ以テ地球ノ形狀ヲ敎ヘ、經緯度線ノ關係ヲ覺ルニ便ナリ

(ロ)土地ノ高低ト山脈ノ走向ハ彩色ヲ以テ三段ニ區別シタレハ一目判然タリ

(ハ)火山脈ハ朱色ノ記號ヲ以テ點綴シタリ

松島剛先生編　最良西洋紙印刷金巾表紙

大日本全圖

●長五尺幅六尺五寸●

實價金貳圓五十錢

(一)本圖ハ小學校中學校女學校師範學校其他中學諸學校之地理歷史ノ敎授上ニ適用スベシ又家庭敎育上ニモ便利ナレハ大家貴族ノ家庭ニハ勿論中等以上ノ社會ニハ欠クベカラザル敎育具ナリ

本圖要點

●新領地臺灣島ノ地圖ヲ加ヘタリ
●土地ノ高低ハ彩色ヲ以テ四段ニ區別シ一目判然タリ
●河流ヲ筆太ニ書シ大河、長流ハ四五間ヲ距ツルモ判然見ルコトヲ得
●海岸ノ地貌ハ記號ヲ以テ其沙洲タリ峭岸タルコト一見判明ナリ
●都會ノ人口ハ記號ヲ以テ其多少ヲ區別スル殊ニ人口一萬以上ノ都會ハ二三間ヲ距ツルモ區別スルヲ得ベシ
●地名ハ總テ成ルベク細字若クハ影字ヲ以テ註記シタレハ暗射地圖ノ用ヲ爲シ而シテ敎師ハ自由ニ之ヲ視ルコトヲ得ルヲ以テ敎授上ノ便宜大ナルベシ
●本圖代價ハ製版ノ美麗ナルニ似ズ極メテ低廉ナルヲ以テ如何ナル學校及家庭ニ於テモ容易ニ備フルヲ得ベシ

森鷗外著

つき草

紙數一千頁　實價壹圓廿錢

鷗外氏の言を立つるたゞに一時のためにするのみならず、こゝをもつて他人の放論恣詭は當時に在りては甚高く甚妙なるが如くして而も時去りて之を觀れば鉛の光を失ひ霜葉の長く鮮やかならざるが如きに似ず、時を經て之を視れば其音いよ〳〵味ふべく其論いよ〳〵亘んずべく、明珠なるが長く耀き松柏の節におくるゝが如きをおぼふ。つき草とは著者が謙遜の語のみ。此篇收むるところの論文、篇々皆其識や博、其文や雄、一々の輕薄なる文字なし。誰かうつろひやすく消ゆるに早き花の色なりと云ふべき、江湖諸君一本を購ひて館玉はゞ、此廣告の偽らざるを知玉はん

近刊

松島剛編

臺灣事情

從來臺灣地誌の發行せられたるもの少なからず然れども其の多くは一片の小冊子にして想像談を以て滿たされたるが如し本書は二十餘年間臺灣の傳道に從事し其社會百般の事情に通曉せるマッケー氏の著書により傍ら諸書を參考して編纂したるものにして實業家海陸軍人其他紳士淑女の好參考書なるのみならず地理學上尤も確實なる材料たり而して其實歷談の如きは興味深く宗教家の傳道上大いに資する所あるべし

藤田東湖

紫山川崎三郎氏の新著にして博引宏證逸話逸聞の天下に洒れたるものを聚輯し非毀正公明なる眼を以て巨細に此偉人を評論したるもの立論の鞏固にして論述の適當なる紫山川崎氏にして始めて見るべし

月夜鴉

呱々と泣く門前の拾兒を拾ひ上げたる迴塚巖水氏チン〳〵ヨウの小守唄に育ひ乳する新夜の鉦腸來る斗りなる千辛万苦の喞は見那世に立つ一箇の丈夫名づけて月夜鴉と題して一冊子となる其實價……

あじろ木

川上眉山著　武內桂舟畫　實價廿錢　郵稅四錢

世渡る海の暗潮の寄せては返す海原に漕損れたる一葉の舟は何處に漂はん世を捨てゝ又世に捨てられて世渡り兼し二人の書生今はさて志を定むる湯島天神互ひに誓て左右に立別れたる後の日に逢ふて語れる長話太鼓餅屋に一睡の夢はさめたる盧生の邯鄲其夢も又夢の中なる夢にして悟むれば化して土となる人間五十年の一生は一万八千二百五十朝の幻に起きつ寢つ寢つ起きつ轉びつ立ちつの長物語

狂言百種合本

實價壹圓二十錢　遞送料廿錢　紙數千三百頁

遠からんものは音にも聞け近くば寄つて眼にも御見の合本は流るゝ筆の川竹の水は絶えせぬ古河の默阿彌翁が一世の傑作勸善懲惡視機關は村井長庵の惡巧み兄を殺して娘を賣る極惡無道の行ひも名高き奉行の御捌きに惡は亡びて善榮ふ偖其次に扣へしは茲江戸小腕ながらも達引の五分もすかさぬ喜三郎笠森お仙の澁茶には横目で惚れる御客樣偖御贔負の明石島藏松島仙太が勇み肌海老屋のおせんは故人半四郎の書下しなる箱根の鹿笛代つて下卷に移りては屑買善吉北向虎藏善と惡との二筋道其一筋の忠義者が首尾能く掘出す三千兩に忽ち榮ふる極樂世界いづれ杜若と引きぞわづらふ面白づくめ三人吉三廓初買新皿屋敷に月雨暈水天宮利生深川身光お竹功いづれを見ても面白く飽く事忘るゝ筆の綾はこれ川竹が譽の脚本、値段の安きは驚く斗り試しに買つて御覽ぢろと謹で申す

聚芳十種合本

實價一圓　遞送料廿錢　紙數千七百頁

紅葉美妙抱一南翠名たゝる作者諸先生が吾劣らじと筆を揮ひし聚芳十種此度合本と姿をつくりて皆々樣へ御目通りも恥しからぬ衣裝つき直段は無闇に安けれど安からう惡からうなら試しに一本を讀み玉へ弊堂が誓つて僞りは申すまじ

梨園の落葉

坪内逍遙先生が多年　斯道の爲めに經營されたる高論卓說院本雜錄等を輯聚したるものにして梨園の子弟を開發誘導するにつとめたるもの其親切丁寧なる實に空前絶後と稱すべし就中其筋書中近松節一代記の如きは明治院本の模範夢幻劇の龜鑑として後世に法るべきの妙文字なり

坪内逍遙著
小林清親畫
實價五十錢
郵稅八錢

近刊
ふた心
春のや著
桂舟畫

坪内逍遙 **列傳體小說史** 水谷不倒

山田美妙 **日本字海** クロース製

日就社編 **松菊餘影** 偉人瑣談

東武士 寫眞美譽

中島逐波著　富岡永洗畫

流も濁る徳川の浪逆巻ける大瓦解切ツつはツつの修羅場を外に見做して三浦崎敵と味方の中島三郎父子は眞田の九度山貞烈美淑の若後家が落花を瞰破る上野山危うき災難助けたる武勇無双の侍は死にしと思ひし我夫逃立ち歸る三浦の館敵の間者を欺いて父子が乘出す相模灘五枝廓の戀ひに身は砕けても名は遺る花は櫻木人は武士共傑を今に映して東武士寫眞美譽の一巻は劇仙逐波が作り物畫工は名代の富岡永洗二輻對なる女形と座頭一幅のそいて御覧じろ

木版彩色半紙判
寸珍和服美本
谷山谷武新作掲出

煩惱菩提花柳れ多福

笠之露

萱邨作
永洗畫

初春の、晴めにかゝぬ、此小本、新内浄瑠璃三下り、大津絵な
ども見ゆるぞへ、アレ設がよい、設の名の、和設奨
本さあるわいな

飛乘太郎

陸斎著
半古畫

天之巻近刊
後巻續刊

五十餘情

うきよ繪

一線一點に神宿り、五色五彩に異光を放つて、喜怒の人物花卉に狂ひ、哀樂の眞情山水に躍るの傑作、師翁小說の口畫として發刊し來りたるもの、年々歳々に多きを加へ、殆んど萬を以て數ふるに猶餘らんとす。斯かる妙手の徒らに放逸して、大畫の空しく泥中の玉となるを惜るゝの餘り、五十餘情と名けて其中に蒐集し、稜々出版して江湖に紹介せんとす。東風先づ梅柳を度り來て、暄和の春睡窓前に覺く頃此畫を繙かんか、氷圃氷のごとく解け、心神春水の盪々たるに似て、人生の樂園忽ち室裡に浮動すべく、依て以て新春の贈品、之を措くものはあらざるべし。若し夫畫中の組織を指さんか、省亭、桂舟、永洗、蕉窗、年方、節村の諸先生が、傑作中の傑作、粋中の粋を竭め、加ふるに麗麗簡明の解釋を添へて、讀み且眺むるの樂を備へ、彩色を鮮明に、彫刻を訂正し、南枝の香芬、百花の兄たるを當かに證すといふ。

袖珍府縣
明細地圖

松島剛編
木崎盛政製圖

●地理教科參考用旅行携帶用
●面積、人口、産物、農工商業の統計並に鐵車鐵船發着表、名所古跡、温泉、名物等の案内附

彩色上等
西洋紙摺
地圖五十
三枚長サ
巾

本圖は右の如き目的を以て編成し印刷鮮明山野河湖市町村落道路航路等百般の世務に有用なる事項は一度卷を開けば恰も掌を指るが如き感あり

小ねこ

弦齋居士作
富岡永洗畫

小猫は飛出し申候、ニヤンと鳴いて貳百回プチにあらずミケにあらず大鮫と闘ひ浮世と闘ひ龍と化し虎と變ゝ、果は亞米利加大陸を震動して神州男兒の眞似を示す、斯の如き長篇、斯の如き化猫の光鉅陸離壯絶快絶一度讀めば心神恍惚として卷を措く能はざらしむる者は世界の動物園にあらずして春陽堂の店頭に御座候

日の出島

蓬萊之卷
鶴龜之卷
近刊

弦齋居士作
鈴木華邨畫

アーラ目出度いな〳〵、大平洋の波の上にヌッと出でたる日の出島、昇る朝日の勢ひに戰勝の餘威を以て是より世界に大濶歩、いとも目出度き時節で御座る、斯る目出度き折柄に愚痴や泣事ベソ〳〵言ふは我が文學會の大恥辱と獨りで勇む弦齋居士、天地を呑んで腹に入れ世界を丸めて團子にする例の壯絶雄絶縱横自在の健筆を以て描き出てたる一大雄篇、明治年間は言ふに足らず、日本開闢以來の大小説を作らんと先づお目見えの御祝儀は蓬萊の卷に鶴龜の卷、苟も此の日の出の國に生れし者は讀むも讀まぬも一本を座右に置き給へ、惡魔逃げ出し、貧乏神目をまはす、万福億來、帝國万歳

戀のとりこ

幸田露伴著
渡邊省亭畫

題して戀のとりこといふ、人或は戀に惱める男の下らぬ煩悶を、また例の戀愛小說流に書けるものならんと推測すべきが、左樣に思はせて、グッと意外の飛びはなれたるところより、作者が筆の力もて、途方途徹も無きものを現はし出し江湖讀者の眼前につきつけ、オヤッと云はする不思議の趣向、出版の曉は是非購讀あれ、如何なるものが讀者の眼の前に現はれ出づべきか、秘密の秘密、極々秘密、今こゝで申しては花無けれど、聊か秘密を洩さんに、此篇を一讀し玉ひなば、讀者が眼の前には忽然として、金毛の獅子に騎りたる婀娜たる美人笑ひを含んで現はるべきなり、象に騎りしは普賢の化身、獅子に騎るといへば扨は文殊が女になつたるなど、思ひ玉ふな、正眞正銘の眞の美人、しかも讀者に打向ひて、朱唇をひらきて何事をか語りかけんこと受合なり。

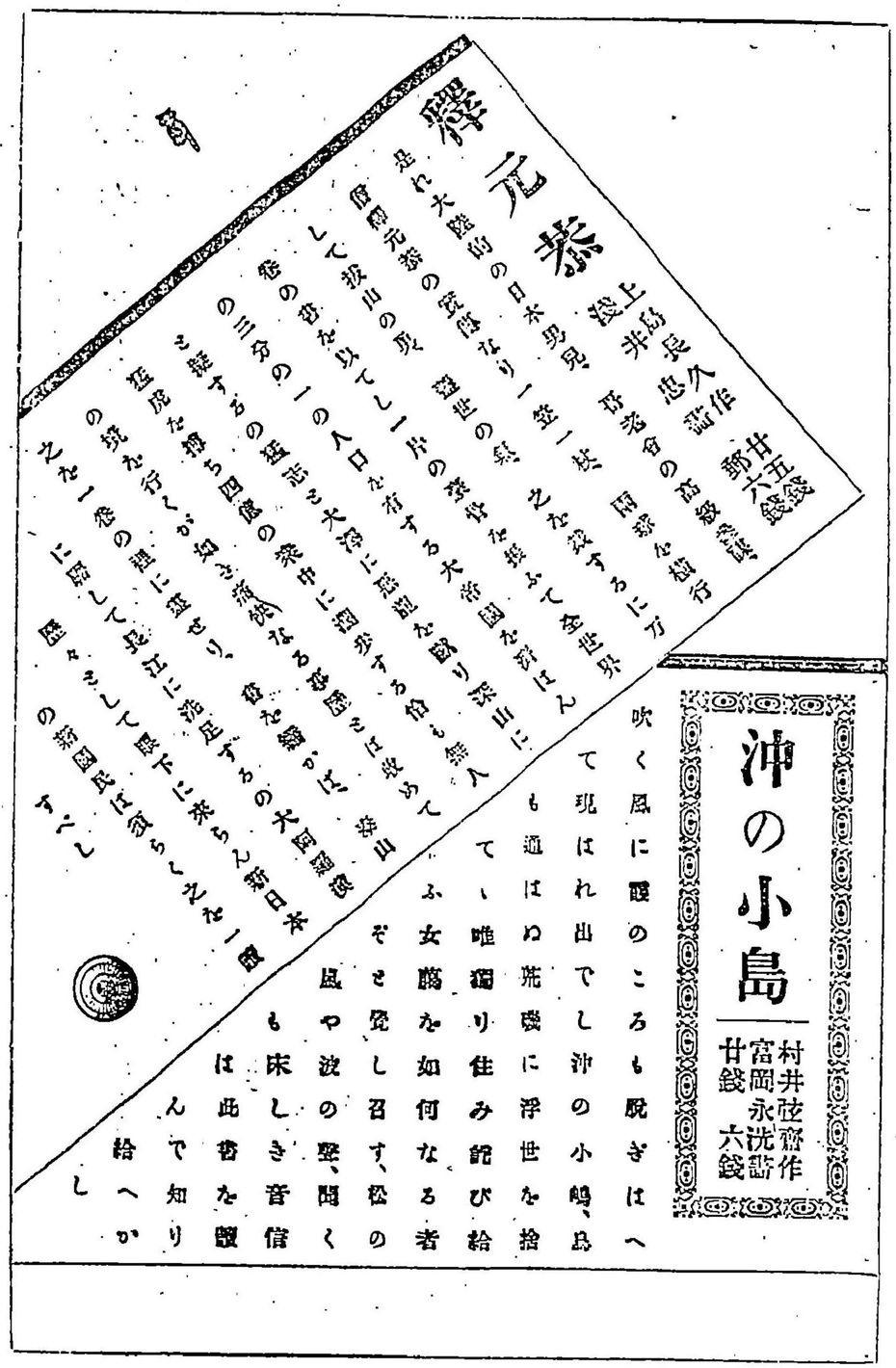
月夜鴉

遲塚麗水著
富岡永洗畫

實價卅錢

坊やは能い子だねんねしな
坊やの御守は何處へ行つたと唄
ひし聲もやう〳〵凍る霜夜の鉦浮
世の義理なる鬼にせめられてきづな
を斷ちたる母親の子を拚る藪の物蔭よ
り拾ひ上げたる此世の佛恩愛慈愛のや
さしさに今迄蟲りし空さへも晴れて冴
えたる月夜鴉喜び鳴の聲の下佳人出て
俠奴走り千變万化の黑影東西に走り
宛然走馬燈を看るが如きもの本
書の妙尤も深き所となす。

郵税六錢



釋元恭

上島長久作
浅井忠畫
廿五錢
郵六錢

是れ大隆尚の日本男兒　昔者今の高級讀
僧釋元恭の實傳なり一笠一杖　兩親を植行
して拔山の勇　蓋世の氣　之を裁するに万
卷の書を以てし一片の義骨を振ふて全世界
の三分の一の人口を有する大帝國を鎮ひ
と擬するの猛志と大澤に惡龍を鎮り深山に
猛虎を搏ち四圍の衆中に圍攻する倍も無人
の境を行くが如き瀟洒なる事蹟を繪がば　姿山
之を一卷の裡に盡せり　後を繼がば大阿羅漢
に勝して畏江に浩足するの大阿羅漢
隱々として眼下に來らん新日本
の新國民は須らく之を一讀
すべし

沖の小島

村井弦齋作
富岡永洗畫
廿錢　六錢

吹く風に霞のころも脫ぎはへて現はれ出でし沖の小嶋、島も通はぬ荒磯に浮世を捨てゝ唯獨り住み詫び給ふ女臈を如何なる者ぞと覺し召す、松の風や波の聲、聞くも床しき音信は此書を讀んで知り給へかし

片輪車

福地櫻痴
富岡永洗

北條早雲

澁柿園著
武内桂舟

雪わり草

大橋金舟
鈴木華邨

近世偉人談

冷血翁著
梶田半古畫

歳暮年玉物用美本

著者畫工	書目	定價
坪内逍遙著 小林清親畫	梨園之落葉	金五拾錢
迎塚麗水著 三島蕉窓畫	照日之松	金卅五錢
村井弘齋著 水野年方畫	鷲の羽風	金卅五錢
風流翁著 水野年方畫	名人逸話	金廿五錢
さかのや著 鈴木華邨畫	文の庫	金卅五錢
二葉亭著 鈴木華邨畫	片戀	金卅五錢
江見水蔭著 富岡永洗畫	鎌わぬ坊	金廿八錢
迎塚麗水著 富岡永洗畫	さんざ時雨	金三十錢
川上眉山著 武内桂舟畫	網代木	金二十錢

追々年も押詰りて鮭や海苔に羽根の生へて飛ぶ世の中とはなりたれど年々歳々御定りの食用品の贈答も餘りに趣考なきに似て咽喉三寸を命の網呑み下したら夫れなりに誰から呉れたか貰つたかも更に知れず御返しも忘れて飛んだ恥をかくは必竟贈答品の不詮索からをこるなり其處を察して弊堂が進物用の小説雜書は只一時の樂みならで孫子の末迄の寶物讀んで面白く有益なるは請合保證表紙口畫袋の趣考は弊堂專有の意匠に名人の筆最上の刷を施したるものなれば譬はゞ櫻に梅の薫りを持たせ柳の枝に咲かせたらん如し殊に御進物用としては古今無類の上包の粧を施したれば御出入先の奥向や紳士淑女の御遺物に此上もなき珍品なり

花合十二ヶ月

十二畫伯揮毫奉書刷極彩色
懸額用一枚實價金十二錢
十二枚一揃前金一圓廿錢

入神の名畫は當代の畫伯が靈妙の健腕になり彫刻の技印刷の術凡て當代の名工名手に委囑して滿腔の妙技を鍛練の靈腕に凝したるものなれば懸額用として天下又比類無きの畫幅たり其一月より十二月に到るの間櫻桃梅李の妍飛禽走獸の狀悉く斯道の名人が各其得意とする處を選びたるものにて配色の妙運筆の靈禽は將に蜚ばんとし蕾は將に開かんとす試に一朶を購ふて其美妙を掬し玉へ

既刊 一月 老松旭光圖 鈴木松年
既刊 二月 月下早梅圖 渡邊省亭
近刊 三月 細雨柳絮圖 川端玉章
近刊 四月 春風駘蕩圖 松本楓湖
近刊 五月 藤花拂水圖 荒木寛畝
近刊 六月 牡丹蛺蝶圖 瀧和亭

七月より十二月迄執筆の畫伯は川邊御楯岸竹堂鈴木華邨今尾景年熊谷直彦久保田米仙の六氏とす追て一揃十二枚前金御注文の方へは美麗精巧なる額緣を進呈す

省亭畫藪

逐次刊行

故容齋翁の遺風を傳へて更に一家の機軸を出したる斯道の大家渡邊省亭氏虎を描けば風起り龍を描けば雲從ふ花卉百鳥其圖する所の物悉く天感じ神應ずるかと怪しまる弊堂曩に先生に乞ひて美術世界の編輯を托し大いに美術界の喝采を博したりしが彼は故人今人數十氏の靈筆を廣く輯めたるものにして單に先生のみの執筆にかゝるは第廿五卷花鳥の卷なりとす弊堂深く之を遺憾として強いて先生に乞ひ茲に省亭漫畫と題して先生の隨筆を收錄して發刊せんとす印刷彫刻元より天下の名手を網羅したれば其の出づるの日は江湖を驚かす事千古に稀ならん。

明治三十年九月廿一日印刷

同　年九月廿六日發行

實價金拾五錢

編輯兼發行者　東京市日本橋區通四丁目五番地　和田篤太郎

印刷者　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目廿三番地　佐久間衛治

發行所　東京市日本橋區通四丁目五番地　春陽堂（本局電話五十一番）

印刷所　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場（電話本局十九番）

廣告

弊堂は從來の書目の外愛顧諸賢に贈呈する爲今般新
柒美麗なる百廿二頁の四六版書目を調製せり此書目
の編纂たるや實に一種優美の體裁を具備し表紙は書
伯鈴木華邨子の筆にかゝり書中挿入の繪畫數十葉も又
同氏の丹青よりなるもの多く各著者の肖像は精巧なる
寫眞版に附して挿入し以て諸君諸賢をして著者の馨
咳に接するの思ひあらしむ。右の書目御入用の諸賢
は乞ふ郵券四錢を封中して御申込あらん事を弊店は
即時發送するに吝かならざるものなり。

37
32

77
32

３１０６１８－０００－０

7-7－３２

亀甲鶴

小栗 風葉 著